

43012

教科書文庫

4
210
42-1941
20000 71550

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

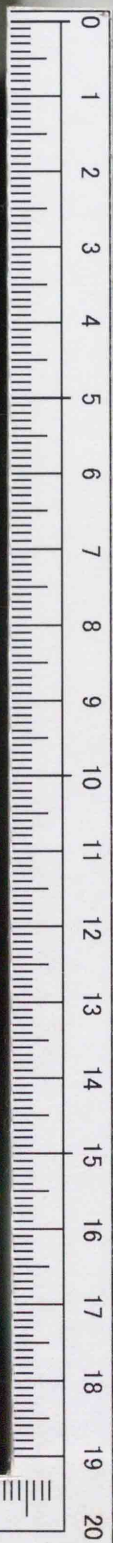
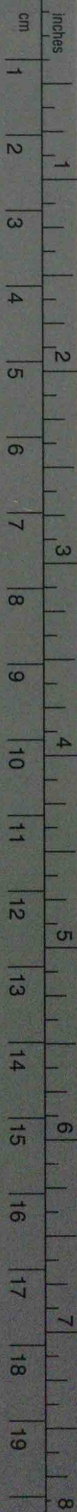


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



訂補郎次彦本松 著行周浦三

育教子女

書科教史國

[用級初]

據準目要授教新

[用校學女等高]

版正修



資料室

濟定檢省部文

用科史歷校學女等高 日二月九年六十和昭

教科書文庫

4

210

42-1941

2000071550

46
210
D816

育教子女 書科教史國

[用級初]

著行周浦三 士博學文

訂補郎次彥本松 科理文京東
授教學大

(用校學女等高)

広島大学図書

2000071550



改版について

本書は、はじめ故文學博士三浦周行先生の編纂に係り、高等女學校用國史教科書として、久しく斯界の推重するところであつた。

然るに、博士物故の後、補訂版を公にするといふので、小生は先生の薫陶を受けた一人であるために、その事に従つた。偶、昭和十二年三月文部省に於て、國體明徴國民的信念涵養等の目標の下に、歴史科教授要目の改正があつたので、更に改修に志し、専ら故博士の歴史教育の精神を推闡し、新要目の趣旨に則り、一層時代に適切な教科書たらしめるやう苦心を重ねた結果、漸くこの改訂版を得、書名を改めて女子教育國史教科書としたのである。

なほ教授者各位には、左記諸點について本書の特色を認められんこ

とを望む。

一、國體を明徴にし、國民精神を涵養する趣旨に基づき、御歴代の天皇の御聖徳並に皇族の御事蹟は、周到な用意を以てこれを顯彰し奉ると共に、よく大義名分を明らかにし、殊に帝國憲法につき、國體の明徴と臣民奉公の道とを昭示することに努めた。

一、文化については、我が國民が我が國本來の文化を基として外國文化を攝取醇化した顛末を綜合的に知らしめることを期し、單に文化に關係ある事項や人名等を羅列的に叙述することは、嚴にこれを避けた。

一、女性に關する史實に重きを置き、女性が國家社會及び文化の進展に如何なる貢獻をなしたかを瞭然たらしめた。

昭和十二年十月

松本彦次郎識

女子教育 國史教科書 初級用

目次

第一篇 上古史

第一章	神代 肇國の宏遠	一
第二章	神武天皇の御創業	四
第三章	皇大神宮の御創立 敬神尊祖の美風	六
第四章	皇威の發展	九
第五章	文物の傳來	二二

第二篇 中古史

第一章	政治上の革新	一八
第二章	律令の制定	三
第三章	奈良時代の趨勢	二四

第四章 奈良時代の文化…………… 二六

第五章 平安時代初期の趨勢…………… 三三

第六章 攝關政治 藤原氏の專權…………… 三五

第七章 外國との關係…………… 四〇

第八章 平安時代の文化…………… 四一

第九章 後三條天皇 院政…………… 四五

第十章 地方の情勢と武士の勃興…………… 四七

第十一章 源平二氏の盛衰…………… 五三

第十二章 平氏の滅亡…………… 五四

第三篇 近古史

第一章 鎌倉幕府の成立…………… 五八

第二章 北條氏の行動…………… 六〇

第三章 元寇の撃攘…………… 六四

第四章 鎌倉時代の文化…………… 六七

第五章 北條氏の滅亡…………… 七一

第六章 建武の中興…………… 七四

第七章 吉野の朝廷…………… 七七

第八章 室町幕府…………… 八二

第九章 室町時代の外交…………… 八六

第十章 室町時代の文化…………… 八九

第十一章 群雄の興起…………… 九一

第四篇 近世史

第一章 織田豊臣二氏の統一…………… 九九

第二章 安土桃山時代の外交と文化…………… 一〇六

第三章 江戸幕府の創立…………… 一一二

第四章 海外諸國との交通…………… 一一八

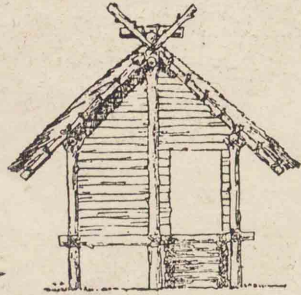
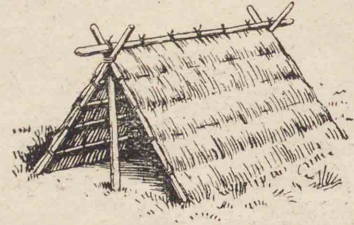
第五章 元祿の世相 學問の復興…………… 一二三

第六章 江戸幕府の中興…………… 一三八

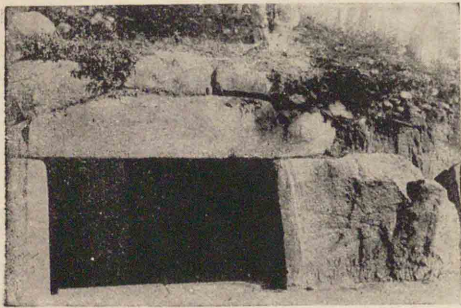
跡遺・物遺び及俗風の古上



装服の古上



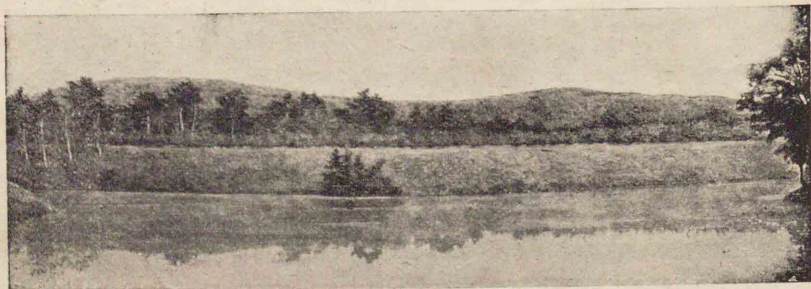
上古の家屋



石塚



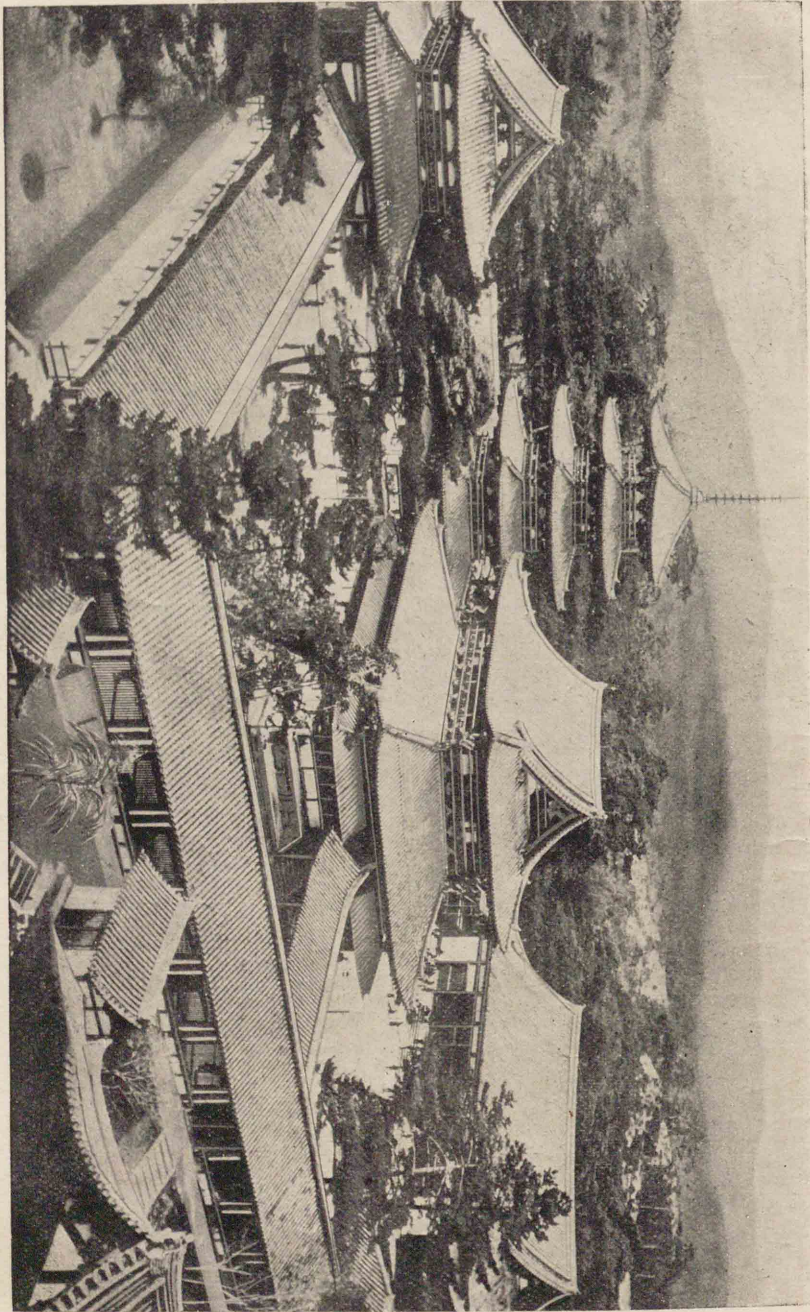
家型墳輪



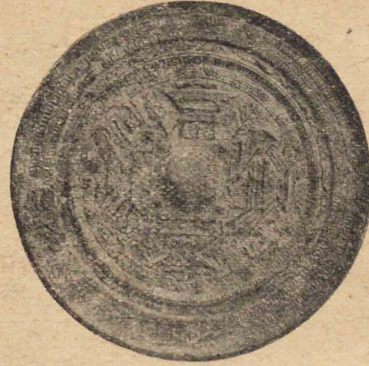
陵御皇天德仁

目次

第七章	國學の勃興 尊王思想の發達	一三三
第八章	外交の紛糾 洋學の發達	一三六
第九章	大政奉還	一四四
第五篇 現代史		
第一章	明治維新	一五二
第二章	立憲政治の確立 教育に關する勅語	一五五
第三章	條約改正	一五六
第四章	東洋の平和とわが國	一六〇
第五章	文化・經濟の發達	一六六
第六章	わが國の世界的地位 國民の覺悟	一七〇
附録		
	皇室御略系	
	諸氏略系	
	年表	



上古の遺物・遺跡



鏡



高脚杯



卍



甕



杯



提瓶



兜



(女) 埴輪土偶



(男) 埴輪土偶



小玉



曲玉



切玉子



刀

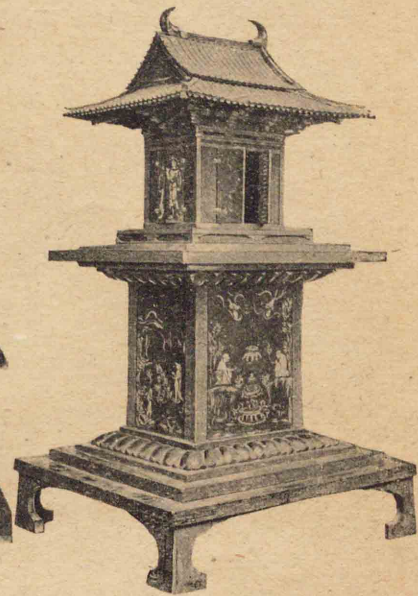


女 天 祥 吉
(藏 寺 帥 藥)



像 尊 三 迦 釋 堂 金 寺 隆 法

(藏 寺 隆 法) 子 厨 蟲 玉
シ ヅ シ ム ノ ヲ



(藏 寺 宮 中) 羅 陀 曼 國 壽 天
ラ ケ ヲ

藝工・術美の代時良奈



(藏院壇戒寺大東) 天聞多



(藏寺提招唐) 佛那舍盧
ツナベス



殿佛大寺大東

この繪は布に描いたもので、長さ一尺八寸ばかりの小品で、彩色がいかにも美しい。奈良時代の作で、佛畫ではあるが、服装が極めて立派である。奈良時代の高貴の御方は、恐らくかやうな服装と相似たものを用ひたのであらう。ともかく奈良時代の繪で、これだけ細密に描寫したものであるのを見れば、當時の藝術の發達をうかがふことができる。

藝工・術美の代時安平



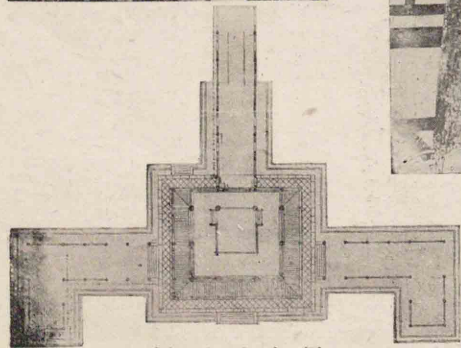
堂風鳳院等平



同上屋上銅製鳳凰

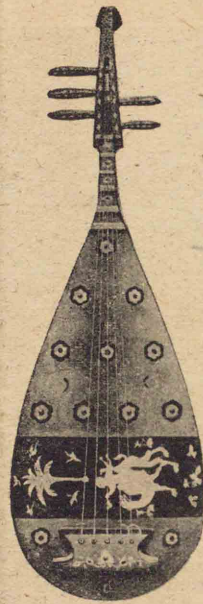


佛陀彌阿尊本上同



圖面平上同

物御院倉正



琵琶



樹下象
藤織



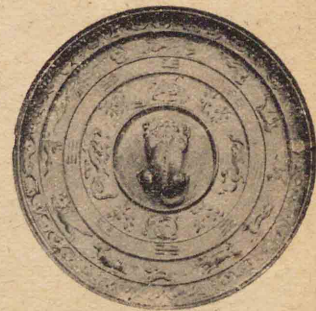
樹下對鹿
夾織



琴阮



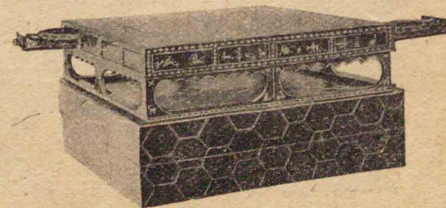
盤蓮華



鏡圓銅白

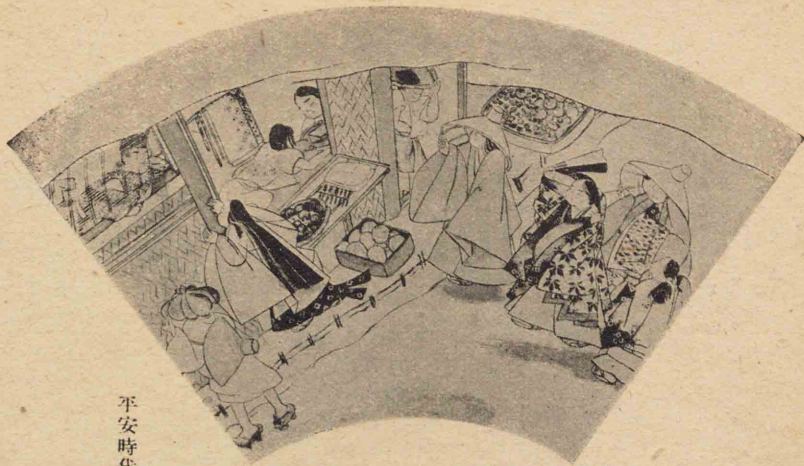


玻璃碗

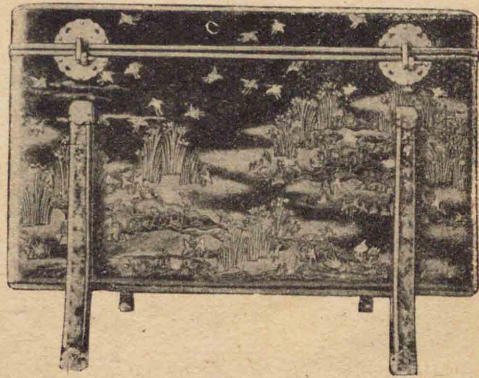


局菜

平安時代の風俗・工芸



平安時代庶民の風俗



螺鈿時唐櫃
(金剛峯寺藏)



華鬘(中尊寺金色堂藏)
華鬘は佛前の装飾具で、金銅製の透彫である。

(傳繪人上遍一 筆伊圓佐土) 谷風の間 民代時倉鎌





(作慶快・慶運) 像士力剛金門大南寺大東



(藏院王華蓮) 像人仙戴婆
ニンニセウゾバ



圓覺寺舍利殿



(藏社神日春) 鉦 大

一遍上人繪傳は、一遍上人の一生の行狀と諸人
 濟度の功德を示した繪卷物で、鎌倉時代末期の繪
 畫の標本として、また當時の社會風俗を研究する
 資料として、最も貴重な資料の一つである。
 この圖は上人が攝津四天王寺の門内で、參詣の
 男女に説教してゐる所を畫いたものである。

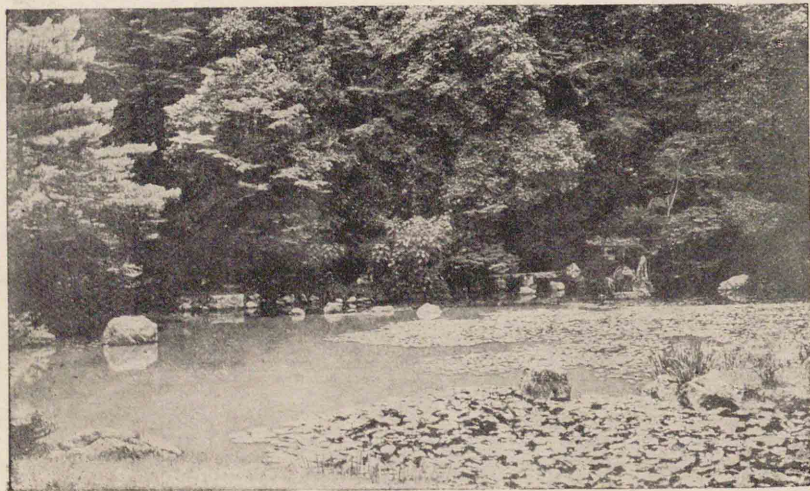
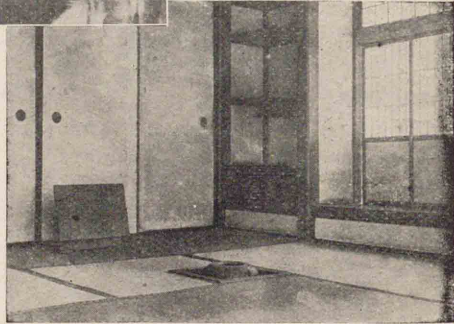
室町時代の建築・藝工・庭園



東求堂
慈照寺内にある足利義政の持佛堂で、純粹な書院風をなしてゐる。下圖はその東北隅にある茶室。

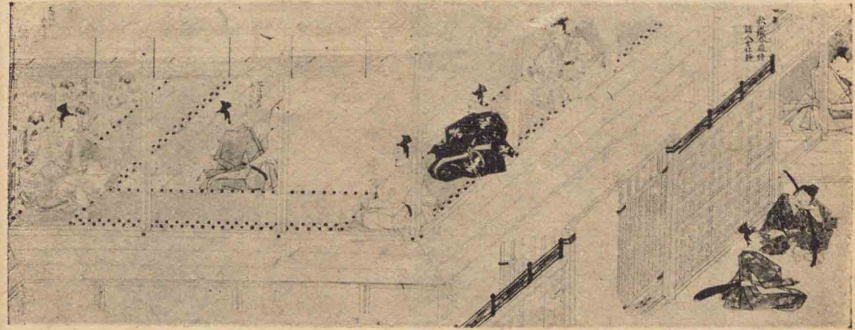


壺 (作夫太郎五瑞祥)
中ズシヨシ

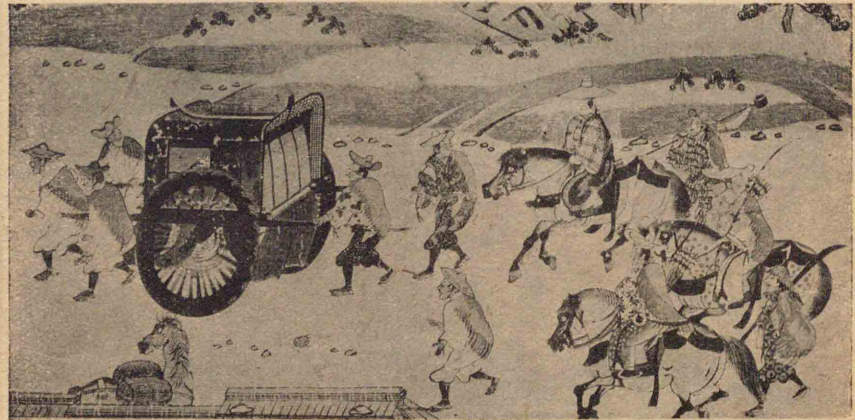


庭園(天龍寺)

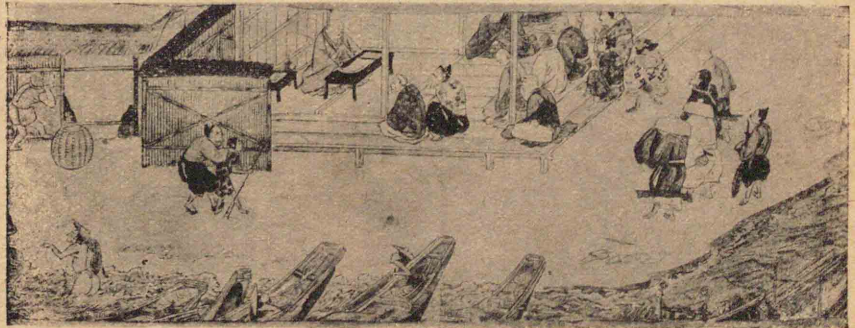
鎌倉時代の風俗



武士の生活



鎌倉時代の旅行

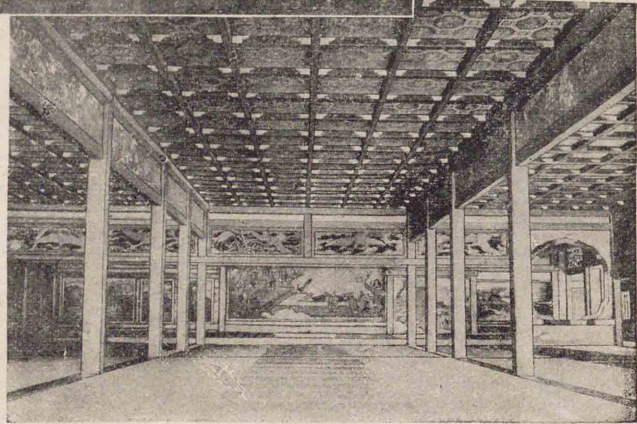


法然上人説教圖

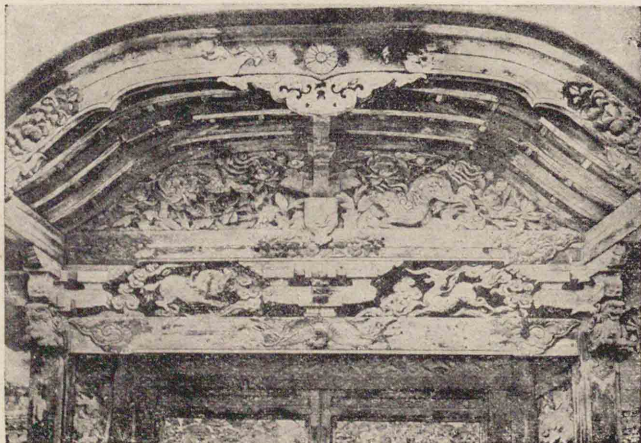
藝工・術美の代時山桃



西本願寺飛雲閣



西本願寺書院



西本願寺唐門

畫繪・俗風の代時町室



(詞繪起縁佛念通融)俗風の民庶代時町室



水山 筆舟雪



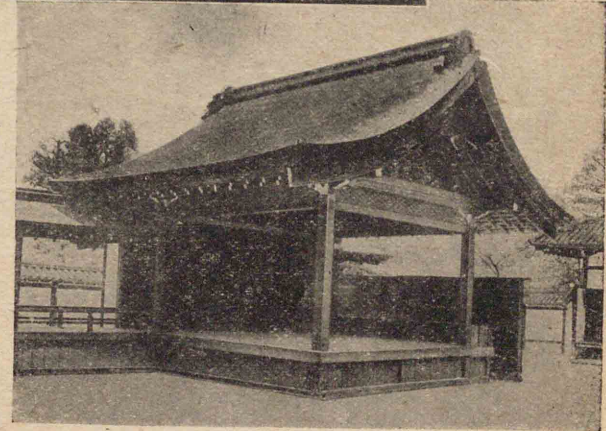
鶴 筆信元野野



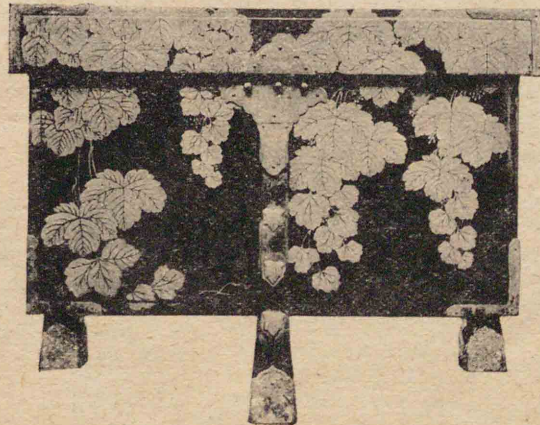
菱川宣師芝居



桃山時代の繪畫

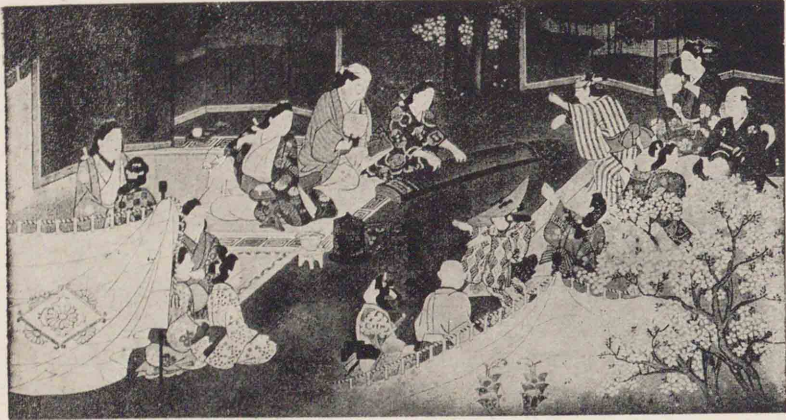


能舞臺(西本願寺)

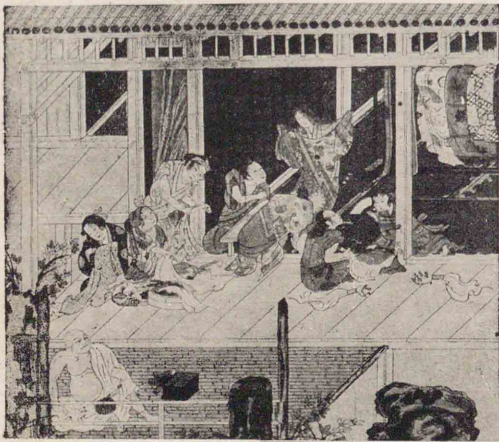


葛時繪小唐櫃(嚴島神社藏)

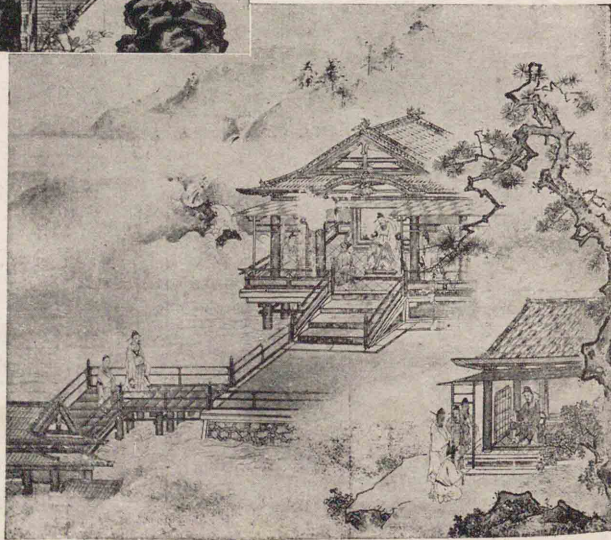
元祿時代の俗風・繪畫



元祿時代庶民の風俗



土佐光起筆 染物師

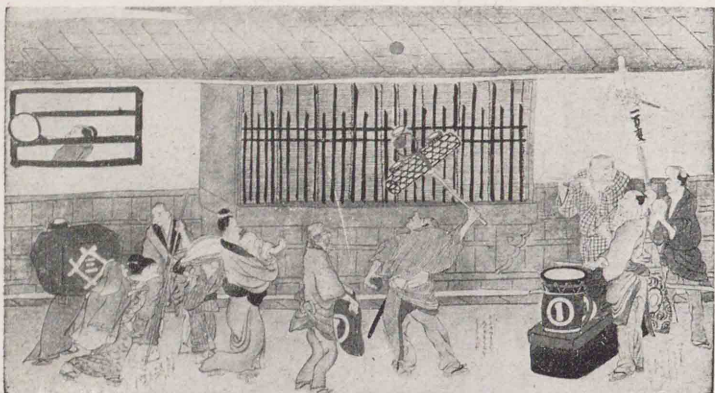


狩野探幽筆 山水

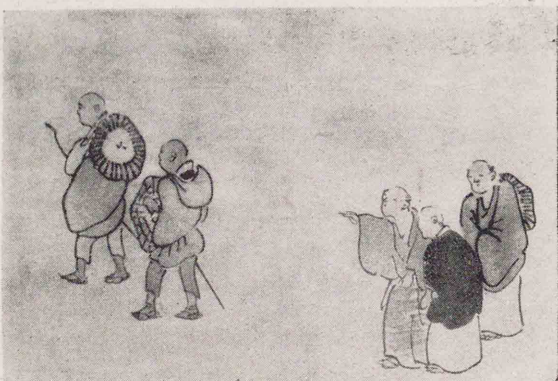
俳優が舞臺で踊つてゐる所と見物人とを畫いたもので、貞享・元祿頃の芝居の風が最もよく寫されてゐる。

筆者菱川師宣は江戸の浮世繪を大成した人で、寛文・元祿頃名聲を博した風俗畫の大家である。

文・化・政・時・代・の・風・俗・の・繪・畫



文化文政時代の庶民風俗
(銀形蕙齋筆)



奥の細道 奥の細道

第三十回 水園の扁舟而雄を賞く
江村の釣翁雙魚と詠る

東都 曲亭主人編次

南總里見八犬傳 第四編卷之一

曲亭馬琴作

十返舎一九作 東海道中膝栗毛の一部



十返舎一九作 東海道中膝栗毛の一部

元・祿・時・代・の・美・術・工・藝

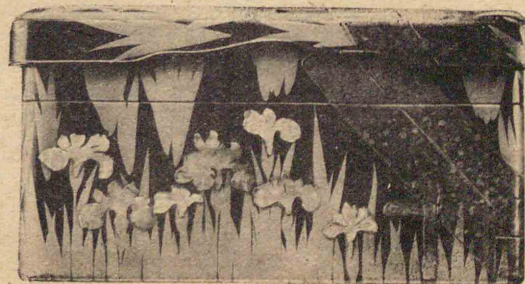


光琳模様

仁清作 茶壺

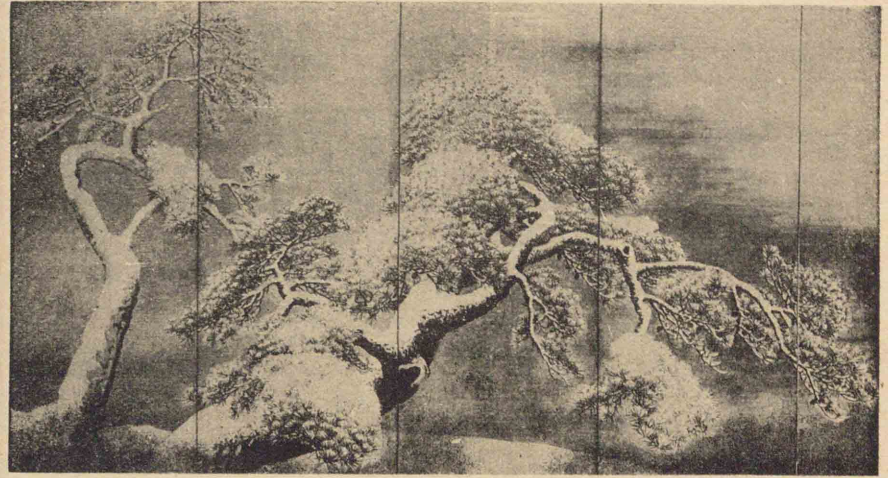


本阿彌光悅作 硯箱



尾形光琳作 硯箱

畫繪の代時政文・化文



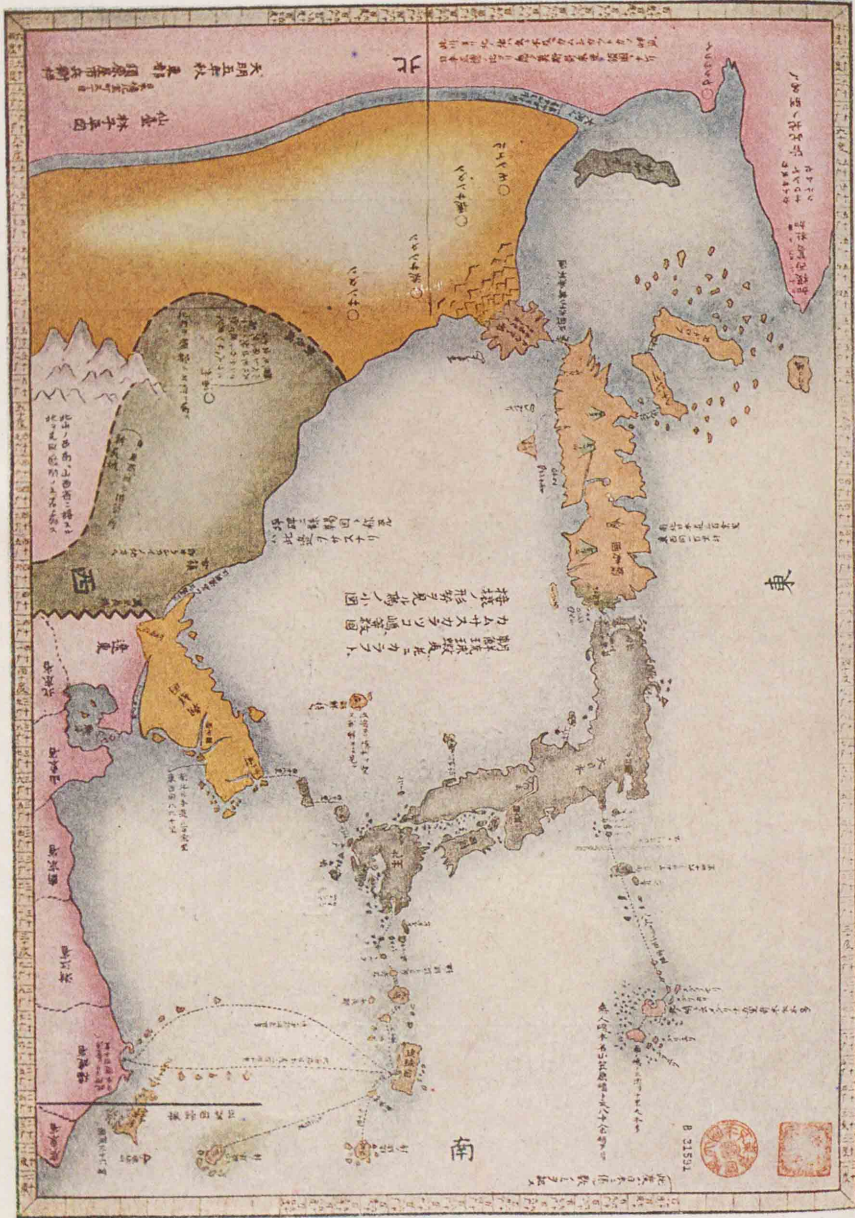
松の雪 筆舉應山圓



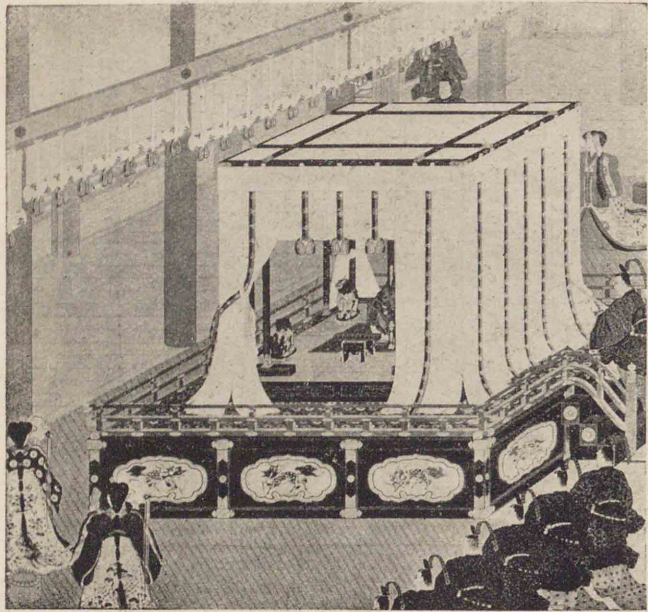
鳥 時 筆齋北飾葛



景風 筆重廣(藤安)川歌



三國通覽圖附說圖



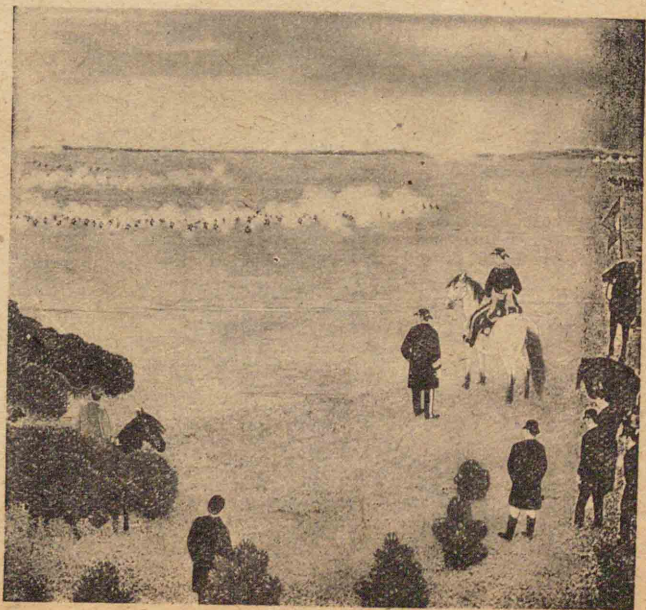
明治天皇の御即位式
 明治元年八月二十七日、紫宸殿に於て御即位の大禮を
 行はせらるる圖。



皇后冊立
 明治元年十二月二十八日、明治天皇は一條忠香の第三女を
 立てて皇后となし給うた。圖は入内の御車が京都御所に着
 御の光景である。

本圖は仙臺の憂國の士林子平の作つた三國
 通覽圖説附圖の五枚中の一枚で、天明五年版で
 ある。北海道や千島の地形が現在と著しく異
 なつて描かれ、樺太が半島になつて大陸に連る
 やうになつてゐるところなどは面白い。

明治天皇の皇大神宮御親謁
 明治二年三月十二日、天皇が内宮玉垣御門内に進ませ給ふ圖である。



明治天皇の習志野原演習行幸
 明治六年四月三十日、習志野原に於て近衛兵の演習を觀覽の圖で、馬に召さるるが天皇、その左は西郷隆盛である。

女子教育 國史教科書

初級用

第一篇 上古史

第一章 神代 肇國の宏遠

わが國體 わが大日本帝國は、建國このかた、上には萬世一系の天皇がおいてになつて、民を慈しみ給ひ、下には忠勇な臣民があつて、まめやかに仕へ奉つたから、國運はますます開けゆき、榮えゆくことができた。世界に國は多いが、わが國ほどうるはしい國はない。

天照大神 古き傳によると、太古に伊弉諾尊、伊弉冉尊と申す二神がおいてになつて、大八洲國を御造りになつた。その御子天照大神は高天原を治め給ひ、人民に耕作養蠶などの法をおすすめに成り、御

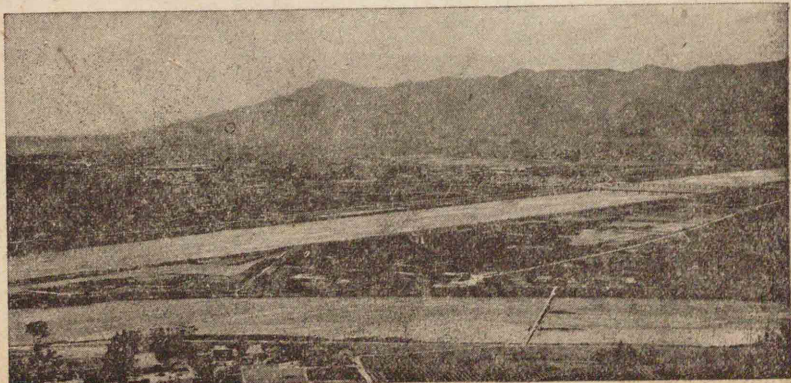
皇室の御先祖

*大八洲國
 淡路・四國・九州・壹岐・對馬・隱岐・佐渡・本州

徳の高く、御惠のあまねきこと、恰も太陽の萬物を照すが如くてあつた。

素戔嗚尊 大神の御弟素戔嗚尊は、勇猛な御方で、出雲に御下りになり、簸川上にて八岐大蛇を斬つて天叢雲劍を得給ひ、これを大神に献上なされた。

大國主命 素戔嗚尊の御子大國主命は出雲に居られて、ますく國土を拓き、人民に醫藥・禁厭の法などを教へ、その御威徳は遠近に及んだ。天照大神は御子孫に普く大八洲國を治めさせようと思召され、經津主命・武甕槌命を御使として、大國主命にその國土を献上するやうに諭させられた。

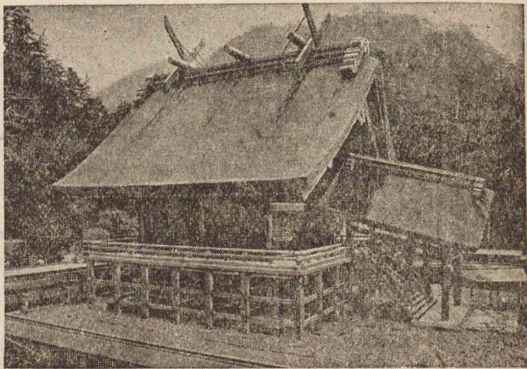


出雲平原

上古文化の郷土
出雲平原の全望
で、前面の川は
簸川である。遙
か鳥根山脈中の
○印のところに
出雲大社がある

經津主命は後に
下總の官幣大社
香取神宮に祀ら
れ、武甕槌命は
常陸の官幣大社
鹿島神宮に祀ら
れ給うた

鳥根縣大社町に
あり、大國主命
を祀る



出雲大社

命は謹んで仰せに従ひ、杵築宮に退かれた。今の出雲大社は命を祀つた御宮である。

皇基の遼遠 大神は御孫瓊杵尊をお召しになつて、豊葦原の千五百秋の瑞穂國はこれ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就いて治らせ。實祚の隆えまさんことまさに天壤と窮りなかるべし。と宣うた。萬世一系天壤無窮の皇運はここに始まり、世界に類なきわが國體の基は定

まつた。大神はまた八咫鏡に八坂瓊曲玉・天叢雲劍をそへて尊に御授けになり、この鏡を見ることわれを見るが如くせよ。と仰せられた。御代々の天皇は、この御鏡を大神の御靈代として仰がせられる。

天孫の降臨 瓊瓊杵尊は勅を奉じて、三種の神器を捧げ持ち、天兒

三種の神器

神代

列強の建國年代
佛國約一五〇年前
英國約二〇〇年前
米國約一四〇年前
伊太利約七〇年前

屋根命・天太玉命・天忍日命などを従へられて、日向(今の九州南部地方)にお降りになつた。これより御子・御孫に至る御三代の間、この地方に都せられて、恩徳を人民に施し給うた。以上を神代と申し上げる。

第二章 神武天皇の御創業

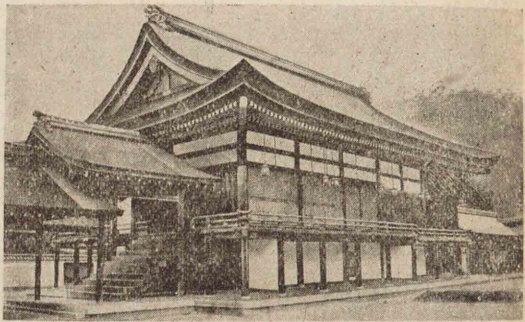
御東征 瓊瓊杵尊の御曾孫にあらせられる神武天皇(第一)は、國の中央に遷つて廣く萬民を安んじ、神勅の御旨を完うせんと思召され、軍を率ゐて日向を發し、多くの年月の間幾多の御困難と闘はせられ、大和に遷り給うた。

御即位 天皇は大和地方を御平定の後、畝傍山の東南なる橿原に宮を建てて即位の禮を御舉げになり、大國主命の後に當る五十鈴媛命を皇后に立てられた。この年はわが國の紀元元年であり、今日の世界列強の未だ興らない古のことである。明治天皇の御代に、この日を紀元節と定め、祝日とせられた。

日を紀元節と定め、祝日とせられた。

明治天皇御製

橿原のとほつみおやの宮柱たてそめしより國は
うごかず



橿原神宮

御政治 天皇は御孝心が深くましまし、御即位の後、鳥見山(畝傍山の東方)に皇祖天神を祭られ、また常に三種の神器を橿原宮の正殿に置いて、同じ御殿で政をきこしめされた。また天種子命・天富命に祭祀と政治とを掌らせ、道臣命

祭政一致

奈良縣高市郡畝傍町の橿原宮址に建てられたものであり、神武天皇と皇后五十鈴媛命を祀る

職業の世襲

と可美眞手命(天兒屋根命)とに宮殿を守らせ、地方には國造や縣主を置き、すべてその職を世襲せしめられた。當時すでにわが國民は

天兒屋根命……天種子命(祭祀政治を掌る) → 中臣氏
天太玉命……天富命(同) → 齋部氏
天忍日命……道臣命(宮殿を守) → 大伴氏
饒速日命……可美眞手命(同) → 物部氏

敬神崇祖の念が厚く、神を祭ることは政治の主なる事柄であつた。これを祭政一致といふ。

第三章 皇大神宮の御創立 敬神尊祖の美風

■神器の奉遷 崇神天皇(第十代)は敬神の御心が篤く、今までのやうに三種の神器を宮中に奉安しては、神威をけがす恐れがあるとの思召から、八咫鏡と天叢雲劔とを大和の笠縫邑に遷し給ひ、皇女豊鍬入姫命に命じて、神鏡を天照大神の御靈代として祀らせ、別に宮中には模造の鏡と劔とを八坂瓊曲玉と共に奉安せられた。

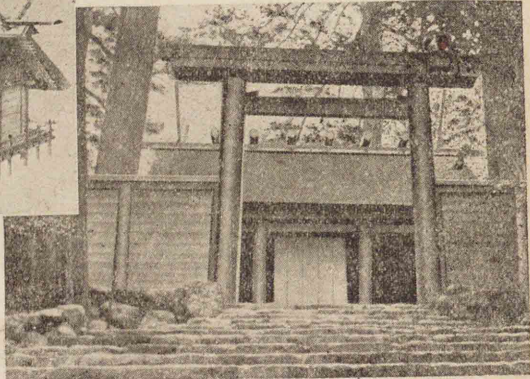
■皇大神宮の創立 次の垂仁天皇(第十一代)は、更に伊勢の五十鈴川のほとりに宮殿を建て、神鏡と神劔とを笠縫邑から移して、皇女倭姫命をして齋き祀らしめられた(五五)。この宮が皇大神宮で、内宮とも申し奉る。

倭姫命

笠縫邑
豊鍬入姫命

明治天皇御製

昔よりながれたえせぬ五十鈴川なほ萬代も
すまむとぞ思ふ

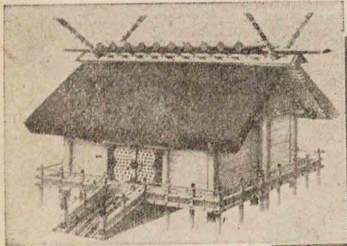


皇大神宮

■四道將軍の派遣 當時大和以外の地方には、まだ皇威に服しないものがあつたから、崇神天皇は、大彥命を北陸に、武渟川別命を東海に、吉備津彥命を西道(山陽)に、丹波道主命を丹波路(山陰)に遣はして、その地方を鎮めさせられた(五七)。これ

を四道將軍といふ。その後天皇は、また皇子豊城入彦命を東國に遣はして治めさせられたから、皇威はますます遠いところへまで及んだ。

■農業の發達 天皇はまた始めて人口を調べて、弓



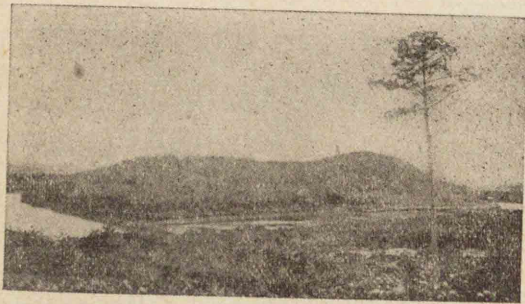
宇治山田市にある。左上是皇大神宮本殿

豊城入彦命

調

「農は國の大本なり。……其れ多に池溝を開りて以て民の業を寛めよ」(崇神天皇詔勅)

奈良縣北葛城郡馬見村にある前方後圓墳である



古墳

弭調・手末調を納めさせ、諸地方に池や溝を掘らせて農事を勵め、船を造らせて交通を便利になされた。垂仁天皇もまた民事に御心を用ひ給ひ、ますく多く池溝を開かせられた。

敬神尊祖の美風

御歴代天皇の敬神崇祖の御心を奉體して、國民もまた神を敬ひ、祖先を尊ぶ美風があつた。國家の祖神として皇大神宮を尊崇することを第一義として、更におのゝ氏神を祭つて厚くこれに奉仕した。

古墳 敬神尊祖の美風をもつわが國民は、君親の葬儀を鄭重に行ひ、陵墓も概ね廣大に造られた。これらの古墳から時々發見される埴輪や種々の遺物は、上古の國民生活や、風俗を知る大切な資料である。

風俗

その頃の風俗は極めて質素で、おほか

衣服
食器
住居

景行天皇の熊襲御征伐
日本武尊の熊襲御征伐
日本武尊の蝦夷御征伐

た絹か麻か楮の皮で織つた筒袖の衣(着)を着け、下に男は褌をはき、女は裳をまとひ、曲玉や管玉などを繫いで身のまはりを飾つた。食器には素焼の土器を使ひ、また木葉をも代りに用ひた。家は木造で、地を掘つて柱を建て、藤や葛で結び、屋根は茅で葺いた。男子はみづらとて髪を分けて兩鬢で結び、女子は下げ髪にし、鬘にも結つた。

第四章 皇威の發展

景行天皇 四道將軍派遣の後、皇威はますく遠い處へ及んだが、更に景行天皇(第三十代)の御代に九州の熊襲が叛いたから、天皇は御親ら九州にお下りになつてこれを平らげられ、後また御子日本武尊に命じて再び征伐せしめられた。天皇は更に日本武尊を東北に遣はして蝦夷を討たしめられた。

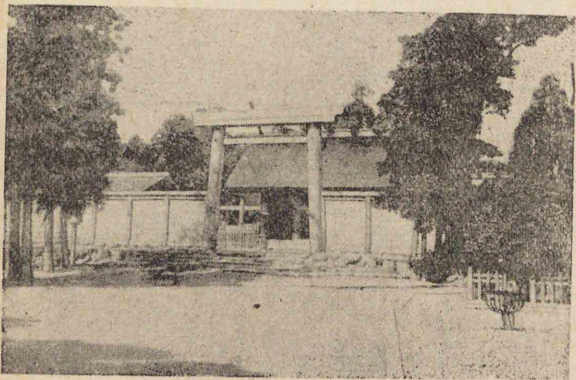
日本武尊は蝦夷征伐の詔をうけ給ひ、まづ皇大神宮に參拜して、御叔母倭姫命

草薙劔
弟橘媛の貞烈

から天叢雲劔をさづかり、進んで駿河に行かれたとき、この神劔で草を薙いで、その地の賊を滅ぼされた。これから天叢雲劔を草薙劔と申す。
弟橘媛の貞烈 尊が上總へ渡られる時に、波風が烈しく、御舟が覆らうとした。妃の弟橘媛はこれは海神の御心であらうと思召し、妾御子に易りて海中に入りなむ。御子は所遣の政遂げて覆奏し給ふべし。と仰せられて、御身を暴浪に投じ給うた。ここに風波は止んで、御舟は無事に岸に著いたといふ。

草薙劔はさきに尾張へ留め置かれたから、後そこに宮を建ててお祀りになつた。これが熱田神宮である。

名古屋市南區熱田新宮坂町にあり、草薙劔の他日本武尊等を祀る



熱田神宮

政治の整頓 西南地方も東北地方も共に皇威に服したから、次の成務天皇(第三十代)は中央には武内宿禰を始めて大臣に任じて大政を輔けしめ、また地方は山河の形勢に

地方政治の整頓

朝鮮半島との關係

三韓

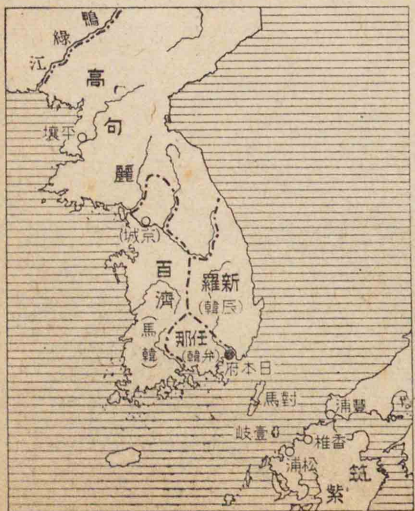
三國

大伽羅

鹽乘津彦

よつて國縣を分け、國造や縣主などを増置せられた。これから政治もいよ／＼整ひ、朝廷の御威光は邊土にまでも輝くやうになつた。
朝鮮半島の服屬 朝鮮半島は神代からわが國と互に往來し、その關係が深かつた。開化天皇(第九代)の御代に、半島の北部は支那漢の領地となり、南部には馬韓・辰韓・弁韓の三韓が分立したが、その後崇神天皇の御代に、辰韓の地に新羅が起り、半島の北部に高句麗が起り、ついで垂仁天皇の御代に馬韓の地に百濟が起つた。わが國では、この三國をも同じく三韓といつた。

これよりさき、弁韓の地に大伽羅が起り、新羅と争つて、わが朝廷の保護を請うたから、崇神天皇は鹽乘津彦を遣つて鎮めさせられ、垂仁天皇



三韓分國立圖

福岡縣糟屋郡香椎村にあり、仲哀天皇・神功皇后を祀る

御凱旋の後、皇后は應神天皇をお生みになり、久しく攝政として天皇をお輔けになつた

阿直岐 王仁

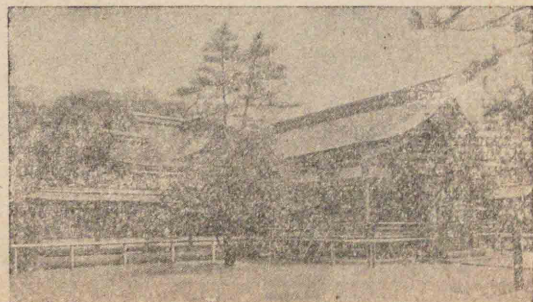
漢學傳來の初 阿知使主

は大伽羅に任那といふ國號を賜はつた。ついで紀元八六〇年に神功皇后が新羅を征伐せられると、百濟・高句麗の二國も相ついで降り、朝鮮半島は殆どわが國に服屬し、かくて皇威は海外にも及んだ。

第五章 文物の傳來

○學問工藝の傳來 朝鮮がわが國に服屬してから、朝鮮人や支那人のわが國へ來て學問や工

藝を傳へるものが多くなり、わが國の文化の發達を助けた。應神天皇(第五代)の御代に、百濟から阿直岐が來朝し、ついで王仁も來て、論語千字文を献上した。天皇の御子菟道稚郎子はこれらに就いて學問を研究せられた。これよりわが國に漢學が起つた。また支那人

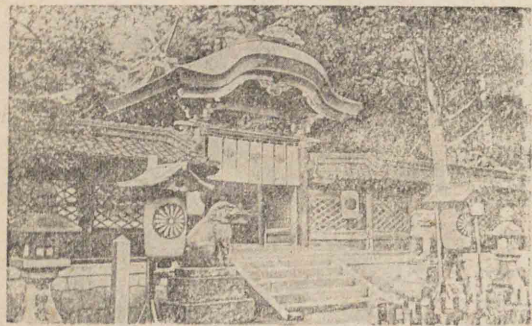


香 雄 宮

大阪府北河内郡菅原村大字長尾にある

大阪府豊能郡池田町にあり、災織・漢織を祀る

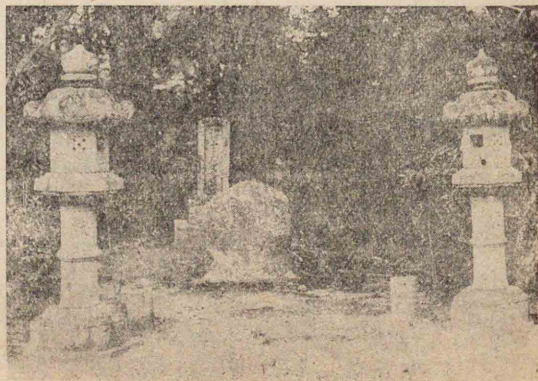
吳



伊 呂 太 神 社

第五卷 文物の傳來

阿知使主弓月君も多くの人々を率ゐて朝鮮から來て歸化した。阿知使主の子孫は漢氏といひ、王仁等の子孫と共に、代々朝廷に仕へて記録の役を勤め、弓月君の子孫は秦氏といひ、永く朝廷に仕へて養蠶紡織のことを掌つた。そのほか學者や織女、織女、鍛工、酒造工が續々と來朝した。天皇はまた阿知使主に命じて縫工と職工とを吳から招かれた。仁徳天皇の御仁政 仁徳天皇(第六代)は都を難波に奠められ、人民の貧しいのを憐んで課

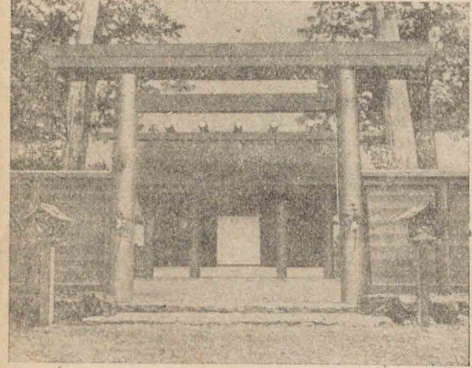


王 仁 の 墓

税を免じ、池を掘り、堤を築き、道を開きなどして、農業を勧められた。これから産業が大いに興り、民は富み榮えて、みな有難い御代を楽しんだ。

高どのに登りて見れば天の下四方に烟りて今ぞ富みぬる 藤原時平

雄略天皇の産業御奨励 雄略天皇(第二十代)は勇猛の御性質であらせ



豊受大神宮

られたが、よく政を勵み、養蠶を勧め、絹織の業を起され、農桑の神にまします豊受大神を丹波(今の丹後)から伊勢に迎へて、皇大神宮の傍に祀り給うた。外宮とも申し上げる。天皇はまた支那より縫工・職工を、百濟より錦を織るものや陶工・畫工などを召された。また皇后は仁徳天皇の皇女であらせられ、淑徳の高い御方で、御親ら桑を摘み蠶を養

産業御奨励

外宮

皇后の淑徳

佛教の傳來

崇佛排佛の論

聖徳太子の攝政

四天王寺・法隆寺

中央は聖徳太子、左右は太子の二王子であらせられるといふ。もと法隆寺の所藏であつたが、今は帝室の御物となつてゐる。

つて、下々を導き給うた。

佛教の傳來 欽明天皇(第二十代)の御代に、百濟王は佛像と經論とを獻じ、盛に佛の功德を述べた。天皇は群臣を集めて佛像を拜すべきや否やを御問ひになつたが、大臣蘇我稻目はこれを信ずべしといひ、大連物部尾輿等はこれに反對し、争はその後續いた。

やがて推古天皇(第三十三代)の御代に、聰明博學な皇太子聖徳太子が攝政となり給ひ、篤く佛教を信じ、これを弘むることに力を盡されてから、佛教は次第に盛になつた。



聖徳太子

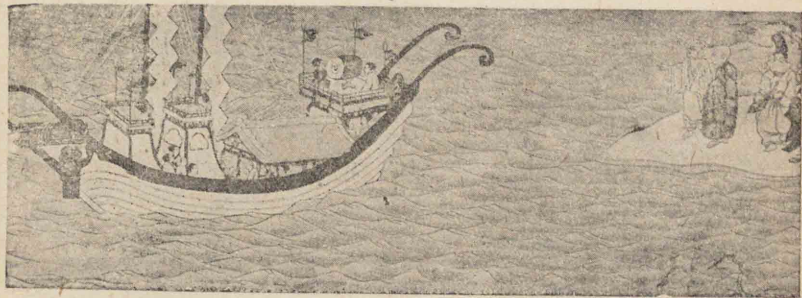
太子は四天王寺(大阪市)・法隆寺(奈良市)などの寺院を建てられ、また自ら經文を講ぜられ、日本佛教の基を定められた。かくて佛教はますます盛になつて、推古天皇の末頃には、寺院は四十六、僧尼は千三

推古時代

東征海緣起繪卷の一部

鳥佛師

支那と國交の初



遣唐使の渡海

百人の多きに達した。

■美術・工藝の發達 佛教の興隆につれて、大陸の建築彫刻・繪畫・刺繡なども攝取醇化されて、わが國の美術・工藝の發達を助けた。わが美術史で推古時代(飛鳥時代)といふのはこの時代のことであり、今も法隆寺にはこの時代の建築彫刻・工藝品などを傳へてゐる。その頃、佛工では鳥佛師(鳥佛師)が最も名高い。

■支那との交通 推古天皇の十五年(三六三)、太子は小野妹子を支那隋に遣はし、始めて國交を開かれた。この時の國書に、「日出づる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙無きや」と認められて、尊大な支那に對し堂々と日出國の尊嚴

遣唐使の初
(三三〇)

を示し給ひ、その後再び妹子を隋に遣はされた時の國書にも、東の天皇、西の皇帝に敬白す」と認められた。まもなく隋が滅びて唐となり、舒明天皇(第三十代)の御代に犬上御田鍬(イヌノカミミケ)が始めて遣唐使として赴いてよ。平安時代の中頃まで凡そ二百年の久しい間、御歴代しばしば遣唐使の御派遣があつた。これらの遣唐使と共に學生や僧侶も多く留學して大陸の制度・文物を研究して歸つたから、大陸の文化は直接わが國の文化に影響し、その發達を助けた。

第二篇 中古史

第一章 政治上の革新

職業の世襲
豪族の専横

冠位十二階
憲法を定む

■**社會組織の弊害** 上古に、わが國は氏を以て血筋を區別し、氏毎におのゝ一定の職があつてこれを世襲する習慣であつた。されば人材があつてもその家柄でなければ用ひられず、地位が高くて勢力のある家は、いつしか多くの土地、人民を私有し、權を恣にする傾があつた。中でも蘇我、物部兩氏の如きは勢が最も強かつた。

■**聖德太子の新政** 聖德太子はこの有様を御覽になり、萬世一系の天皇御親政のわが國體に基づいて政治を一新しようとせられた。即ち太子は冠位十二階を定めて、人材登用の道を開かれ、憲法十七條を作つて國體を明らかにし、臣民に政治道德の精神をお示しになり、また始めて國史を編纂せられた。

蘇我氏の僭上



中臣鎌足

第一章 政治上の革新

憲法十七條中の主なるものは、一詔を承けては必ず謹め。君をば則ち天とし、臣をば則ち地とす。
 (第三條) (二)國司國造百姓に斂めること勿れ。國に二君なく、民に兩主なし。率土の兆民、王を以て主となす。所任官司は、皆是れ王臣なり(第十二條)などである。

■**蘇我氏の滅亡** 蘇我氏は、物部氏が滅び、聖德太子がお薨れになつた後は、次第に權

勢を振ひ、馬子及びその子蝦夷、蝦夷の子入鹿は相ついで惡逆を極め、僭上の行ひさへあつた。

舒明天皇の御子中大兄皇子は英邁の御方で、蘇我氏の無道を御憎みになり、中臣鎌

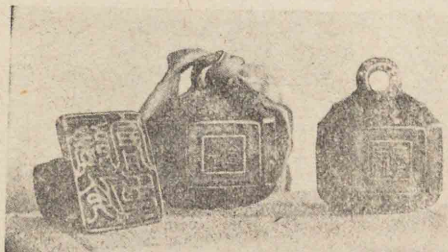
十七條憲法
 一、以和為貴、無行爲人、不可重刑、
 無是、則不須、
 二、國司國造、百姓に斂めること勿れ、
 三、國に二君なく、民に兩主なし、
 四、率土の兆民、王を以て主となす、
 五、所任官司、皆是れ王臣なり、
 六、蘇我氏は、物部氏が滅び、
 七、聖德太子がお薨れになつた後は、
 八、次第に權勢を振ひ、
 九、馬子及びその子蝦夷、
 十、蝦夷の子入鹿は相ついで、
 十一、惡逆を極め、
 十二、僭上の行ひさへあつた、
 十三、舒明天皇の御子中大兄皇子は、
 十四、英邁の御方で、
 十五、蘇我氏の無道を御憎みになり、
 十六、中臣鎌

蝦夷・入鹿誅せらる

年號の初

官制

内臣(中臣鎌足) 左大臣(阿倍倉梯麻呂) 右大臣(蘇我石川麻呂) 國博士(高向玄理・僧旻) 交通の便のため驛傳の制を設けた時使用した鈴である



鈴 驛

足と謀られ、皇極天皇(第三十)の四年(三〇五)、大極殿で入鹿を誅せられた。ついで蝦夷も一族と共に自殺したから、蘇我氏の本家は絶え、政治革新の機運は近づいた。

大化の改新 孝徳天皇(第三十)は、聖徳太子の御精神をうけついで國政の大改革を企てられ、まづ公に年號を立てて大化とし(三〇五)、中大兄

皇子を皇太子に立てられた。皇太子は建國の體制に基づき、支那の制度を參酌して大いに改新の政を行はせられた。これを大化の改新といふ。

官制については、(1)從來の官職世襲の制度を廢して、新に中央政府には内臣と左右大臣とを置き、地方には國司郡司等を置き、何れも古來の資格にかかはらず、主として材幹あるものを用ひ、人材登用の道を開き、(2)これまで皇族を始めとして臣連

班田收授の法

租 米穀をもつて納めること
庸 公役に服し、またはこれに代つて米・布を納めること
調 土地の産物を納めること

淳足は今の新潟市沼垂町、磐舟は新潟縣岩船町附近である。淳代は今の秋田縣能代港町で、津輕と共に比羅夫が郡領を置いた地、後方羊蹄は今の北海道後志地方にあつて、比羅夫が政所を置いた地である

家等の私有せる土地・人民を悉く朝廷に收めて公地・公民に改め、(3)戶籍を作り、班田收授の法を行ひ、なほ稅制を定めて租・庸・調の法を設けられた。これはまことに建國以來の大改革で、これから政治や社會の有様は全くその面目を新にした。

皇威の發展 (1)蝦夷征伐 孝徳天皇の次に皇極天皇が再び皇位にお即きになつた。これを齊明天皇(第三十)と申す。この御代に阿倍

比羅夫は水軍を率ゐて秋田・津輕地方の蝦夷を平らげ(三〇五)、なほ海を越えて渡島(今の北)をも従へ、更に遠く北へ進んで肅慎族をも伐ち、大いに皇威を輝かした。

(2)朝鮮半島の放棄 欽明天皇(第二十九)の御代に任那の日本府が滅亡してから、新羅はます／＼勢を振



阿倍比羅夫の北征要地圖

朝倉宮

百濟・高句麗の滅亡

都護府

大津奠都

ひ、齊明天皇の御代には唐の援をかりて百濟を滅ぼさうとした。天皇は百濟を救はうとして、皇太子中大兄皇子と共に筑紫まで御進みになつたが、朝倉(福岡縣東南部)の行宮で崩御になり、皇太子が御後を繼がれた。天智天皇(第三十代)と申す。天皇も百濟を援けるために、軍をやつて唐の軍と戦はせられたが利がなく、百濟は遂に滅び(三三三)、ついで高句麗も唐に滅ぼされた(三三〇)。かくて唐は平壤に都護府をおいて百濟・高句麗の舊領を治めたが、間もなく新羅は唐に叛いて、平壤を奪ひ、ほぼ朝鮮半島を一統した。

第二章 律令の制定

■律令の撰定 天智天皇は大化改新後の内治に急なる時勢を深く御察しになつて、朝鮮半島から軍を引上げさせられ、近江の大津宮に都し給ひ、戸籍を改め、學校を興し、また鎌足に命じて令を定めさせら

近江令

大寶律令の完成

養老の修正

官制

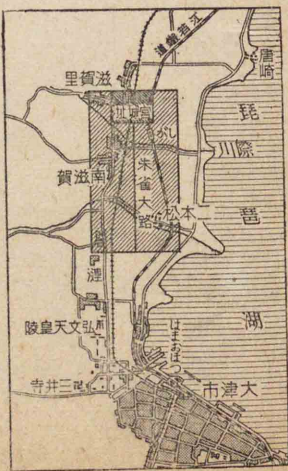


藤原不比等

第二章 律令の制定

れた。これを近江令といふ。その後、文武天皇(第四十代)は忍壁親王・藤原不比等に命じて、更に律令を撰ばしめられた。これを大寶律令といひ、わが國の昔からの習はしを基とし、これに唐の制度を参照せられて定められたものである。ついで元正天皇(第四十代)の養老二年(三三六)に重ねて修正され、この後永く政治法律の大本となつた。

■大寶律令の大要 官制は、中央政府には神祇・太政の二官があり、太政官の下に中務・式部・治部・民部・兵部・刑部・大藏・宮内(八省)がある。敬神の國風を重んじて、神祇官は諸官省の上に置き、太政官には太政大臣・左大臣・右大臣・大納言などの官があつた。地方に



大津宮

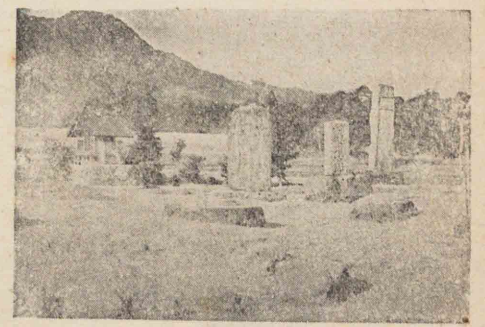
福岡縣筑紫郡水城村觀世寺にその址がある

兵制

學制

このほか田制・税法などは、ほぼ大化改新の通りであつた

刑罰



太宰府都府宰太の址

くした。

第三章 奈良時代の趨勢

錢貨の鑄造 元明天皇(第四十)の御代の初に、年號を和銅と改め、和同開珎といふ錢貨を鑄させられた。これから貨幣が次第に行はれ、商

業も追々發達するやうになつた。

奈良奠都

平城京は東西約四、九軒、南北約四、九軒あつた。宮城は北部の中央にあり、朱雀大路で左京右京に分れ、兩京のおの東西は四坊、南北は九條に分れてゐた

九州南部の平定

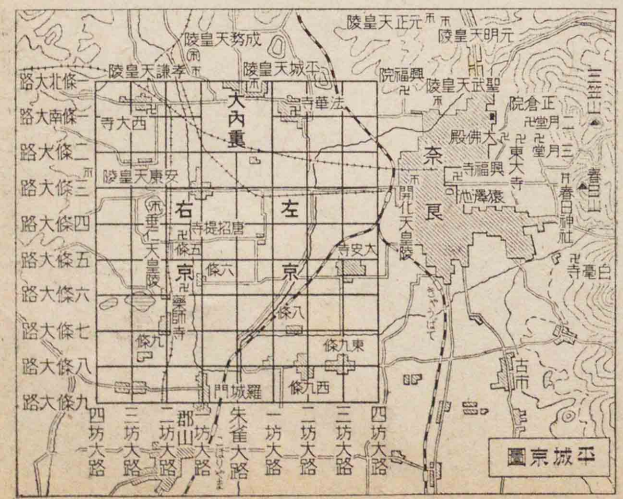


和同開珎

年の間は、大抵ここが都と定まつてゐたから、この間を奈良時代といふ。

西南諸島隼人の服屬

これよりさき、推古天皇の御代から、わが西南海上にある掖久島(鹿兒島縣)・多嶽島(同種)・奄美島(同大)・度感島(同)等の人が次第に來朝したが、元明天皇の御代になつて、信覺島(沖繩縣)・球美島(同久)等も服屬した。ついで元正天皇の御代には、大伴旅人は詔を受けて九州の南部の隼人といふ剽悍な人民を平らげた。



正倉院御物樂毅論の末尾で、御自署に藤三娘とあるのは、皇后は藤原不比等の第三女であられたからであらうといはれる

兩國分寺

東大寺 金堂には高さ五丈三尺五寸の金銅の大佛を安置された

光明天皇御筆 聖武天皇は篤く佛教の御代である。聖武天皇は篤く佛教を信ぜられ、天平十三年(四〇二)國毎に僧と尼との兩國分寺を造らせて、これに寺領を與へ、天下の安寧、國民の幸福を祈らせられた。大和の國分寺は即ち奈良にある東大寺で、諸國の國分寺の上に立つてゐた。



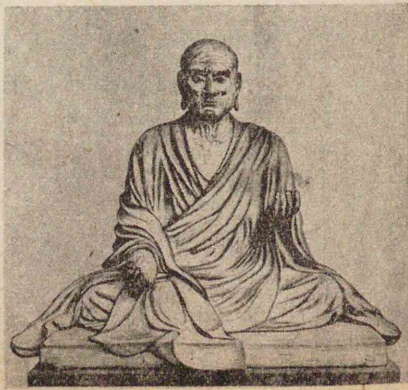
光明天皇御筆

明皇后と申す、皇后も深く佛教に歸依し給ひ、慈悲の御心に富ませられ、施藥院、悲田院などを設けて、貧民や孤兒などを救はせられた。佛教の隆盛 佛教は奈良時代に入つて、皇室や貴族の尊信を得て

僧行基の功績

行基は和泉の人で、社會教化につくしたから時の人は彼を菩薩と崇めた。像は奈良唐招提寺藏

ますく隆盛となり、僧侶にも學問徳行のすぐれたものが多く出た。中にも行基は諸國を巡つて佛教を弘めるかたは、民益を圖つたので、世の人に行基菩薩と崇められた。



行基

僧道鏡

東京帝室博物館藏

和氣清麻呂の忠烈 されど一方には、上下の尊信の厚きに狎れて、專横の振舞をする僧侶も現はれた。稱徳天皇(八代)の御代に、僧道鏡は天皇の御信任をうらぎり、臣民として許すべからざる無道の振舞があつたが、和氣清麻呂の忠節によつてその非望は忽ちにして挫かれた。



和氣清麻呂

やがて光仁天皇(九代)がお立ちに

なると、道鏡を流し、清麻呂等を擧げ用ひ給ひ、大いに前代の弊政を改め給うた。

第四章 奈良時代の文化

奈良奠都の後、皇威は四方にのび、統一が更に強くなり、文化も著しく進歩した。

■ **國史・地誌の撰修** 元明天皇の御代に、太安萬侶は詔を奉じ、稗田阿禮が誦むところによつて、わが國の歴史を國語で書き記した(三七七)。



合人親王

これが古事記である。天皇はまた諸國に命じて國々の地勢・産物・傳説などを書き奉らしめられた。これが風土記である。天皇は舍人親王等に命じて、更に國史を

古事記の編纂
神代より推古天皇までの歴史

風土記

日本書紀の編纂

六國史

漢文で編纂させられた(二六〇)。これを日本書紀といふ。

「六國史」この後しばしば國史勅撰のことがあつて、日本書紀(神代より持統天皇の御代まで)の外、續日本紀(文武天皇より桓武天皇の御代まで)、續日本後紀(仁明天皇の御代)、文德實錄(文德天皇の御代)、三代實錄(清和天皇陽成天皇の御代)が出来た。これ等を總稱して六國史といふ。

■ **漢文學の進歩** 奈良時代には、唐との交通が盛で、漢文學は頗る發達した。吉備眞備、阿倍仲麻呂は共に唐に留學し、眞備は歸つて種々の學藝に力をつくし、朝廷に仕へて、後、右大臣に昇り、仲麻呂は唐で用ひられ、遂に彼の地で客死した。

吉備大臣入唐繪
卷の一部

吉備眞備
阿倍仲麻呂

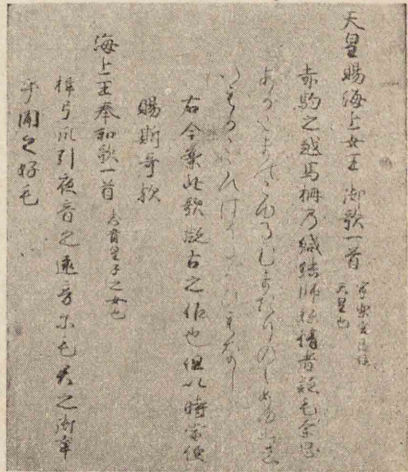


吉備大臣入唐圖

紀貫之筆と傳へられるもの

萬葉集

漢字の音と訓とを以て國語をあらはしたもので、その文字を萬葉假名といふ



萬葉集

和歌 和歌は持統文武兩天皇の頃に柿本人麻呂が出たが、この時代には山部赤人・山上憶良・大伴家持等が出て、ますます盛に行はれた。萬葉集はこれ等の人々を始め、その他多くの歌を集めたもので、古代の國民精神をよくあらはしてゐる。

田兒ノ浦從打而出而見者眞白衣不盡能高嶺爾雪波零家留
銀母金母玉母奈爾世武爾麻佐禮留多可良古爾斯迦米夜母
海行者美都久屍山行者草牟須屍大皇乃敵爾許曾死米可弊里見波勢自

山部赤人

山上憶良

大伴家持

天平時代

美術工藝の進歩 佛教の隆盛に伴つて、美術工藝も頗る發達し、殊に聖武天皇の御頃は、わが美術史上天平時代といはれ、建築・彫刻・繪畫

圖(下)

正倉院は奈良東大寺の境内にある校倉造の寶庫で、三千餘點の珍寶が帝室御物として納められてゐる

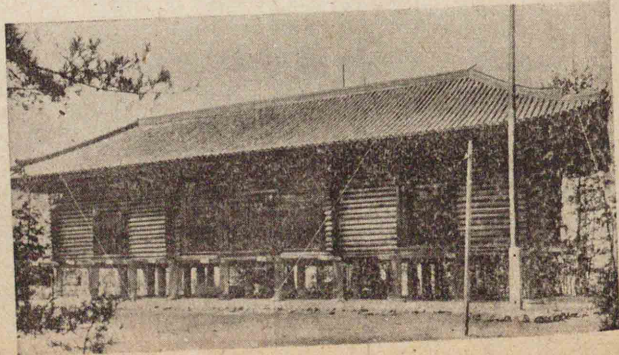
圖(上)

正倉院御物の尺八に彫刻されてあるものによる



奈良時代貴族の風俗

その他織物・漆器・硝子器など精巧を極めたものが多く、今なほ奈良の正倉院や、奈良市内外の寺院には、世界に誇るに足る當代の傑作を藏してゐる。またこの時代の末頃には、印刷術が起り、當時木版で印刷した經文が今に遺つてゐる。



正倉院

風俗 文化の進むにつれて、風俗も次第に華やかなものとなり、著物は左前に著てゐたのが、今のやうに右前に改り、袖も寛く、裾も長くなつ

京都市岡崎公園の北にあり、桓武天皇を祀る。社殿と門は平安京の大極殿・應天門を模して、その規模の二分の一を以て造られたものである

桓武天皇

平安京

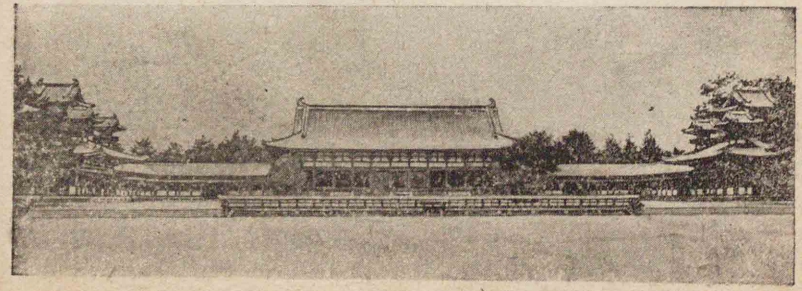
た。建築にも碧い瓦で葺き、赤い繪具で柱などを塗ることがこの時代に始まった。

あをによし奈良の都は咲く花の匂ふがごとく今盛りなり

第五章 平安時代初期の趨勢

平安奠都 桓武天皇(第十代)は國政を一新しようと思召され、和氣清麻呂の建議によつて延暦十三年(四四四)今の京都の地に都をお奠めになった。この都を平安京といひ、平城京よりなほ規模が壯大で、この後、明治の初年まで千七十餘年の間、概ね帝都となつた。

蝦夷の鎮定 蝦夷は、奈良時代にもしばしば



平安京神宮

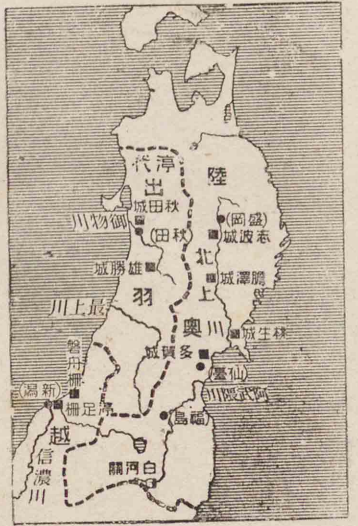
坂上田村麻呂の蝦夷征伐

文室綿麻呂の蝦夷征伐

嵯峨天皇

藏人所

檢非違使



蝦夷征伐要地圖

亂を起したから、聖武天皇は陸奥に多賀城(仙臺市)を築き、出羽に秋田城を築いて、これを征伐させられたが、はかばかしき成功を見なかつた。桓武天皇は延暦十六年(四四七)坂上田村麻呂を征夷大將軍に任じ給うた。田村麻呂は本州の北方に進み、蝦夷を討ち、膽澤城(岩手縣南部)志波城(同市南)を築いてこれに備へた。その後、嵯峨天皇(第五十代)の御代に文室綿麻呂がまた蝦夷の餘黨を平らげたから(四七三)、これより東北地方の蝦夷も次第に皇化に浴するやうになつた。

内政の刷新 嵯峨天皇は英明にましまし、大寶令の官制がもとのままでは時勢に適しないものがあると考へになり、新に藏人所を宮中に置いて機密の文書を掌らせ、また檢非違使を置いて都下の警

最澄(傳教大師)

延曆寺

天台宗
空海(弘法大師)

眞言宗

金剛峯寺



最澄



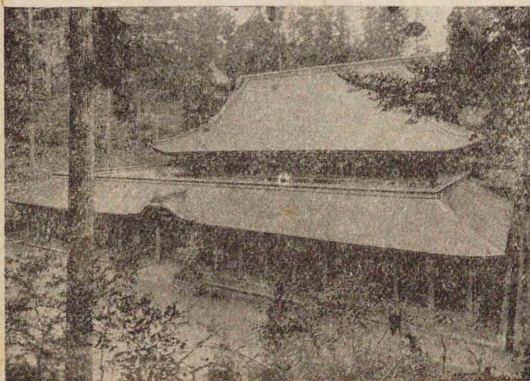
空海

察や裁判のことを掌らせられた。

④新佛教の興隆 平安時代の初に最澄と空海との二高僧が出て、新しい宗派を傳へ、官民の尊信を受けた。最澄は桓武天皇の御代に比叡山に延曆寺を

はじめ、後、勅を奉じて唐に入り(四六)、歸朝して新に天台宗を傳へた。空海も勅を奉じて、最澄と同年に入唐し、やゝ後れて歸朝して新に眞言宗を弘

め、嵯峨天皇の御代に高野山に金剛峯寺を建てた(四七)。空海は博く學藝に



延曆寺

綜藝種智院

漢文學者

嵯峨天皇の御代には小野篁・都良香が出て、延喜の御代には菅原道真・三善清行・紀長谷雄等が出た

私立學校

通じ、諸國を巡つて教を説く傍ら、民利を興し、また綜藝種智院といふ學校を建てて平民の子弟を教育した。この二宗は共に佛教を日本化したもので、國家の鎮護を旨とし、且つ山林清淨の地に修學した。

⑤漢文學 平安時代の初期には、御歴代の天皇が皆學問を御獎勵になつたから、漢文學も頗る盛となつた。殊に嵯峨天皇は漢文學にすぐれさせられ、また書道をもよくせられて、空海・橘逸勢と共に三筆と稱せられ給うた。またその頃の貴族は、官立の大學や國學の外に、和氣氏の弘文院、藤原氏の勸學院、橘氏の學館院、在原氏の獎學院等が立ち、おのゝその一族子弟を教育した。

第六章 攝關政治 藤原氏の專權

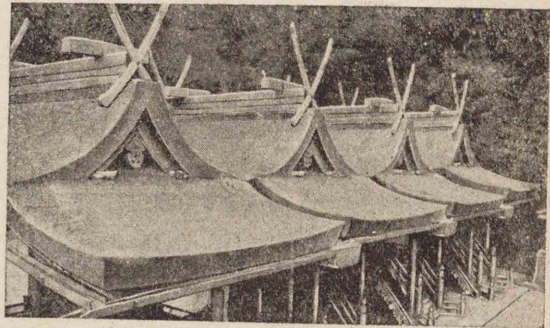
①藤原氏の興隆 藤原氏は鎌足・不比等以來皇室の恩寵を蒙り、その家はますます榮えたが、殊に不比等の玄孫冬嗣は、嵯峨天皇の御代に

奈良市にあり、藤原氏の祖天兒房根命その他を祀り、藤原氏の盛になるにつれて朝野の尊敬が甚だ厚かつた

藤原良房

人臣攝政の初

藤原基經



春日神社

藏人頭となり、更に進んで左大臣に上り、その子良房は文徳天皇(第五十代)の御代に太政大臣に任ぜられた(三五七)。文徳天皇の御子清和天皇は良房の女の生んだ御方で、御幼少で即位せられると、外祖父良房は攝政となつた(三五八)。人臣で太政大臣となり、攝政となつたのは良房が初である。

た。ついで光孝天皇(第五十代)を経て、宇多天皇(第五十代)がお立ちになつた。

宇多天皇は既に御成年にましましたので、攝政を置かれず、特に勅して、大小の政務は悉く基經に白して、後、奏せしめられた(三五七)。これが關白の初である。

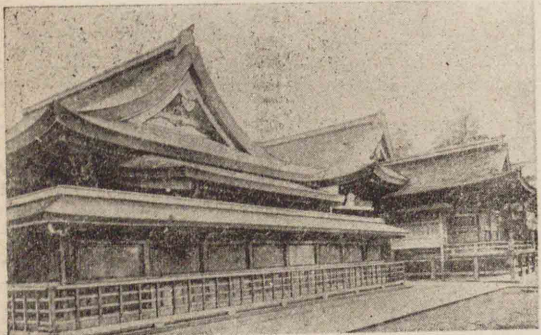
菅原道眞の登用

北野縁起繪詞の一部で、延喜元年九月十日の夜、道眞が太宰府の謫居に於て恩賜の御衣を捧持し感泣してゐる圖である

藤原時平

京都市上京區馬喰町にあり、菅原道眞を祀る

時平等の讒奏



北野神社

菅原道眞の左遷 宇多天皇は、基經の薨じた後は、菅原道眞を學者の家から擢んで

て重く用ひられた。藤原氏の權力を分け、これを抑へようと思召されたからである。

天皇はやがて御位を醍醐天皇に譲られ、基經の子時平を左大臣に、道眞を右大臣に任じて、

共に政治を行はせられた。道眞は學徳すぐれ、年も長じて政務にくはしく、身を忘れて天皇の御爲に盡したから、ますます御信任が加はつた。時平はこれを嫉んで、天皇に讒奏し



道眞眞恩の賜衣を拜す

道眞の薨去

たから、延喜元年(二五二)天皇は御心ならずも道眞を太宰権帥に貶された。道眞は三年の後、配所で薨じた。これから藤原氏の勢力はいよいよ固くなつた。

海ならずたたる水の底までも清き心は月ぞ照さん

道眞

醍醐天皇の御仁政

延喜天曆の治 醍醐天皇は御自身に政を聞こしめされ、仁政を施し給ひ、殊のほか御仁慈の御心に富ませられた。天皇の御代、京都は太平で、文化はますます榮えたから、時の年號によつて延喜の治と申す。ついで村上天皇(第六十)の御代もまた天曆の治と申し、延喜の治と並べたたへ奉る。

村上天皇の御仁政

外戚の跋扈

藤原氏の専權 藤原氏は道眞を退けた後も盛に他氏を斥けて、ますます一門の勢力を加へ、皇室の外戚として攝政・關白その他高官榮職を獨占する有様であつたが、やがて一門の間に權力争ひを起し、道長が出るに及んで、最後の勝利を得た。道長は一條三條後一條三天

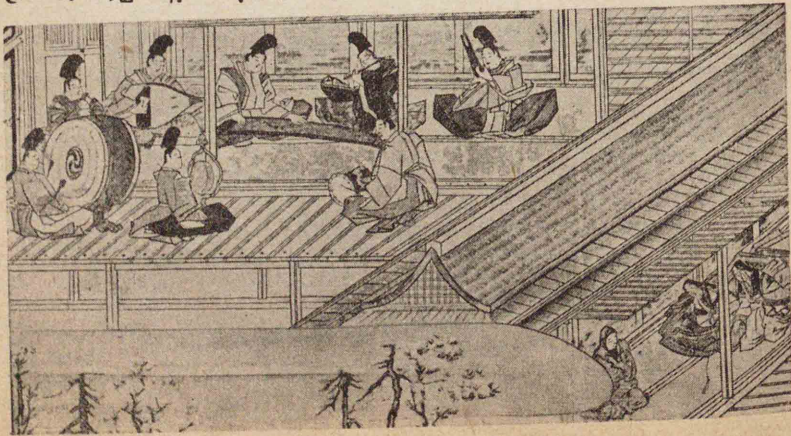
道長の専横

藤原氏の極盛

皇の御代三十餘年にわたつて政治に興り、その女は相ついで三天皇(一條三條)の皇后に立たせられた。かくてその威權は並ぶものなく、その一門の莊園は國中に滿ち、榮華は絶頂に達した。

この世をばわが世とぞ思ふもち月のかけ
たることもなしと思へば 藤原道長

莊園 大化の新政から土地の私有を禁ぜられたが、墾田功田賜田寺社田など、特に私有を許された土地も少くなかつた。平安時代に入ると、藤原氏その他の豪族など土地を開墾して私有するものがますます殖えた。これらの私有地を莊園といひ、國司の支配を受けず、租税を納めないで、朝廷の収入は減少して、政務を擧げさ



藤原氏の榮實

せ給ふことが出来なくなつた。

第七章 外國との關係

渤海の興起

渤海の入貢

さきに元明天皇の御代に、今の滿洲地方に渤海とい

ふ國が起り(三三三)、聖武天皇の御代に始めてわが國へ入貢し、その後醍醐天皇の御代まで交通が絶えなかつた。



渤海要地圖

朝鮮半島の變遷

新羅は朝鮮半島統一後もしばしば使者をわが國に遣はし

高麗國の建國 新羅の滅亡

たが、次第に禮を缺くやうになつたのみでなく、わが邊海を騷がせ(三四三)遂には朝貢をも絶つたから、朝廷は新羅人のわが國在留を禁じ給うた(三五三)。その後、新羅も亂れ、醍醐天皇の御代に高麗國が起り、朱雀天皇の御代に新羅を滅ぼして朝鮮半島を統一した。

入唐の困難

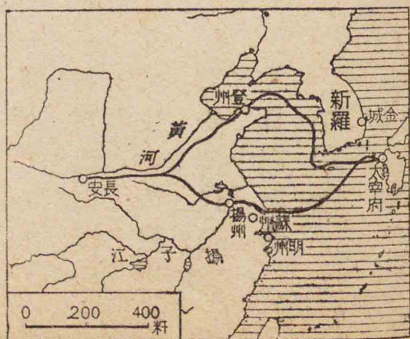
遣唐使の停止

遣唐使の停止

宇多天皇の御代に、菅原道真は入唐の容易でない事情を奏聞して、遣唐使を停められんことを請ひ(三五四)、勅許を得た。

支那との國交 の中絶

當時支那は大いに亂れ、程なく醍醐天皇の御代に唐は滅んだ。續いて渤海もまた遼に滅ぼされて、入貢が絶えたから、わが國と大陸諸國との國交は一時全く絶えた。しかし僧侶や商人などの大陸に往來することは、その後もなほ止まなかつた。



日唐交通圖

第八章 平安時代の文化

國風文化

平安時代の初期、藤原氏の全盛時代には、京都は平和であり、藤原氏一門の莊園は國中に遍く、その豪華な生活は文化にも大きな影響を及ぼした。そしてこれらの文化も遣唐使の廢止以來は、

日本獨得の文化

念佛宗

本地垂迹説

假名の使用

勅撰和歌集

わが國民性を現はした國風文化が著しく發達した。
佛敎 平安時代の初期に創められた天台眞言の二宗は、上下の尊信を受けて次第に弘まつたが、一條天皇の御代には僧源信(惠心)が廣く念佛をすすめ、その著「往生要集」は支那でも尊ばれた。また平安時代の中頃に、神は佛が迹(ト)を垂れて日本に現はれたのであるといふ本地垂迹(チキジヤク)の説が起り、佛敎も日本化するに至つた。

國文學

平安時代に入つて、片假名平假名が廣く用ひられるやうになつてから、一層自由に國語をう

つすことが出來、國文學の發達は著しくなつた。延喜の御代紀貫之は假名文を以て土佐日記を著はし、また勅を奉じて古今和歌集(古今)を撰した。これは勅撰和歌集の初であ

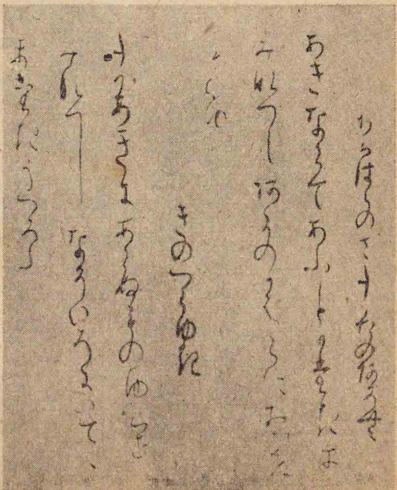
名假片と名假平

になつてから、一層自由に國語をう
つすことが出來、國文學の發達は著
しくなつた。延喜の御代紀貫之は
假名文を以て土佐日記を著はし、ま
た勅を奉じて古今和歌集(古今)を撰
した。これは勅撰和歌集の初であ

藤原行成筆と傳へられるものがある

紫式部 源氏物語 清少納言 枕草子

る。なほ一條天皇の御代には才媛(ムラサキ)並び出で、上東門院彰子(シキウ)に仕へた紫式部(シキブ)は源氏物語を、皇后定子(テイシ)に仕へた清少納言(セイショ)は枕草子(マクラノサウシ)を著はして國文學に新味を與へた。その他和泉式部(シキブ)伊勢大輔等も歌人として知られた。



部一の集今古

書道

石山寺に於て源氏物語を書いてゐる圖である。狩野探幽筆

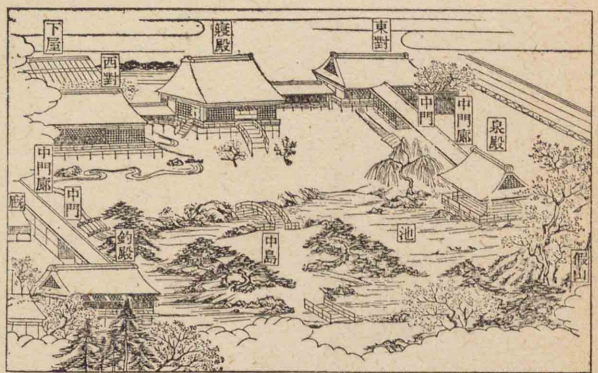


すは著を語物氏源部式紫

美術・工藝 平安時代には美術工藝も優美な純日本風のものとなつた。書道には延喜の頃小野道風(ノノノ)が出て、ついで藤原佐理(ササキ)藤原行成(ユキナガ)が現はれ、わが國獨特の書風が始められた。この三人を三蹟

建築

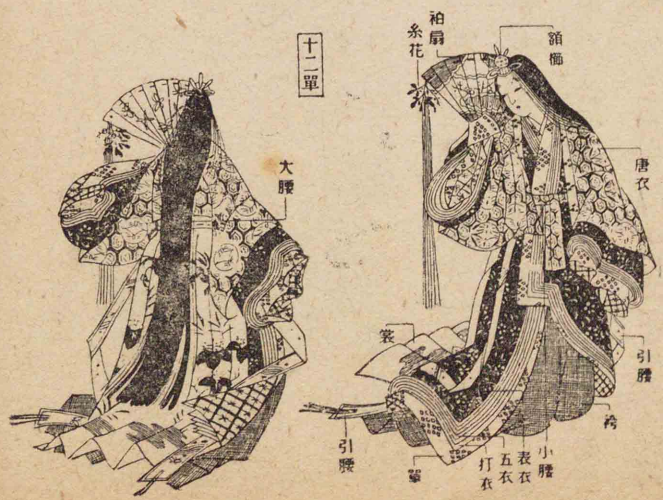
寢殿は正殿で主人のあるところ、その後方の北對は主婦、左右の東對・西對は家族のあるところである。泉殿・釣殿は納涼・觀月その他の遊びに用ひた。これらの建物は皆廊下を以て連ねられてゐる



寢殿造

の特色を示してゐる。鳳凰堂内にある本尊は名工定朝の作といはれ、堂内の壁畫・屏繪は宅磨爲成の筆と

と稱する。建築彫刻なども佛寺邸宅の建築につれて進歩した。中にも道長の建てた法成寺、頼通の建てた宇治の平等院の鳳凰堂などは華麗を極め、日本固有の特色を示してゐる。鳳凰堂内にある本尊は名工定朝の作といはれ、堂内の壁畫・屏繪は宅磨爲成の筆と



平安時代貴婦人の風俗

彫刻
繪畫

いはれる。繪畫にはこの他に巨勢金岡(仁明天皇・文德天皇の御代)が著はれた。この頃からわが國獨得の大和繪があらはれた。

風俗 藤原氏をはじめ、京都に住んでゐる大官や貴族は、奢侈に流れて、月に花に詩歌管絃の遊に耽り、圍碁雙六・歌合などを事とした。また寢殿造といふ優美な邸宅に住み、男子は束帶(正裝)直衣狩衣(共に常服)、女子は十二單(正裝)・袿(常服)など華美な衣服をまとうた。

第九章 後三條天皇 院政

後三條天皇の御治世
藤原氏の衰勢

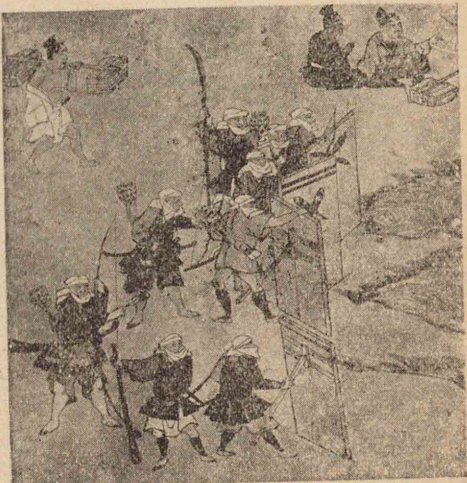
後三條天皇 後三條天皇(第七十代)は英明にましまし、かねてより藤原氏の専横を憤り給うた。その上、天皇の御母は三條天皇の皇女であらせられたから、藤原氏を憚り給ふこともなく、御即位の後には御自身に政を御とりになつた。されば藤原頼通の弟教通の關白は空位に等しく、藤原氏の勢力は漸く衰へた。

この頃、莊園はますます増加し、その弊害が甚だしかつたので、天皇はまづこれを改め給ふために、記録所キキロクショを設けて莊園の證文シヨウモンを取調べ、その不正なものは停止せられた。また奢侈を禁じ、切りに朝政を改められたので、皇威は再び盛になつた。天皇は御在位五年にして御子白河天皇に御讓位あそばされ、更に改革を進めようと思召されたが、程なく崩ぜられて、折角の御志も空しくなつた。

院政 白河天皇は剛毅にましまし、後三條天皇の御志をついで、御位を御子堀河天皇に御讓りになり、なほ院におはして政を見そなはされた。これを院政ケンセイといふ。これより院政は御代々の御慣例となり、すべての政は院中で行はせられたため、攝政や關白は名ばかりのものとなり、藤原氏はますます衰へた。

白河上皇は、その後、堀河(第七十)・鳥羽(第七十)・崇徳(第七十)・三天皇の間、四十餘年にわたつて院政を行はせられた。

一 遍上人繪傳の一部で、僧兵が川岸で戦をしてゐる圖である



兵 僧

僧兵 佛教は久しい間、皇室や貴族の保護をうけ、中にも延暦寺・園城寺(三井)・興福寺・東大寺などの諸大寺は多くの莊園を有して、跋扈甚だしく、武士の勃興につれて、多數の僧兵をさへ蓄へ、時には大舉して朝廷に強訴し奉るなど、横暴を極めるに至つた。

第十章 地方の情勢と武士の勃興

地方の情勢 藤原氏が京都に於て政權を専らにし、朝臣が榮華を極め、遊樂に耽つてゐる間に、地方は大いに亂れ、國司等は人民に誅求するを事としたから、社會の秩序が紊れ、盜賊が横行しても、朝臣等は

平安時代に國司
が出張旅行をす
る有様である

豪族

武士の起り



國司の旅行

太平になれ、官兵は武事の練習が不十分で、これを抑へることが出来なかつた。

■武士の起り その頃京都では藤原氏の一門が重要な官職を占めたので、才氣あるものでもその志を達することが出来なかつたから、國司となつて地方に下るものが多かつた。それらの人々は任地に永住して豪族となつた。これらの豪族は地方が亂れるにつれて、家子郎等を養つて徴兵にかへ、私領を守るために常に武を練り、事ある時の用意に備へた。

これが即ち武士の起りである。

■承平天慶の亂 朱雀天皇(第六十一代)の御代に、東國にはびこつてゐた平氏の一族將門は、檢非違使を望んだけれども聽かれなかつたのを憤

平將門の叛

藤原純友の叛

り、東國に歸つて、承平五年(九五五)伯父平國香を攻め殺し、天慶二年(九五二)下總の猿島(石)に叛を企てた。翌年朝廷は藤原忠文を遣つて討たせられたが、忠文が著かない前に、將門の同族の平貞盛が藤原秀郷と共に將門を攻め殺した。同じ頃に藤原純友が伊豫(媛)に據つて叛き、海賊を率ゐて瀬戸内海を掠めたから、朝廷は小野好古と經基王とを遣つて討たしめられ、純友は遂に誅せられた(二六〇)。これを承平天慶の亂といふ。

源平二氏の出世

貞盛は桓武天皇の御曾孫に當る平高望の孫である。經基王は清和天皇の御孫で、後に源の氏を賜はつた。承平天慶の戦功により、源平二氏の武名は著はれ、これより後朝廷は事あれば二氏を用ひて鎮めさせられた。

刀伊の入寇

藤原隆家の武功

■刀伊の入寇 後一條天皇(第六十八代)の寛仁三年(二六七)黒龍江の東西兩岸に住んでゐた刀伊の賊が突然わが九州を襲うたが、太宰權帥藤原隆家は撃つてこれを退けた。

源頼信の武功

平忠常の叛 同じ御代に平忠常が下總に據つて叛いたが、源頼信は命を奉じてこれを平らげた(二六九)。頼信は經基の孫であり、父を満仲、兄を頼光といひ、皆源氏の名將であつた。

安倍頼時叛す

前九年の役 後冷泉天皇(第十代)の御代に、陸奥(奥羽地方)の豪族安倍頼時が衣川(岩手縣南部)に據つて叛いたが

源頼義父子の武功

(七三三)頼信の子頼義は子義家と共に先づ頼時を誅した。ついで出羽(山形・秋田)の豪族清原武則の援を得て、頼時の子貞任を厨川柵(盛岡市西)に圍んで滅ぼした(七三三)。これを前九年の役といふ。

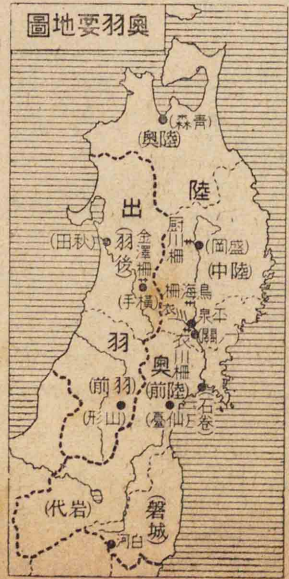
清原武則

安倍貞任滅ぶ

清原氏の内訌

源義家の武功

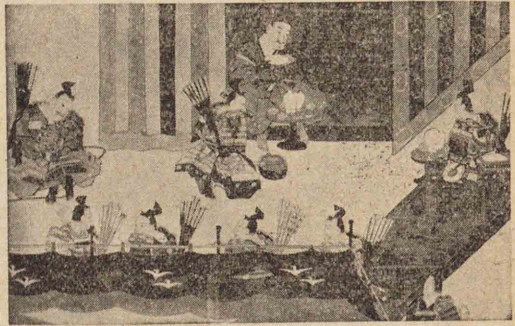
後三年の役 その後、白河天皇(第二十代)の御代、清原武則の孫の眞衡の代になつて、その一族の間に争が起り、奥羽の地は再び亂れた。陸奥守兼鎮守府將軍であつた義家は眞衡を助け、弟義光(新羅三郎)及び藤原清



源氏の聲望

後三年合戦繪卷の一部で、源義家が出陣に當り、弟義光と戦勝を祈りつつ酒宴を催してゐる有様である

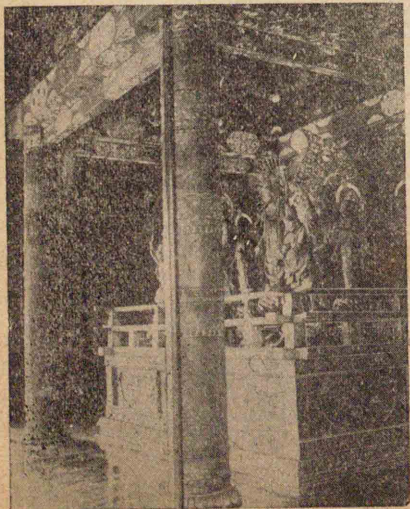
陸奥藤原氏の富强



後三年の役

陸奥の藤原氏の富强 清衡は後三年の役の功によつて、清原氏の舊地を領し、子孫三代九十餘年間、平泉(岩手縣南部)にて奥羽地方に勢力を振ひ、京都の文化をもとり入れて榮華を極めた。清衡が平泉に建てた中尊寺の金色堂は今に遺つ

金色堂は一に光堂とも呼ばれる。圖はその内陣で中央の阿彌陀觀音像をはじめ、柱・天井等に至るまで精巧華麗を極めてゐる



中尊寺金色堂内陣

て、當時の榮華を偲しのばしめる。

第十一章 源平二氏の盛衰

■平氏の興起 平氏は貞盛五世の孫の忠盛タケモリが白河法皇の御信任を蒙り、また西國の海賊を平らげて功があつたから、西國に勢力を得、武士の首領シュリヤウとして源氏と並び立つこととなつた。

藤原氏同族の争

■保元の亂 源平二氏が地方に勢力を得た頃、藤原氏はなほ同族間の争を續けた。左大臣藤原頼長は兄關白忠通とよからず、遂に崇徳上皇に近づきまつり、兄に代つて權勢を占めようとの望を抱いた。即ち後白河天皇の保元元年(一〇六六)、上皇に勧めまつつて兵を擧げ、源爲義その子爲朝、平忠正等の武士を招いた。ここに於て忠通は後白河天皇を奉じ、源義朝、平清盛等を招いて、頼長方の軍を破つた。これを保元の亂といひ、藤原氏一門の争に起り、源平兩氏また戦に加はり、畏

源平同族の争

平治物語繪卷の一部
頼朝伊豆に流さる

圖(上)
像は京都市六波羅密寺藏

清盛の榮達

れ多くも累を皇室に及ぼし奉つた。

■平治の亂 保元の亂の後三年、二條天皇の平治元年(一〇六九)に、藤原信賴と源義朝は相謀り、藤原通憲(入道信西)と平清盛を倒さうとして兵を擧げた

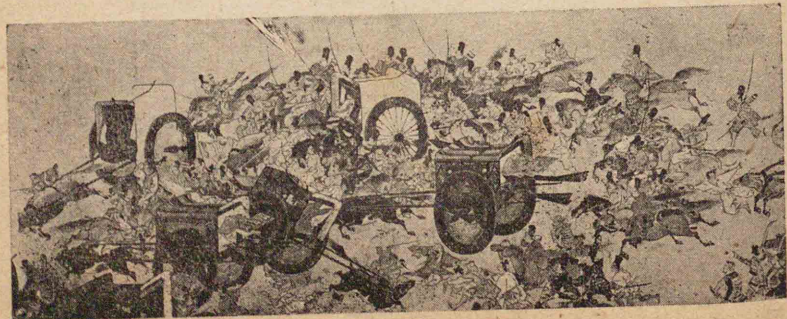


が、忽ち敗れて誅せられ、義朝の第三子頼朝は翌年伊豆(靜岡縣)に流された。これを平治の亂といふ。



平清盛とその自署

■平氏の隆盛 保元平治の亂により、源氏の勢力は殆ど衰へて、平氏は大いに榮え、平清盛は六條天皇(第九代)



平治の亂

平氏の隆盛

の御代に武士として始めて従一位太政大臣にのぼつた。その女徳子(建禮門院)は、高倉天皇(第八代)の中宮となり、やがて安徳天皇を生み奉つた。かくて平氏の一族は高位高官を占め、昔の藤原氏にもまさつてゐた。

第十二章 平氏の滅亡

清盛の専横

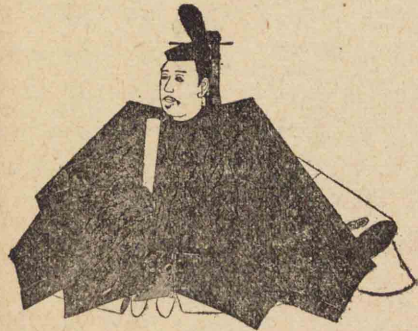
清盛は後白河法皇に對し不謹慎な行があつたが、子重盛に諫められて思ひ止つた。しかし重盛の薨後、また専横を極め、上下の人望を失つた。

源頼政の擧兵

治承四年(一一三二)、源頼政は後白河法皇の御子以仁王(崇徳)を奉じて平氏を滅ぼさうとしたが、事があらはれ、平氏の軍と宇治の平等院の邊で戦つて敗死した。

源頼朝の擧兵

伊豆に流されてゐた源頼



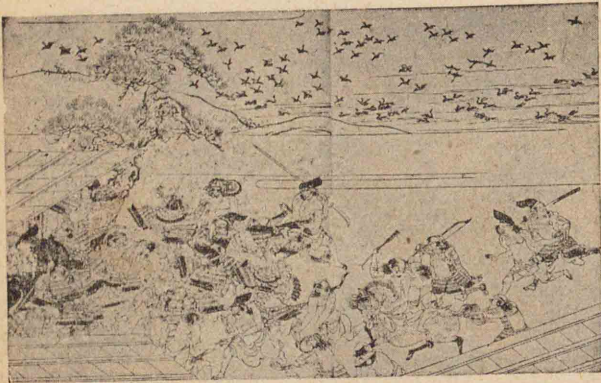
平重盛

以仁王

録倉

富士川の對陣

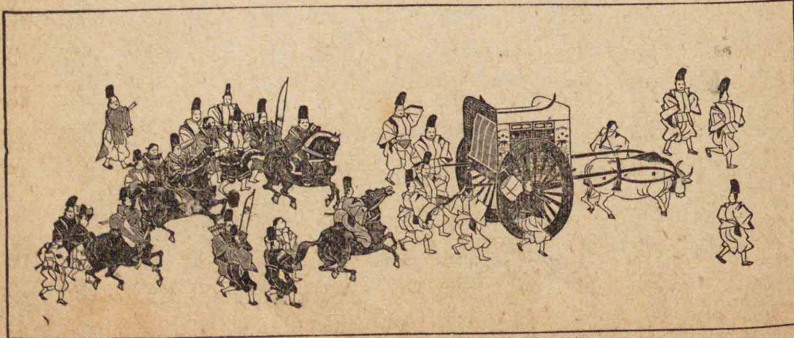
高階隆兼筆春日權現験記の一部



富士川の戦

朝も、以仁王の令旨を拜するや、妻政子の父北條時政と謀つて兵を擧げ、次第に勢力を得て、相模の録倉に據つた。清盛は孫維盛等(維盛)を遣つて頼朝を討たせ

たが、その軍は、富士川を隔てて頼朝の軍と對陣中、水鳥の羽音に驚いて退き歸つた(二八四)。
源義仲の擧兵
同じ頃、頼朝の従弟源義仲もまた兵を信濃に擧げ、しばし



平氏の都落

清盛の薨去
平氏の都落

義仲の横暴

宇治・勢多の戦
義仲の敗死



ば平氏の大軍を破つて北國を従へ、更に進んで京都に迫つた(二八四)。これよりさき清盛は薨じて(二八三)、その子宗盛が家を継いだ。義仲の軍を恐れて都を落ち、安德天皇を奉じて西國に走つた(二八四)。

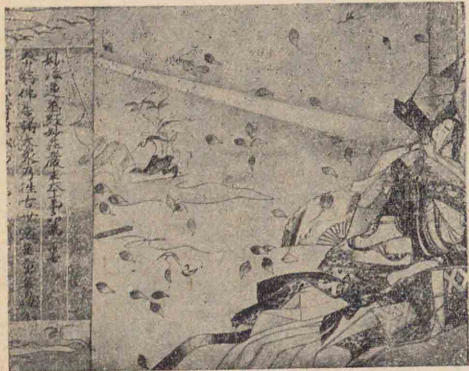
五 頼朝と義仲との争 義仲は直に京都に入つたが、功を恃んで横暴の行が多かつたから、後白河法皇はこれを喜ばれず、ひそかに頼朝を御召しになつた。頼朝は弟範頼、義経等に大軍を授けて、西上して義仲を攻めさせた。二人は義仲の軍を宇治と勢多(大津市東南方)とに破つて京都に入り、義仲は遁れて粟津で戦死した(二八四)。

一谷の戦

屋島の戦
壇浦の戦

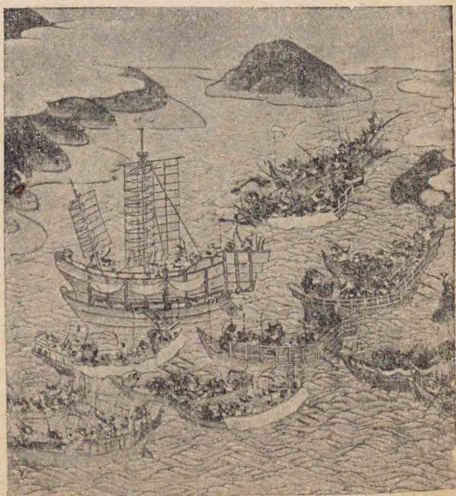
赤間宮所藏の屏風繪による

經卷は清盛以下平家一門の人人が書いて嚴島神社に納めたもので、裝飾の美麗なことはそぞろに平家一代の豪華を偲ばせる



平氏が嚴島神社に納めた經卷の一節

平氏の滅亡 かかる間に、宗盛は西國を従へて勢を得、京都を回復しようとして一谷に據つたが、範頼、義経はこれを攻め陥れた(二八四)。宗盛は退いて屋島(高松市東方)に逃れ、更に壇浦(高松市東方)に走つたが、また義経の軍に追ひつめられて、一族殆ど悲壯なる最期をとげ、畏れ多くも安德天皇も崩御あらせられた。時に壽永四年(八五三)で、清盛が太政大臣として政權を掌握してから、僅かに十九年であつた。



第三篇 近古史

第一章 鎌倉幕府の成立

■幕府の開基 源頼朝は鎌倉に據ると、治承四年(二八〇)先づ侍所を置き、和田義盛をその別當として部下の將士を取締らせ、ついで公文所(後に政所と改めた)を設け、大江廣元を別當として政務を執り行はせ、同年また問注所チヌウシヨを置き、三善康信を執事として裁判を掌らせた。かくて鎌倉幕府の基は定まり、武家政治が行はれた。これは當時の情勢によつたのであるが、國體上よりいへばもとより變態政治であつた。

源氏と鎌倉 鎌倉は三方山で囲まれ、一方海に臨んだ要害である上に、かつて頼義が八幡宮を建てたことなどがあつて、早くから源氏と縁故の深い地である。

■守護と地頭 頼朝は弟義經が勳功を恃んで自己の政治方針にそむき不穩の噂があつたのでこれを捕へ、併せて平家の殘黨を討たん

守護・地頭設置の理由

守護・地頭の職掌

政權武家に歸す

義經秀衡に頼る 義經の最期

陸奥の藤原氏の滅亡



源頼朝とその署名

とし、大江廣元の建議を用ひ、後白河法皇に奏請して、叛亂を豫め防ぐためと稱して、文治元年(一一九二)國々に守護を、公領・莊園に地頭を配置した。守護は軍事警察を掌り、地頭は土地を管理し、租税を取立てる職である。かくて國司も莊園の領主も實權を失ひ、政治の大部分は朝廷を離れて、おのづから武家に歸するやうになつた。實にわが國の政體の一變化である。

■海内の統一 義經は陸奥に逃れて、藤原秀衡に頼つたが、後、秀衡の子の泰衡は頼朝に迫られて義經を殺した。然るに頼朝は、やがて自ら大軍を率ゐて泰衡を攻め、遂に奥州の藤原氏を滅ぼし、幕府の政令は全



義經の署名

國に行はれることとなつた。

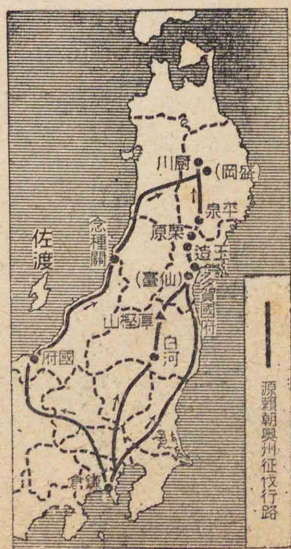
秋風に草木の露を拂はせて君が

越ゆれば關守もなし 梶原景季

四 武家政治の確立 建久三年(二)

三、頼朝は征夷大將軍に任ぜられ

たが、神を崇め、皇室を尊び、また士風を勵まし、政治を嚴にしたので、鎌倉幕府は名實ともに備はるに至つた。



圖地要伐征州良

頼朝征夷大將軍となる

頼朝の政治

頼朝將軍となる
北條時政の横暴
實朝將軍となる

第二章 北條氏の行動

一 源氏の滅亡 土御門天皇(第三十)の御代に頼朝が薨じて(二八五)、長子の

頼家が將軍に任ぜられたが(二八三)、母の政子と外祖父の北條時政とが實權を握り、後時政は頼家を伊豆の修禪寺に幽閉し、その弟の實朝を立てて將軍となし(二八三)、また自ら政所の別當(執權)となつた。

北條氏實權を握る

附註(下)

神奈川縣鎌倉町にあり、初め源頼義が石清水八幡を山比濱に勧請し、更に頼朝が今の地に遷したもので、武家の守護として將士の崇敬をうけたものである

源氏滅ぶ



時政は遂に頼家を殺し、ますます専横を極めたが、ついで執權となつたその子義時の權略は父にもまさり、和田義盛を滅ぼして侍所の別當をも兼ねるに至り、ここに幕府の實權は北條氏に歸した。

承久元年(二七五)、實

朝は右大臣拜賀の

禮を鶴岡八幡宮に行つた。時に頼家の子

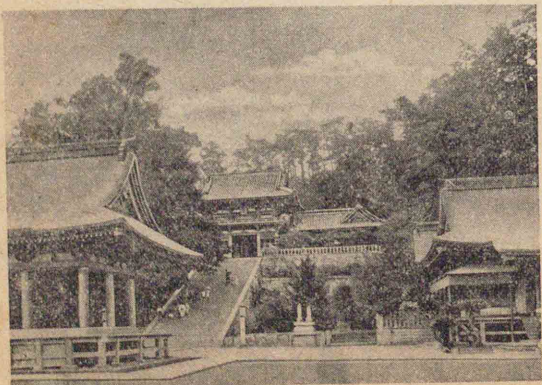
の公暁は、實朝を父の仇と怨みて、これを弑

し、己もやがて殺された。頼朝が將軍とな

つてから僅かに三代二十八年で源氏の正

統は全く絶えた。

山はさけ海はあせなん世なりとも君に二心



宮幡八岡鶴

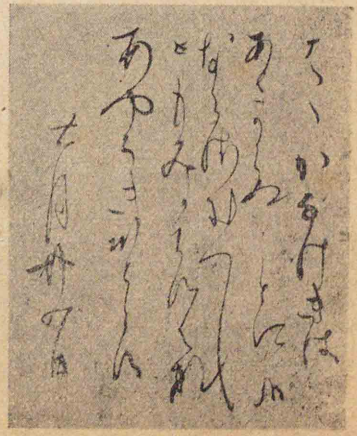
われあらめやも

源 實朝

頼家が死んだ時に人に贈った消息の一節
は、がなげきはあさからぬことに候なくさむべしともみえ候はずあやうきほどに候
七月廿八日

平政子 政子は男まさりの婦人で頼朝に對する内助の功が多く、一流人の身から遂には政權を握るまでにした。夫におくれた後は、尼になつてなほ幕府の政治をあづかり聴き、鎌倉幕府の柱となつて將士の心をつないだ。

世に政子を尼將軍といふ。

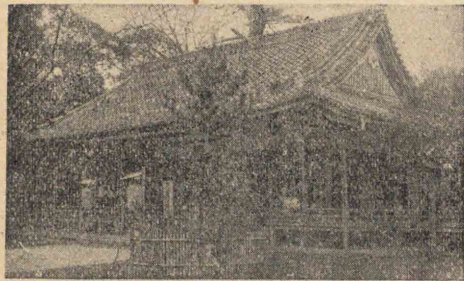


紙子の子政

尼將軍

原因

大阪府三島郡にあり、後鳥羽・土御門・順徳三天皇を祀る



水 無 源 宮

承久の變 後鳥羽上皇は英邁にましまし、かねてより王政復古の御志をいだかせられた。源氏の正統が絶えた後も、執權義時は僅かに二歳の藤原頼經を京都より迎へて將軍となし、且つ上皇の御旨に忤ふこともたびくであつたから、承久三年(二八二)上皇は義時追討の院宣を諸

結果

三上皇の遷幸

國に下して、武士を召し給うた。義時は弟時房子泰時に大兵を授けて京都に攻め入らせ、討幕の御企に與つた人々を罪し、また畏くも後鳥羽上皇を隱岐に、順徳上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐に遷し奉るなど、未曾有の大逆無道を行つた。これを承久の變といふ。

後鳥羽上皇御歌



署自の時泰

われこそは新島守よ隱岐の海のあらし波風こころして吹け

北條氏の政治 承久の變の後、北條氏は京都の六波羅に探題を置

き、近畿、西國の政治を行はしめ、またひそかに朝廷に備へ奉つた。

泰時は頼朝以來の法令を参照し、貞永式目(御成敗式目)を定め、武家の法律の基をつくり、政治にもよく意を



頼時條北

貞永式目

名だけが自署で他は代筆である

用ひ、時頼・時宗も民情に注意した。

第三章 元寇の撃攘

成吉思汗の興起

蒙古の強大 土御門天皇の御代に、支那の北部の蒙古に成吉思汗といふ英雄が起り、勢が強大で、諸國を攻め滅ぼし、その孫の忽必烈に至つては、東は高麗を屬國とし、南は宋を侵し、西は歐羅巴の東部をも従へ、空前



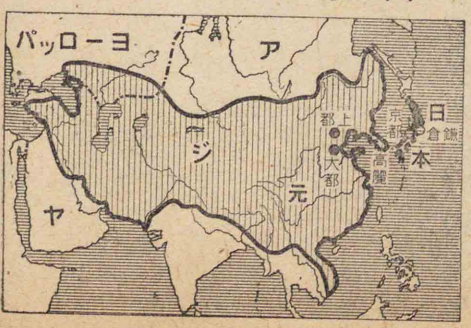
忽必烈 滅ぼし、その孫の忽必烈に至つては、東は高麗を屬國とし、南は宋を侵し、西は歐羅バの東部をも従へ、空前

大都は當時の元の國都で、今の北平の地

蒙古の國書來る

の大版圖となつた。

時宗の豪膽 龜山天皇(第九代)の文永五年(一二二六)忽必烈は國書を贈り、わが國を脅して入貢させようとし、その後も頻りに使を送つたが、執權時



元の大版圖

時宗の英斷

時宗は時頼の子で、皇大神宮を厚く尊信し、剛毅果斷の人であつた



北條時宗とその白晝

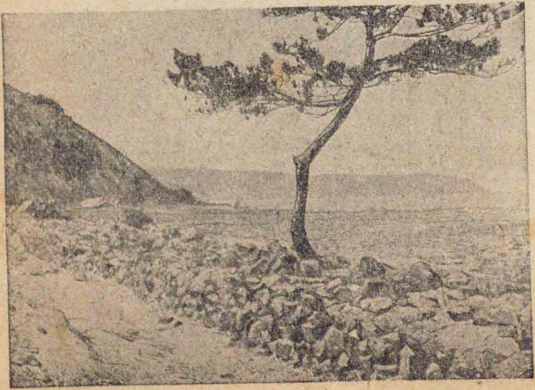
宗はその書辭が無禮なのを見て、朝廷に奏して返書を拒み、國防を嚴にして來寇に備へた。時に蒙古は國號を元と改めた。

文永の

役 文永十一年(一二二四)、龜山天皇は御位を御

子後宇多天皇にお譲りになつた。この年、元は兵四萬を發し、先づ對馬、壹岐を侵して進んで博多(福岡市の一部)に迫つた。敵はすぐれた艦船と武器とを有し、わが軍は苦戰に陥つたが、遂に敵軍を撃退した。

時宗はなほ諸國、特に九州の將士をして、筑前の沿岸一帯に石壘を築いて防備を固



元寇防の石壘

福岡縣糸島郡今津村の西北部沿岸にある。底部十間餘、高さ一間ばかりの土堤の上に大小の割石を高さ五尺から七尺ほど、幅七尺から一丈ほどに積み重ねたもので、築造當時はこれよりやや高く、土堤とも二間餘あつたといふ

今津・志賀島は當時合戦のあつた地、合浦は元の征東行省の所在地で、高麗から入寇した敵軍は皆この地から出發した

元支那を一統す

東路軍の侵入

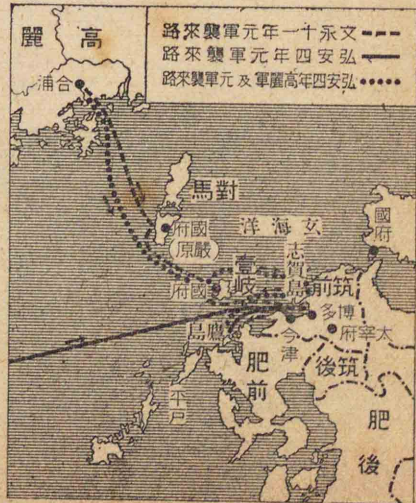
江南軍の來寇

敵艦破壊す

くしたが、將士の意氣盛なるものは進んで敵國征伐をさへ企てた。當時わが國では老人も女子もその一族を出征せしめる強い愛國心をもつてゐた。

四 弘安の役 かかる間に元は宋を滅ぼして全支那を一統し、弘安四年

(二九四)、一舉にわが國をも征服しようとして、東路江南の二軍を發し、まづ東路軍四萬は博多に迫つた。九州四國中國の諸將よくこれを防ぎ、中にも河野通有竹崎季長等は、しばしば敵の大艦を襲つて敵を惱ました。やがて江南軍十萬も來て東路軍と合したが、たまに暴風が起つて、敵艦は多く難破し、殘兵の逃れて鷹島に據つたものも、わが軍に撃たれて全滅した。



元寇要地圖

福岡縣管時八幡宮殿

龜山上皇の御祈願

國民の一致協力

武士道

武士の遊戯

敵國降伏

龜山天皇宸筆

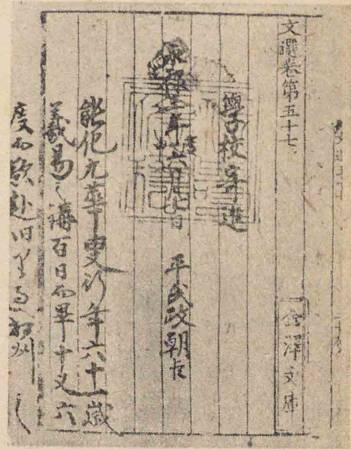
五 國威の發揚 元寇は、開關以來の大國難

であつたが、畏くも龜山上皇は御身に代へてこれを救はうと神宮に祈らせられ、國民もまた上下一致して奉公に志し、遂に強敵を挫いて國家を安全にすることが出來たのである。その後、元は再舉を企てたけれども、遂に果さなかつたが、元が滅んで明の代となつてからも、その太祖は遺言して、わが國を不征國の中に加へた。

第四章 鎌倉時代の文化

一 武士の風俗 鎌倉幕府は、代々頼朝の遺制を守つて政治を行ひ、武藝を奨め、士氣を勵ましたから、その頃の武士は、一般に質實剛健の風があつて、特に廉恥節義を重んじ、名を惜しみ、死を輕んじた。その遊戯も狩獵・流鏑馬・懸犬・追物などの勇壯なものが行はれた。

もと金澤文庫にあつた本を後に北條氏政が足利學校に寄附したものである

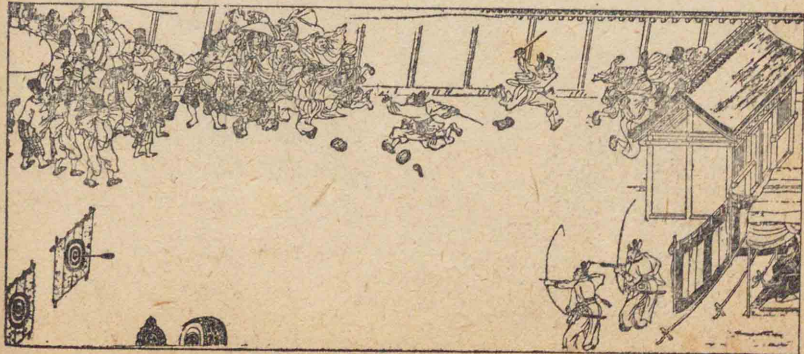


金澤文庫本

■文學 武士
は一般に文事に迂く、文學は専ら公家や僧侶の間に行はれた。たゞこ

金澤文庫
和歌の隆盛

の間にも北條實時(執權義時の孫)及びその孫顯時は、武州金澤の稱名寺内に金澤文庫を建て、和漢の書籍を集め、京都から學者を招いて、講學の便に供した。
しかし和歌はますます盛で、新古今集の勅撰があり、後鳥羽天皇をはじめ、藤原俊成、定家、僧西行、源實朝等のすぐれた歌人が出た。



鎌倉時代の射獵

軍記物

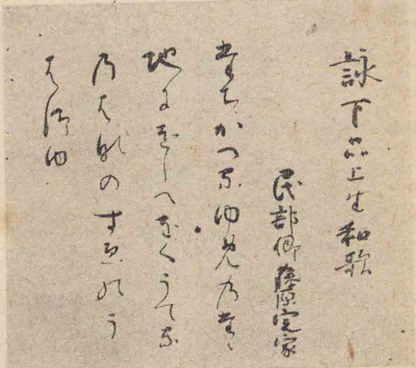
詠下品上生和歌民部卿藤原定家たちかへるゆめのたゝちにをしへをくうてなのはなのすゑのうはつゆ

浄土宗 源空

浄土眞宗 親鸞

法華宗 日蓮

時宗 智眞



定家の懐紙

た保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記などの雄渾悲壯な軍記物が著はされて、和漢混淆の一新文體を開いた。

■佛教 佛教も時勢につれて、新しい宗派が多く起つた。平安時代の末に、僧源空(然法)が浄土宗を興したが、この時代に入つて、その弟子親鸞は浄土眞宗(一向)を開いた(二八四)。

ついで僧日蓮は法華宗(日蓮)を唱へ(二九三)、ややついで僧智眞(一)は時宗を開いた。これらの新宗派は、皆教旨が簡易で行ひ易く、特に當代の民心に適應したから、極めて速にまた廣く世に弘まつた。なほこの時代の初に、僧榮西は宋から歸つて、當時支那で盛に行はれてゐた



法然

臨濟宗(榮西)

曹洞宗(道元)

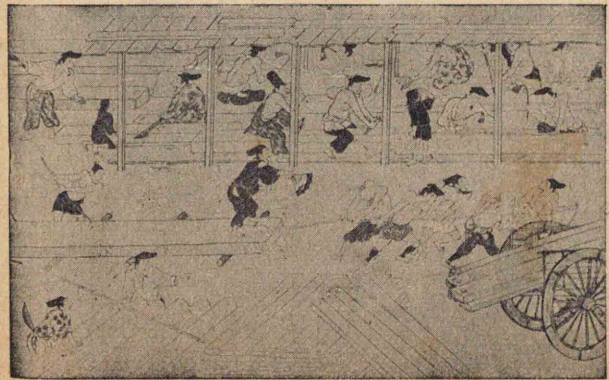


日蓮

したので、厚く幕府の保護を蒙り、専ら武士の間に
行はれた。

美術・工藝 繪畫には土佐光長・藤原隆信・

同信實等の名人が出て、當時の風俗を描いた繪卷物
が發達した。彫刻には運慶、その子湛慶が力強い
佛像、その他の名作を出し、建築には平安時代の
寢殿造はいっしか廢れて、質素な武家風の邸宅が
行はれ、また禪



鎌倉時代の建築作業

石山寺緣起繪卷の一部で、寺院建築の有様を示す

繪卷物
彫刻
建築

陶器

武器・武具

後醍醐天皇討幕の御企

日野資朝
日野俊基



日蓮

宗と共に支那風の寺院建築法が傳はつた。陶器は加藤景正が僧道元に隨つて、宋に入り、その製陶法を傳へて來て、尾張の瀬戸に窯を開いた。武器・武具の製作も時勢につれて進み、中にも刀鍛冶は後鳥羽天皇の御奨励もあつて、粟田口吉光・岡崎正宗等の名

工が現はれた。

第五章 北條氏の滅亡

後醍醐天皇 後醍醐天皇(第九十)は英邁にましまし、執權高時が遊樂に耽り、人心が次第に北條氏を去つた機會に於て、後鳥羽上皇の御志を繼いで、幕府を倒して政權を朝廷に收めようと御企てになつた。そして正中元年(二九四)、日野資朝・同俊基等と謀つて、ひそかに諸方の武

延元三年十二月廿九日天子尊治致白

後醍醐天皇宸筆

士を召されたが、謀が漏れて御企は成功しなかつた。

笠置行幸

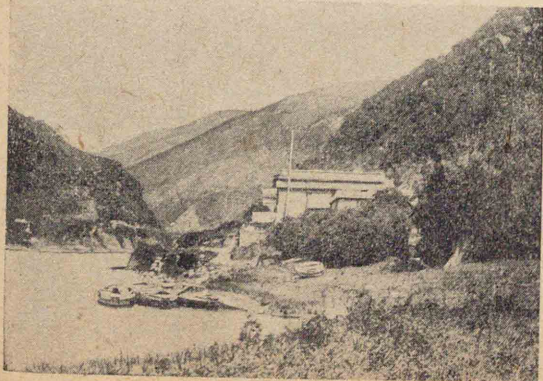
隱岐遷幸

楠木正成

護良親王

元弘の變 その後も天皇の御志は挫け給はず、皇子護良親王と謀りて、僧徒及び近畿諸國の武士を召されたが、元弘元年(一九三)高時が兵を京都に出したから、天皇は神器を奉じて笠置山に行幸になつた。程なく笠置は陥り、翌年高時は畏くも天皇を隱岐(根)に遷し奉つた。

勤王軍の蜂起 これよりさき、楠木正成は詔を奉じて、先づ兵を河内(大)に挙げ、後に金剛山の千早城に據つて賊軍を苦しめ、大いに大義を天下に唱へた。護良親王も吉



笠置山

勤王の諸將

伯耆行幸

六波羅陥落

鎌倉陥落

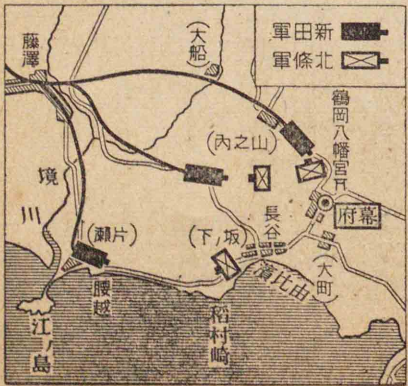
鎌倉幕府滅ぶ



護良親王御筆蹟

野(良)に據つて、令旨を諸方の武士に下され、たから、響の如くに應じまつりて、赤松則村は播磨(兵)に、土居通増、能通綱は伊豫(愛)に、

菊池武時は肥後に起つた。ここに於て天皇は元弘三年(一九三)隱岐より伯耆(取)に行幸せられ、名和長年の奉迎をうけさせ給うて船上山に御座あり、六條忠顯に命じて則村と共に京都を攻めさせられた。時に賊將の足利尊氏は歸順して、忠顯、則村と共に六波羅を陥れ、遂に京都を回復した。
四 北條氏の滅亡 この年、新田義貞も勤王の兵を上野(群)に起し、進んで鎌倉を攻めてこれを陥れた。高時以下一族將士は多く自殺して、北條氏は滅び、頼朝が征夷大將軍に補せられてから百四十餘年で鎌倉幕府



新田義貞の鎌倉略略圖

も倒れた。

第六章 建武の中興

京都還幸

改革の概要

記録所は重大な政治を司り、また領地の裁判もする

諸方面の鎮撫

建武と改元

建武中興 後醍醐天皇は六波羅の陥つたのを聞こしめされて、直に京都に還幸せられた。ここに王政は古に復し、皇國本來の姿に立ちかへることになった。天皇は儒佛の學を究め給ひ、新政治を行はせらるる御決心をもたせられ、まづ記録所に臨んで大政を親裁せられ、新に雑訴決斷所を置いて領地にかかる訴訟の裁判を掌らせられ、武者所を設けて武士を監督せしめられた。また護良親王を征夷大將軍に任じ、北畠顯家を陸奥守に任じて、皇子義良親王を奉じて任地に赴かせ、足利直義(尊氏の弟)を相模守に任じ、皇子成良親王を奉じて、鎌倉にゐて東國を治めさせられた。翌年(二九四)建武と改元があつたので、世にこの御新政を建武の中興と申す。天皇はまた勤王の諸將忠顯

公家と武家との不和

足利尊氏の野心
護良親王を幽閉し奉る
北條時行の舉兵
足利尊氏叛す

尊氏・義貞・正成・長年等の功を賞し給うた。

中興の挫折 萬機御親裁の世とはなつたものの、天皇の尊き御理想を理解しまつる人は未だ少く、尊氏等の武家方は功に誇つて公家方との軋轢をやめなかつた。その上、公卿・武士など政治になれぬもの多く、政令の一致せぬこともあり、恩賞の行き届かぬこともあり、かくて新政の前途は暗くなり、殊に久しく武家政治に馴れた多數の武士の間には、もとの武家政治を思ふものさへ出るやうになつた。

足利尊氏の反 尊氏は新田義貞と共に源氏の後である。勤王軍に歸順して北條氏を倒して後は、武家政治に志し、まづ護良親王を讒して鎌倉に幽閉し奉り、ついで建武二年、北條高時の子の時行が鎌倉を攻めた時、尊氏はこれを機として勅許をも待たないで東下し、時行を破つて鎌倉を回復し、そのままこの地に據つて朝廷に叛き、中興政治の御精神を解しない武士等もこれに應じて勢が大いに振つた。

足柄・箱根の戦

尊氏等の西上

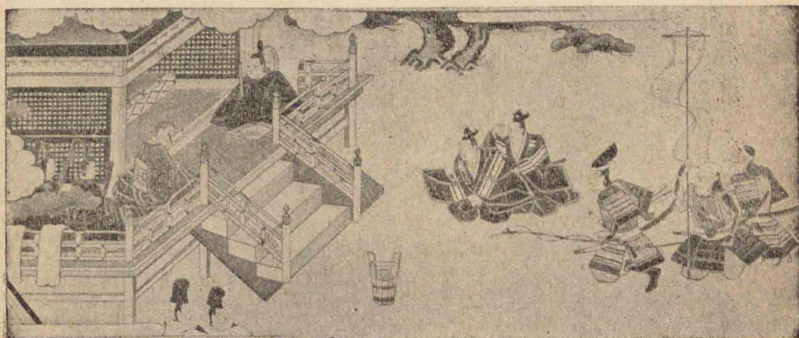
兵庫福嚴寺にて正成をお召しになつた時の圖である

尊氏の敗走

多多良濱の戦

尊氏の東上

湊川の戦



後醍醐天皇楠木正成に調を給ふ

四 尊氏の西走 天皇は義貞に命じて鎌倉を討たせられたが、義貞は尊氏の軍と足柄(河)・箱根(相)に戦つて敗れた。尊氏は直義と共に義貞を追うて西上したので、天皇は難を避けて比叡山に行幸せられた。けれども程なく顯家が義良親王を奉じて陸奥から西上し、義貞・正成・長年はこれと力を協せて、大いに尊氏兄弟の軍を敗り、これを九州へ敗走せしめた。

五 尊氏の上洛 尊氏は菊池武時の子武敏を多多良濱(福岡市の北方)に破り、やがて九州を従へ、四國・中國の兵を合せて、海陸から大舉して東上した。義貞は正成とこれを兵庫(神戸)にむかへ撃つたが、戦利あらず、正成は湊川(神戸)に戦

尊氏の入京

忠顯・長年等の戦死

神戸市にあり、楠木正成を祀る。碑は徳川光圀の建てたものである

光明院

吉野遷幸

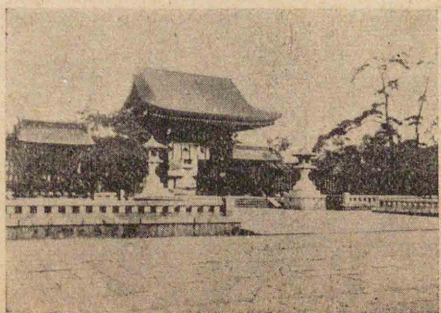
死し、義貞は身を以て京都に逃れた。

かくて天皇は再び比叡山に行幸せられ、尊氏兄弟は京都に入り、その後、忠顯・長年等も相ついで戦死した。

第七章 吉野の朝廷

一 吉野遷幸 尊氏は京都に入ると、賊名を避けるために、後伏見天皇の皇子豊仁親王を立てて天皇と稱し奉つた(光明院)。後醍醐天皇は尊氏の請ひにより、一旦京都に還幸あらせられたが、やがて延元元年十二月、ひそかに神器を奉じて吉野にお遷りになり、ここを行宮と定めて政を聞こしめされた。

二 顯家・義貞の戦死 これよりさき、義貞は詔により、皇子恒良・尊良・兩



湊川神社と楠木正成碑

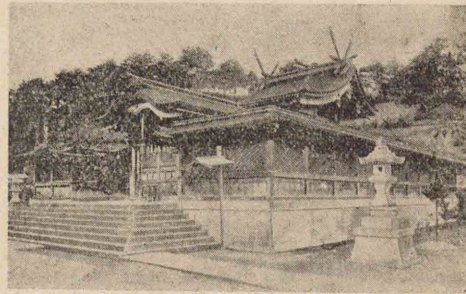


金崎城の陥落

福井市にあり、
新田義貞を祀る

北畠顯家の東

上
石津の戦
藤島の戦



社神島藤

親王を奉じて、越前の金崎城に據つたが、延元二年城が陥つて、尊良親王・恒良親王は、後不幸の最期を遂げられた。顯家もまた延元二年、京都回復のために、義良親王を奉じて陸奥から西上したが、翌年、賊將高師直と和泉の石津(堺市附近)で戦つて討死し(延元三年五月)、この年、義貞も藤島(福井)で戦死した(延元三年七月)。

後醍醐天皇

皇の崩御 顯家の弟顯信は詔を奉じて、父親房と共に義良・宗良兩親王を奉じて陸奥に赴くため、伊勢から海路を東へ下つたが、暴風に阻まれて、親房のみ常陸(茨城)に達



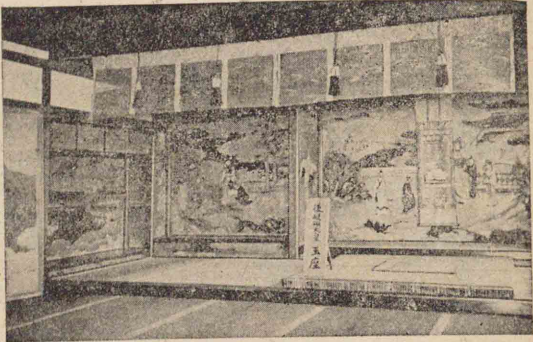
圖地要陸北畿近

し、宗良親王は遠江にお着きになり、義良親王は吉野に還つて、やがて皇太子にお立ちになつた。

翌延元四年(一九七)、畏くも天皇は御悲痛の遺詔を留めさせられ、行宮で崩御せられた。そして皇太子が御位に即かれた。後村上天皇(第九十)と申し奉る。

勤王軍再び振ふ

この時、正成の子正行等は行宮を護り奉り、武敏の弟武光は征西將軍は行宮を護り奉り、武敏の弟武光は征西將軍を懐良親王を奉じて九州に威を振ひ、宗良親王は遠江にあつて東國を經營せられ、親房は吉野に還つて天皇を輔佐し、専ら回復を圖つた。親房はさきに常陸に居た時、陣中で神皇正統記を著はし、皇統の由来を述べて大義名分を明らかにした。



址宮行の野吉

後醍醐天皇の崩御

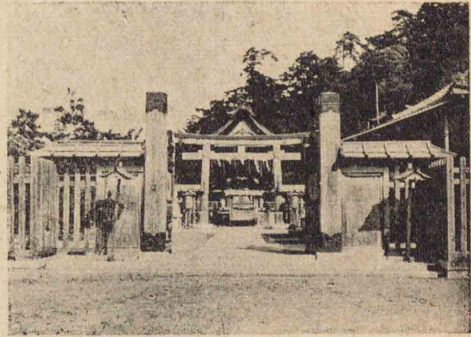
奈良縣吉野郡吉
水神社内にある

北畠親房の勤王

大阪府北河内郡四條畷村にあり、楠木正行を祀る

四條畷の戦

賀名生行幸



四條畷神社

四條畷の戦 勤王軍の優勢に驚き、正平三年(三〇〇)、尊氏は高師直をして大兵を率ゐて吉野に攻め向はせた。正行はこれを四條畷にむかへ撃つたが、衆寡敵せず、遂に壮烈な戦死を遂げた。天皇は難を避けて吉野の奥の賀名生に行幸せられた。

返らじとかねて思へば、梓弓なき數にいる名をぞとどむる。

楠木正行

足利氏の内訌

吉野及び京都の形勢 この頃京都では尊氏直・義師直等の兄弟主従の内訌がしきりに起り、正平六年(三〇二)には、尊氏・義詮父子が打揃うて吉野に歸順したことさへあつた。吉野では正平九年(三〇四)に朝廷

中務卿懷良親王

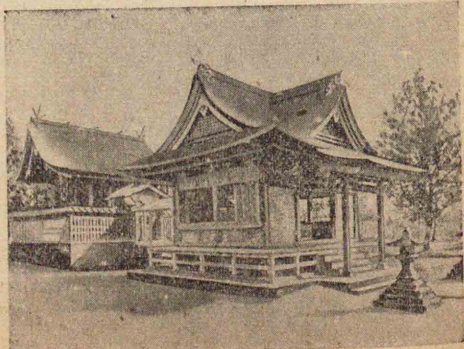
懷良親王御署 柱石と頼まれた北畠親房が病

(下) 熊本縣菊池郡隈府町にあり、菊池氏一族を祀る

筑後川の戦

みて薨じた。また肥後の菊池武光は懷良親王を奉じて、正平十四年(三〇六)に、賊將少貳頼尙の軍を筑後川の戦に大いに破つたが、武光の死後、九州の勤王軍はまた次第に衰へた。

京都還幸 後村上天皇の後、長慶天皇(第九十代)が御位に御即きになつた。



菊池神社

時に義詮の子義満は、極力、天皇の京都還幸を請ひ奉つたが、天皇もまた久しきに互る戦亂に人民の苦しむを憐み給ひ、元中九年(三三三)義満の請を許して京都に還幸あらせられ、神器を後小松天皇(第一百)に傳へ給うた。後醍醐天皇が吉野に遷幸遊ばされてから、この時まで御四代、五十七年である。

後龜山天皇の還幸

第八章 室町幕府

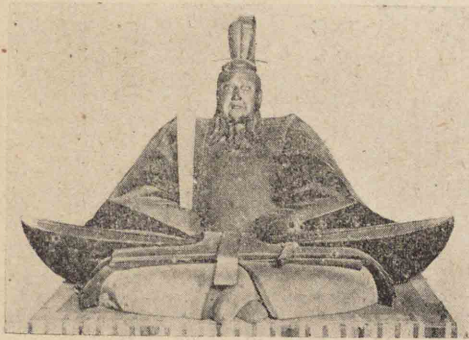
室町幕府

室町幕府 足利義満は華麗な花の御所を京都の室町に營み、ここに幕府を開き、後龜山天皇の還幸後、征夷大將軍に任ぜられ、その基礎を固くした。

三管領

四職

地方の要職



足利義満

幕府の組織 室町幕府の組織は鎌倉幕府に倣つたものである。執權に當るものを管領といひ、斯波・細川・畠山の三家から一人これに任ぜられた。これを三管領といふ。その下に侍所・政所・問注所があつた。侍所の長官を所司といひ、赤松・一色・山名・京極の四家のうちから任ぜられた。これを四職といふ。地方の要職には關東管領・九州探題などがある。

守護

京都市の西北部
鹿苑院の園中に
あり、林泉の美
をかね備へてゐ
る

金閣

滿兼の叛

この時代の諸國の守護は權勢が増大して、殆ど領主の如きものとなつてゐた。

義満の驕奢 やがて義満は將軍職を子の義持に譲り、己は武家としては稀なる太政大臣の高官に任ぜられたが、程なくこれを辭して入道し、北山に營んだ別荘にゐて、なほ政務を見た。この別荘は三層の金閣を起して華奢風流を極めた。義満はまた朝臣を家臣同様に看做し、驕奢の行爲が多かつた。

權臣の跋扈 關東は足利氏の根據地であるから、尊氏はその子基氏を關東管領に任じて、特にその地を鎮めさせた。基氏は鎌倉にゐてよく治め、上杉氏は執事となつて、またよくこれを輔佐したが、基氏の孫滿兼に至つてやうやく將軍に順はず、周防の大内義弘が叛いた時には、これに呼應した。



金閣

義教の諸將抑
歴



足利義教

へ、強臣が權を恣にし、下剋上の風はますます激しくなつた。

四 義政の失政 義教の後に義勝を経て、義

政が將軍に補せられた(三〇七)。義政は政治に心を用ひず、ひたすら奢侈に耽り、土木を起し、課税を重くして、たび／＼徳政の令を發するなど、人民の苦しみを顧みなかつた。

五 應仁の亂 その頃管領細川勝元と山名



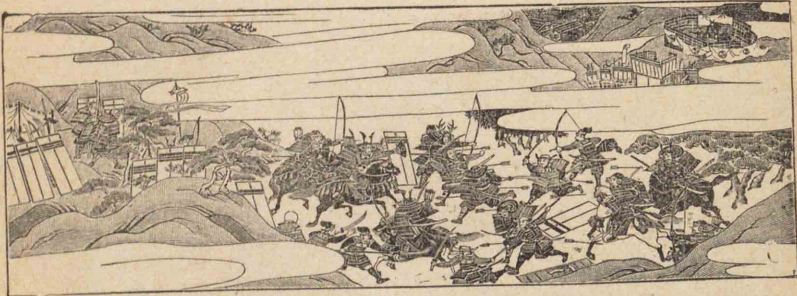
足利義政

將軍家の家督
争
畠山・斯波兩
氏の家督争

應仁の亂起る

京都真如堂縁起
の一部

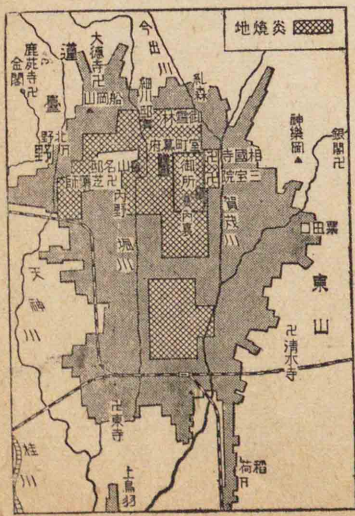
宗全・勝元の
卒去



應仁合戦の圖

宗全(持)とは互に勢力を争つてゐた。たま／＼將軍家にも家督争が起り、畠山・斯波の兩管領家にも相續の争があり、おの／＼細川・山名の一方に與みして、天下の勢はおのづから兩分し、遂に應仁の大亂となつた。

後土御門天皇(第百三代)の應仁元年(三三三)、兩軍の間に戦端が開け、おの／＼諸國の兵を催して、京都の内外で戦を續けた。後六年、宗全と勝元とが相ついで卒し、義政もまた職を義尙に譲つたけれど、も三三三、兩軍は



京都要地圖

兩軍の解散

なほ解散しなかつたが、文明九年三毛に至り、やうやく諸將は兵を收めて國に歸つた。これを應仁の亂といふ。

京都の荒廢

この亂に京都は十一年の間、矢叫の巷となつて、社寺邸宅などは殆ど焼け失せ、公卿や町人などは多く地方に落ちて往つたから、花の都も、淋しい焼野原となつた。かくて幕府の諸大名統一の力は衰へ、ここに群雄争覇の序幕がひらかれた。

なれや知る都はのべの夕雲雀あがるを見ても落つる涙は

飯尾彦六左衛門

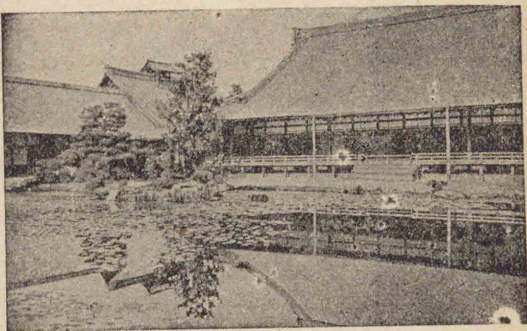
第九章 室町時代の外交

支那との交通 元寇の後も、わが僧侶や商人などの支那に往來することは絶えなかつた。尊氏は後醍醐天皇の御冥福を祈るために、京都に天龍寺を建てようとした時、貿易船を出さしめて、造營費にあ

天龍寺船

足利氏と明との交通

京都市右京區嵯峨にある



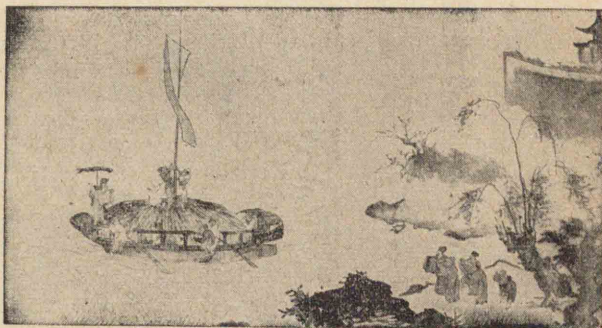
大内氏等の通商

縣)の大内氏がこの勘合符のことを掌つて榮えた。

國民の海外發展 鎌倉時代の末頃から國民の海外發展は盛になつたが、特に四國・九州等の民は支那・朝鮮の沿岸にまで渡航して貿易に従事した。然るに明の商人や役人が時々不正を働いたので、わが

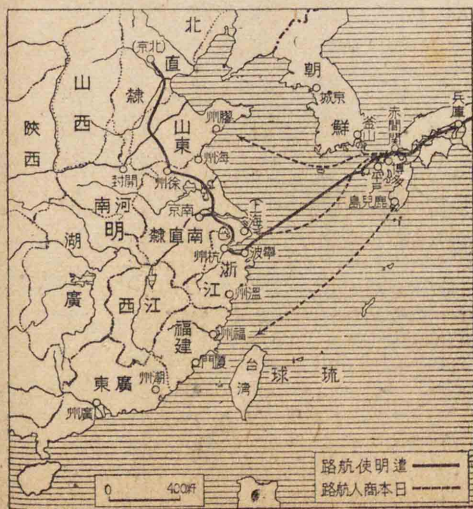
遣明使策彦がわが天文十九年歸朝に際し在明三年の間の友人等に送られて將に出帆せんとする圖である

李成桂高麗の王位を篡ふ



遣明使の歸朝

に都を奠め、國號を朝鮮と改めた。この頃の朝鮮貿易はおもに對馬の宗氏が掌つてゐた。



日明交通圖

第十章 室町時代の文化

銀閣 京都市東山の慈照寺境内にある 陶器・漆器

繪畫 明兆 雪舟 狩野元信 土佐光信



雪舟

第十章 室町時代の文化

美術工藝 義政は應仁の亂後の疲弊をも顧みず、京都の東山に別荘を構へて、その中に銀閣を建て、庭園を營み、和漢の古器名畫を集めて奢侈に耽つた。殊に茶の湯を好んだから、この風が次第に行はれて、陶器や漆器の製法が進み、それらの精巧なものが多く世に出た。繪畫は早く鎌倉時代から宋・元の法が傳はつたが、室町時代に入つて、佛畫の大家に明兆出て、雪舟は墨繪に



銀閣

金工

長じ、狩野元信は和漢兩畫の長所を採つて狩野派を起し、土佐光信は大和繪を中興した。金工の名人後藤祐乘の出したのも同じ頃である。美術史上でこの時代を東山時代といふ。

足利氏と禪宗

京都五山
南禪寺(上位)
天龍寺・相國寺
建仁寺・東福寺
萬壽寺
鎌倉五山
建長寺・圓覺寺
壽福寺・淨智寺
淨妙寺

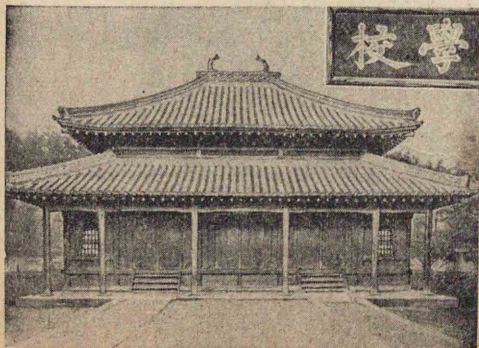
佛敎 禪宗は室町時代に入つても、武士の間に多く行はれ、足利氏は北條氏に倣つてこれを保護し、京都鎌倉の五山も定められた。禪僧の中には幕府の政治外交の顧問に任ぜられたものもあつた。一向宗、法華宗等は民間に行はれたが、特に一向宗では義政の頃、僧衆

僧衆

上杉憲實の奨學

詩文

壽(如)が出て、本願寺の勢力を大いに高めた。文學 室町時代には、文學は一般に振はなかつたが、上杉憲實は金澤文庫、足利學校を再興し、一條兼良は博學の聞えが高く、また京都鎌倉五山の禪僧の中には、詩文に巧みなもの



足利學校

*徒然草は吉野朝廷時代の作

和歌
連歌
謡曲



宗 祇 師 法

が少くなかつた。國文學としては徒然草、太平記があり、和歌には太田道灌、連歌には僧宗、祇等の名人が出た。能樂と謡曲とはこの時代の特色で、義政はこれを最も好んだ。

衣服

飲食

家屋(書院造)

遊技

茶の湯
插花
香合
能狂言

ら、一般に淡白瀟洒を好むやうになつた。衣服は素襖、肩衣などが武士の間に次第に用ひられ、飲食は料理法が大いに進み、家屋の構造は書院造として玄關床の間などを設け、疊を敷きつめることとなり、ほぼ今日見るやうなものとなつた。また遊技には茶の湯、插花、香合、能狂言などが盛に上流社會にもてはやされた。

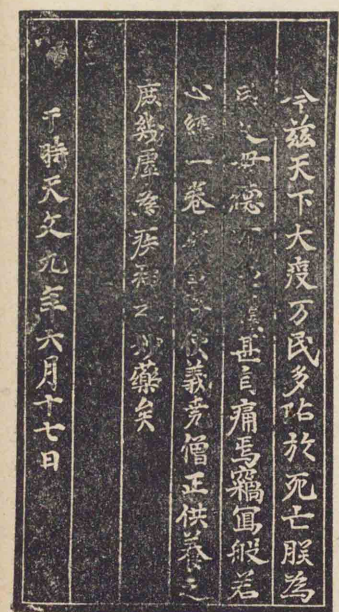
第十一章 群雄の興起

實力競争の世

■戦國時代 應仁の亂後は社會の秩序が全く破れて、名門舊家も權威を失ひ、群雄が各地に割據して侵略に日を送り、多くは機會を見て京都に上り、天皇を奉じて全國に號令しようとして圖つた。この間百餘年、室町幕府の威令は地に墜ちた。世にこれを戰國時代といふ。

■朝廷の御式微 この間、畏くも皇室も式微を極めさせられ、後土御門、後柏原、後奈良、正親町の四天皇の御代には、即位の御大禮、御大葬の御儀はもとより、日常の朝儀も滞りがちであらせられた。けれども

後奈良天皇は天文九年の大饑饉で下民の困窮するを憫み給ひ、宮中で御修法を行はれ、御自身般若心經をお寫しになつた。圖はその御跋語である。



後奈良天皇宸筆

皇室の御尊嚴は毫もかはらず、官位の任敍などをも輕輕しくは行はれなかつた。中にも後奈良天皇(第五代)は、仁慈聖德に富ませられ、人民が饑饉や疾病に苦しんでゐるの

を憫まれて、神宮に祈願をこめられ、宸筆の御寫經を諸國の社寺に納め給うた。

國民の尊王

國民の皇室に寄せ奉る尊王の心も深く、大内義隆、毛利元就、本願寺法主等は即位の大禮の御費用を献上し、三條西實隆、山科言繼等の公卿は、窮乏の中にも、おのゝ地方に赴いて、専心皇室に盡し奉るべきことを大名に諭し、伊勢の尼僧慶光院清順は、諸大名を動かして獻金せしめ、實に百三十年目に外宮の正遷宮を擧げ奉らせた。かくて國民は皇室に接近しまつり、かへつて勤王の精神は盛になつた。後の織田氏、豊臣氏等は、この人心の歸趨を察して王事に盡し奉り、遂に國內統一の業を成したのである。

■關東の分裂 關東では持氏の死後、その子成氏は上杉氏に迎へられて關東管領となつたが、後に上杉氏と不和になり、敗れて下總の古河(茨城縣西南隅)に據つた(三二五)。これを古河公方といふ。上杉氏は更に義教

古河公方成氏

堀越公方政知

山内・扇谷兩上杉氏

北條氏の勃興

國府臺の戰

川越の戰

上杉謙信

の子政知^{（山内）}を東國の主^{（山内）}に迎へ、伊豆の堀越に居らせた^{（三二七）}。これを堀越公方といふ。これから古河と堀越との兩公方が對立し、上杉氏の山内・扇谷の兩家もまた相争うて共に衰へた時、伊勢長氏は堀越公方家の亂れたのに乗じてこれを滅ぼし^{（三五二）}、伊豆をとつて北條早雲と稱し、ついで相模を侵し、小田原城に據つた。その子氏綱は武藏に進んで上杉氏を攻め、また國府臺の戰に里見氏等を破り、孫氏康もまた川越の戰に兩上杉氏・古河公方等の聯合軍を破り、



北條早雲

ついで上杉憲政^{（山内）}を越後に逐ひ、古河公方を擁して、關東の大部分を平定した。北條氏はまたよく領内の政治に心を用ひたので、關東の士民はこれに歸服し、小田原の城下は頗る繁昌した。

中部の形勢 越後の長尾景虎^{（信謙）}は、上杉氏を稱し、しばしば兵を關

武田信玄

川中島の戰

今川義元

桶狭間の戰

三方原の戰

東に出して、氏康と戰つた。また甲斐には武田信玄があつて、兵を信濃に進めたから、謙信もまた川中島に出陣した。信玄と戰つた。この兩氏と對抗して駿河には今川氏があり、義元の時には遠江・三河の二國をも領するに至つた。義元は上京して天下に號令せんとの大志を抱き、大舉して尾張に攻め入つ



武田信玄

たが、織田信長のために不意に桶狭間に襲はれて敗死した^{（三三〇）}。これより今川氏は衰へ、後、信玄に滅ぼされた。信玄は威勢高まるに及び、京都に上らんとし、大兵を率ゐて南下し、遠江に進んで三方原に徳川家康の軍を破り^{（三三三）}、更に三河に攻め



上杉謙信

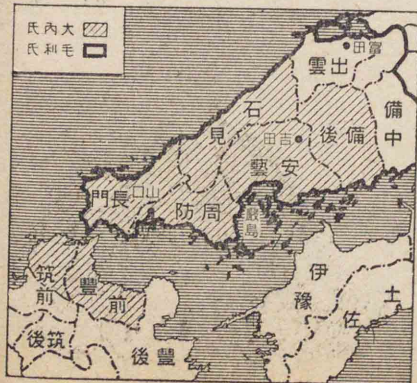
宇喜多氏
尼子氏
大内氏の隆盛



東國・東海要地

周防・長門等の六箇國を領し、明と貿易して國富み、山口の城下は西都と呼ばれるほどにぎはひ、京都の公卿等は兵亂を避けてここに寄寓するものが多かつた。しかし義興の子義隆は富強にまかせて文弱に流れたので、その臣陶晴賢に弒せられた(三三三)。

入つたが、まもなく病死したので、武田氏は振はなくなつた。謙信もかねて西上の志があつたが、俄に病死した。
四 中國地方の形勢 備前には宇喜多氏、出雲には尼子氏が居つた。大内義興は



大内氏・毛利氏の領地

毛利氏中國の覇權を握る

長曾我部氏

龍造寺・大友・島津三氏の鼎立



毛利元就

大内氏の舊領を收め(三二五)、更に尼子氏をも攻め降して、中國の大半を領有した。
四 國及び九州の形勢 四國では、細川氏の衰微に乗じて、土佐に起つた長曾我部元親が遂にその大部分を従へた。九州では少貳氏の家臣龍造寺氏が肥前に起り、豊後の大友氏もまた勢が盛であつ

そこで大内氏の部將毛利元就は、晴賢を嚴島に滅ぼして

年紀元	政義	尚義	植義	澄義	植義	晴義	輝義	昭義
1500	早雲							
1510								
1520								
1530								
1540								
1550								
1560								
1570								
1580								
1590								
1600								
1610								
1620								
1630								
1640								
1650								
1660								
1670								
1680								
1690								
1700								

群雄興亡表

たが、後、薩摩の島津義久が出て、次第にこれらの諸族を抑へ、勢頗る盛となつた。

伊達・南部・秋田・最上の諸氏

奥羽の形勢 奥羽の諸族には、陸奥に伊達氏、南部氏、出羽に秋田氏、最上氏等があつたが、中にも伊達氏が最も勢力があつた。

社會刷新の機運

社會革新の機運 かく群雄が各地に割據して互に争ふ間に、從來の名族が概ね衰亡し、實力あるものがこれに代り、ますます文武の道を起し、政治に勵み、世界の大事を知るに努め、ここに社會刷新の機運が漲るに至つた。

また久しく亂れてゐた世の中も、年を経るに従つて地方にそれぞれ統一が行はれ、やがて全國一統の機運がつくられて行つた。この時にあたり、勇略果斷と地の利とを以てよくこの天下統一の基礎をなしたのは織田信長である。

第四篇 近世史

第一章 織田豊臣二氏の統一

織田信秀

織田信長の経略

信長勅命を拜す

織田氏の興起 織田氏はもと斯波氏の家臣で、信長の父信秀の代に自立して尾張を領した。桶狭間の戦に勝つてから、信長の威名は大いに揚り、その後、北は美濃に入つて齋藤氏を攻め滅ぼし、居城を清洲(名古屋西北方)から岐阜に移した。信秀、信長は父子共に尊王の志が篤かつた。



織田信長

信長の尊王 正親町天皇(第百六代)は、信長の武名を聞きしめされ、永祿十年(三三三)、勅使を賜はつて、御料所の回復を命じ給うた。信長は謹んで勅旨を奉じ、天下を平定して大御心を安んじ奉らうと覺悟し、

信長の入京
信長の尊王

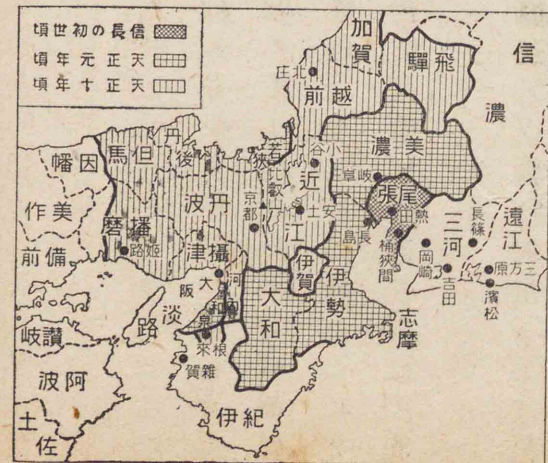
翌年前將軍義輝の弟の義昭を戴いて京都に攻め上り、忽ちこれを將軍職につかした(三三三)。かくて信長は皇居を修理し、供御の料を上り、諸儀式を再興し、また公卿を扶持し、政治にも心を用ひて、叡慮を安んじ奉り、都下の秩序もやうやくに立ちなほつた。

姉川の戦

信長延暦寺を
焼く

室町幕府の滅
亡

信長の近畿平定 ついで信長は北畠氏を攻めて伊勢を取り(三三三)、浅井長政・朝倉義景の聯合軍を近江の姉川に破り(三三〇)、延暦寺を焼いて僧徒を塵にした(三三三)。將軍義昭は信長の威望を嫉み、これを除かうとしたが、天正元年(三三三)、かへつて信長に逐はれ、室町幕府は遂に滅んだ。
この年、信長は遂に浅井朝倉二氏を



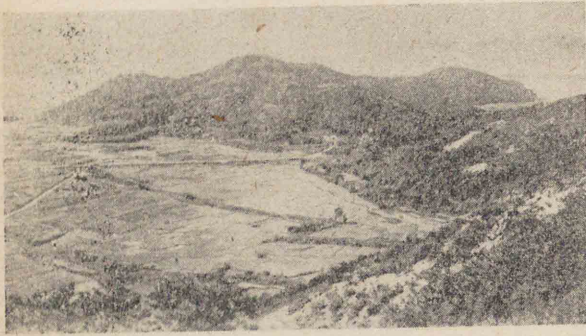
織田信長の勢力伸張圖

信長本願寺と
和す

安土城成る

琵琶湖に突出する中央の半島に城址がある

武田氏の滅亡
秀吉の中國征伐
高松城の水攻



第一章 織田豊臣二氏の統一

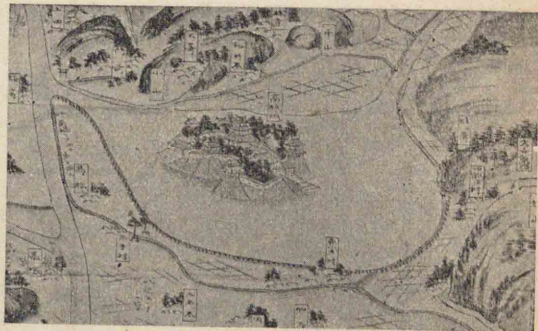
滅ぼして近江・越前を定めた。その頃、本願寺の勢力は諸大名に等しく、光佐・顯如は大坂の石山城に據つて信長と戦ひ、伊勢長島の一向一揆もこれに應じたので、天正二年(三三三)、信長はまづ長島を滅ぼし、ついで石山を圍み、同八年(三四〇)、勅旨を請うて光佐を紀伊に退かしめた。ここに於て近畿は全く平定し、全國統一の業はその緒についた。
安 此れよりさき、信長は壯麗な城を近江の安土に築いて、岐阜からここに移つた(三三三)。
四 信長一統の形勢 信長は天正十年(三四三)に武田信玄の子勝頼を滅ぼし、また羽柴秀吉をして中國に毛利輝元を伐たせた。秀吉は中國に赴き、備中の高松城(守將は清)を圍み、これを水攻めにしたが、輝元が大舉して來援したの

本能寺の變

高松城は清水宗治の居城であるが、秀吉は河水を導いて城に灌ぎ水嵩を増して陥れようとした

山崎の戰

柴田勝家滅ぶ



高松城水攻古圖

て、秀吉は急を信長に報じた。信長は急報に接し安土を出發したが、途中京都の本能寺に於て、その臣明智光秀に弑せられ、ここに信長の海内平定の大業も挫折した。

秀吉の興起 秀吉は本能寺の變を聞くと、直ちに毛利氏と和議を結んで東上し、光秀を山城の山崎(京都市の西南方)に破り、その聲望は急に揚つた。

織田氏の宿將柴田勝家、瀧川一益等は、秀吉の威名を猜み、信長の子信孝と結んで秀吉を除かうとした。秀吉は勝家の大軍を賤嶽(滋賀縣の北部)に破り、進んで越前に入つてこれを滅ぼし、また信孝を自殺させ、一益を降した(三三三)。

やがて信孝の兄信雄もまた秀吉を忌み、徳川家康の援を得て天正

小牧山の對峙

秀吉は戰國以後の新しい築城法に則つてこの城を營んだが、規模宏大にして堅固なることは海内屈指のものである

十二年(三三三)、秀吉と小牧山(愛知縣北部)に對陣したが、やがて和議が成立し、織田氏の遺業は全く秀吉の手に歸した。

全國平定 この前年(天正十一年)、秀吉は大坂城を築いてここに居り、城下に諸大名の邸宅を構へさせ、また堺や伏見の商家を移して

四國征伐

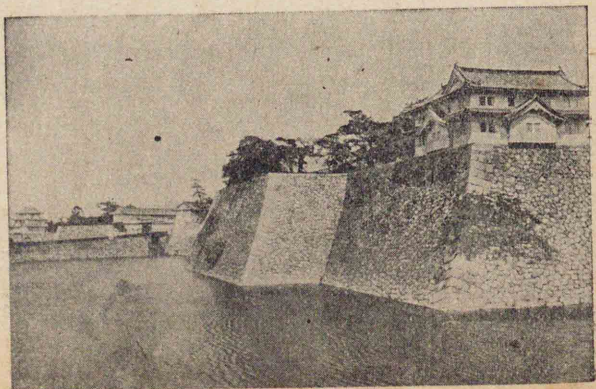
北國征伐

九州征伐



豊臣秀吉

大都市を起した。ついで秀吉は長曾我部元親を四國に攻め、續いて北陸に入つて越中(富山)を従へ、また越後の上杉景勝と和睦した(三三三)。ついで九州の島津氏を討ち、西部日本をも平定した。そ



大坂城址

小田原征伐

の後、關東では小田原城を攻略して北條氏政を滅ぼした(三五〇)。この時、奥羽の伊達政宗も来て降服し、その他の諸氏も皆降り、ここに應仁以来の亂世は全く統一した。

五奉行

秀吉の政治 秀吉は心を政治に留め、石田三成等の五奉行を置いて(三五〇)政務を分擔させ、後に五奉行の上に五大老を置いて(三五二)大事

五大老

を合議させた。また全國の土地に對して始めて正確なる調査を行

田制・幣制

ひ、更に貨幣の制を改めて大判、小判を造るなど、あまねく全國に統一政治を行つた。

秀吉の尊王

秀吉は信長と同じく勤王の志が深く、その天下に號令するにも、皇室を戴きまつてすることを願つた。されば武人の最も光榮とする將軍職はこれを望まず、かへつて當初より朝官を拜して、四國の平定の後には早くも從一位に上り、關白に補せられ、ついで後陽成天皇(第七代)の御代には、太政大臣に任ぜられ、豊臣の姓を賜は

秀吉の榮達

つた。

高臺院 秀吉の妻は杉原氏で、後に高臺院といつた。

尾張の人で、秀吉がまだ立身しない前に、形ばかりの式を擧げて、秀吉に嫁し、内助の功が多く、夫に昔から例がないほどの榮達を遂げさせ、自身も北政所といはれるまでになつた。その夫婦間の愛情のこまやかさは一生かはることがなく、また將士の尊信をうけることが厚かつた。



高臺院

秀吉の敬神尊王の美績は頗る多く、或は皇大神宮を造營し奉り、或は戰國このかた久しく廢れてゐた式年遷宮の制を復興し奉つた。

殊に京都に壯麗なる聚樂第を建て、こゝに後陽成天皇の行幸を仰ぎ、自ら文武百官を率ゐて供奉した時などは、國民は御儀式の尊さを拜して感泣した。なほこの時秀吉は、皇室の御料を増し奉り、親王や公卿の家領を定め、諸大名をして皇室を尊び、忠誠を致すべきことを誓

聚樂第行幸

はせた。

第二章 安土・桃山時代の外交と文化

葡萄牙人の漂着

南蠻船渡來屏風
の一部による

鐵砲傳來の影
響

西洋人の來航 後奈良天皇の天文十二年(三三三)、一隻の葡萄牙船がわが種子島(鹿兒島縣南方)に漂着した。これは西洋人のわが國に來た初である。この時、葡萄牙人は鐵砲を傳へたが、をりしも戰國時代のこゝとて、この新兵器は忽ち諸方に行はれ、その影響を受けて、戰術や築城法などが一變した。この後、葡萄牙人は平戸(長崎縣)と長崎とを互市場として通商し、ついで西班牙人も平戸に來て、貿易を營んだ。



南蠻人渡來圖

キリスト教の傳來

キリスト教の弘通

大友氏の領地の豊後の府内(今の大分市)に建てたものである

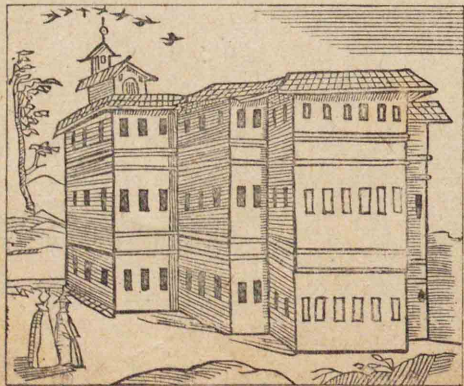


ルエイヴザ=コスシンラフ

當時わが國ではこれらの西洋人をすべて南蠻人といつた。

天文十八年(三〇五)に、キリスト教の宣教師フランシスコ・ザヴィエルが薩摩に來て、始めてその教(切支丹宗または天主教といふ)を傳へた。この教は暫

くの間、九州・中國から次第に近畿・奥羽地方にまで弘まり、都鄙各地に教會堂や學校が見受けられるやうになつた。織田信長は、かねて佛教僧侶の跋扈を憎んでゐたから、この教を保護し、また九州の大友・有馬・大村の三大名は殊に熱心にこれを信じて、遠く使節をローマ法王の許に遣は



キリスト教の學校

西洋文化の傳來

圖はイタリヤのバチカン圖書館の壁畫で、天正十三年三月二十三日ローマ法王宮に向ふ行列の盛況である



大友氏等の使節マール入城圖

した(三四三)

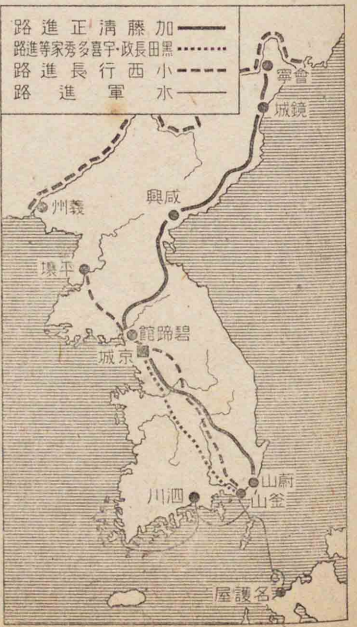
西洋人の渡來と共に西洋文化が傳來し、天文・地理・物理などの新しい科學や活版・油繪・硝子なども傳はり、わが國の文化にも少からぬ影響を與へるに至つた。

秀吉の海外發展 秀吉は世界の大勢を察し、天下一統の後、かねてより發達せる國民の海事思想に乘じ、大いに海外に發展せんとして、先づ對馬の宗氏をして朝鮮との好を修めしめ、更に朝鮮王(昭李)をしてわが意を明に通ぜしめんとした。しかし朝鮮王はこれを

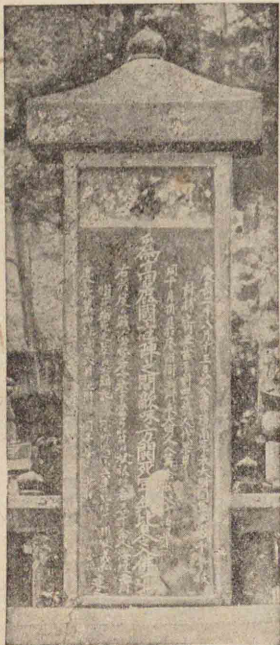
朝鮮出兵

碑は高野山にあり、朝鮮陣に戦死した敵・味方共に供養するため、同役に出征した島津義弘父子が建立したものである

肯じなかつたので、秀吉は遂に兵を朝鮮に出し、自らは名護屋(肥前)にゐて遙かに全軍を督した(三三五)。この役は前後二回(文祿の役)七年に互つたが、慶長三年(三五)秀吉が伏見城に薨じ、その遺命により在外の軍を引上げしめたから、大陸出兵の目的は達し得なかつた。けれども國民の海外雄飛の氣風は大いに養はれた。



朝鮮要地圖



戦死者の供養塔

秀吉はまた島津氏をして琉球に來聘を促さしめ、なほ臺灣・呂宋・臥亞にもそれ〴〵書を贈つて入貢を

安土城

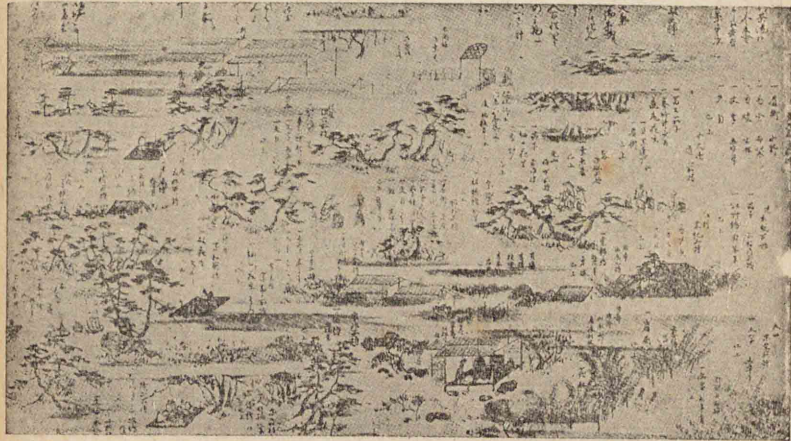
聚樂第

大阪城と桃山城

雄大なる建築

繪畫

秀吉は天正十五年の秋、廣く海内の有志を集めてここに大茶の湯の會を開いた



勸めたが、不成功に終り、秀吉の東洋經略の雄圖は空しくなつた。

安土桃山時代の文化 信長の築いた安土城は、七重の天主閣と、堅固な石垣を有し、規模結構に於て一時期を劃野したものである。秀吉も壯麗なる聚樂第を構へ、大阪城と桃山城(伏見城)と茶をつくつた。この城郭は住宅を兼ねたもので、郭内の建築には豪壯な破風を存し、これに應ずる彫刻も雄大であつた。なほそれらの大襖に狩野永徳(チノノナガトク)山樂(ヤマガク)並びにその一門のものが氣力に満ちた豪華な繪を描いてゐる。桃山

時代の美術には潑刺たる新時代の様式が現はれてゐる。

北條早雲・織田信長・豊臣秀吉その他の諸侯は、儒教の精神を以て政治を行ひ、文武の道を奨励し、能樂茶會等風雅な藝を好み、殊に秀吉は北野(都京)に大茶會を催して民衆と樂しみを俱にし、また醍醐(都京)の花見には公卿・諸大名と共に歌などをよみ、豪華な遊びをした。

第三章 江戸幕府の創立

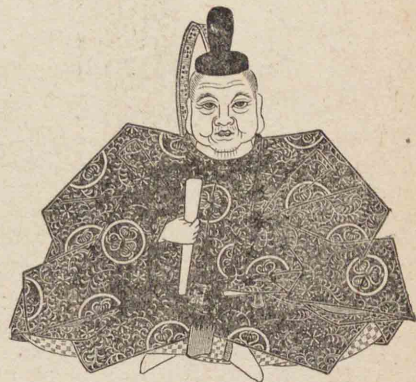
江戸入府

家康の隆盛

徳川氏の興起 徳川家康は、初め三河に居り、早くから武名があつたが、後に秀吉に従つて北條氏を滅ぼしてより、功によつて關東に封ぜられ、天正十八年(三三〇)、江戸城を修理してそこに移つた。

家康は秀吉の晩年に、前田利家等と共に大老となり、聲望が殊に盛であつたが、秀吉の薨後は遺命によつて秀頼を輔佐した。しかし、程なく利家が薨じたから、天下の輿望はおのづから家康に歸した。

東海道繪卷江戸本丸圖の一部で、諸侯登城の様を示す

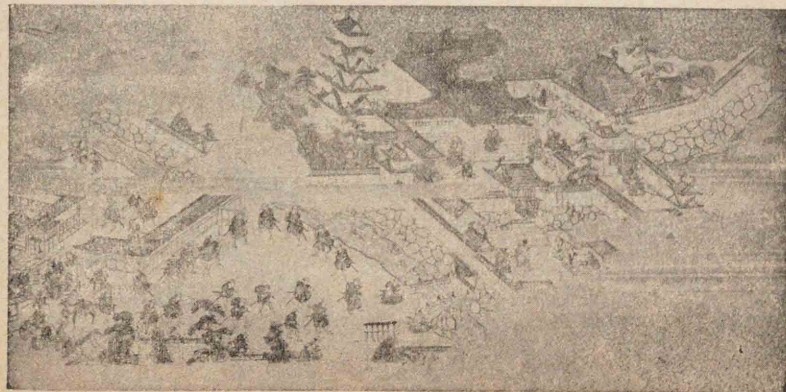


徳川家康

天下分目の戦
家康征夷大將軍とたる

長五年(三六〇)に美濃の關原に戦つたが大敗した。この時、全國の諸大名は大抵東西に分れ附いたから、豊臣・徳川兩氏の興廢はこの一戦で決した。これを世に天下分目の戦といふ。
豊臣氏の滅亡 慶長八年(三六三)、家康は征

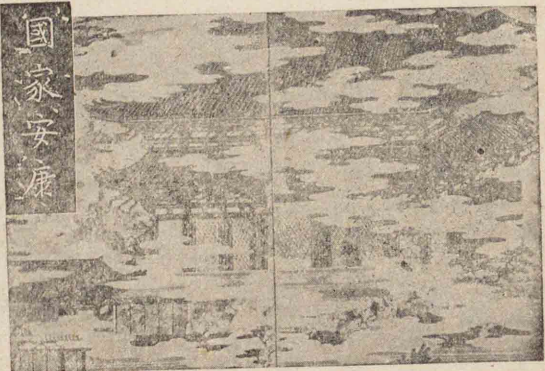
關原の戦
かねて秀吉に信任されてゐた石田三成等は、豊臣氏のために家康を除かうとして、慶



江戸城

方廣寺の鐘は慶長十九年豊臣秀頼が大佛殿再興の時に鑄造したものである

落城前の大阪城門の内外の状況を畫いたものである

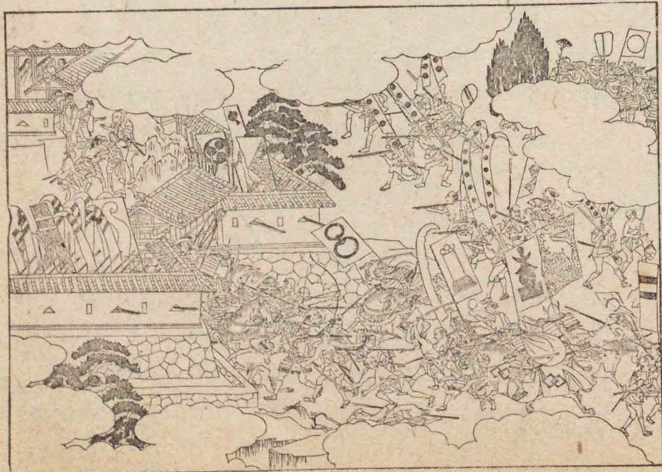


方廣寺の鐘の銘の一節

夷大將軍に補せられて、幕府を江戸に開いたが、程なく職をその子秀忠に譲り(三三五)、駿府に隱居してなほ天下の大事を自ら決し、豊臣氏を滅ぼさうとその機會を窺つて

鐘銘事件
豊臣氏滅ぶ

みた。たまく、秀頼が京都に再建した方廣寺の鐘銘のことから戦を起し、冬夏兩度の陣を経て、元和元年(三三五)豊臣氏を滅ぼした。



大阪夏の陣

中央政府の職制



春日局

江戸幕府の組織 第二代將軍秀忠は性謹厚で、よく家康の遺法を守り、第三代將軍家光は雄々しい賢婦春日局の養育をうけ、剛毅果斷で、諸大名を抑へ、諸制度を定めた。

幕府には中央に大老・老中・若年寄の三役があつた。大老(常置の職ではない)・老中は將軍を輔けて重要な政務を統べ、若年寄は老中を助け、兼ねて他に大目付・目付・寺社奉行・江戸町奉行・勘定奉行などがあつた。幕府はまた地方の要地を直轄して奉行・郡代・代官に治めさせ、別に京都に所司代を、大阪と駿府とに城代を置いた。

封建制度の完成 諸大名は親藩・譜代・外様の三つに分れた。その配置には幕府は深く意を用ひて、大小親疎相交へて互に牽制するやうにした。親藩の中で、家康の子義直・頼宣・頼房の起した尾張家・紀伊

地方の職制

三家

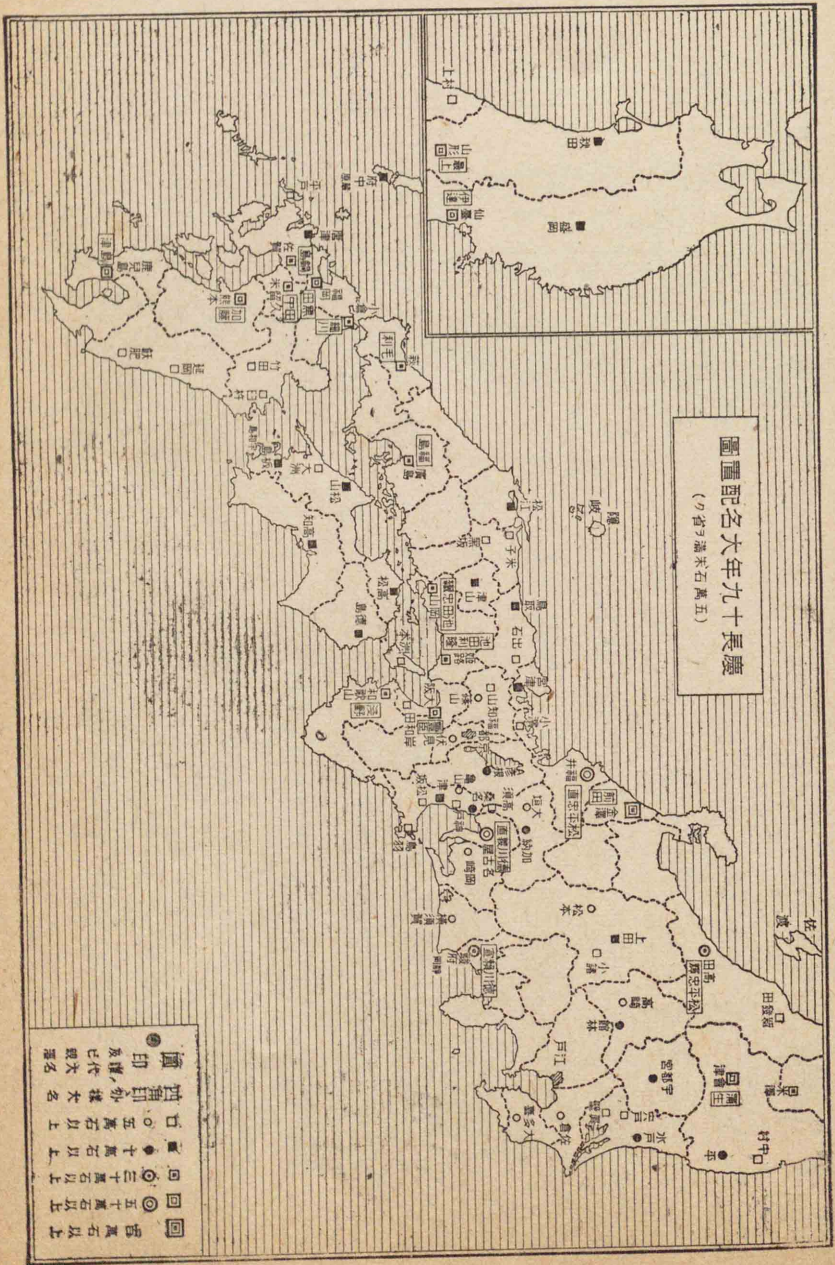
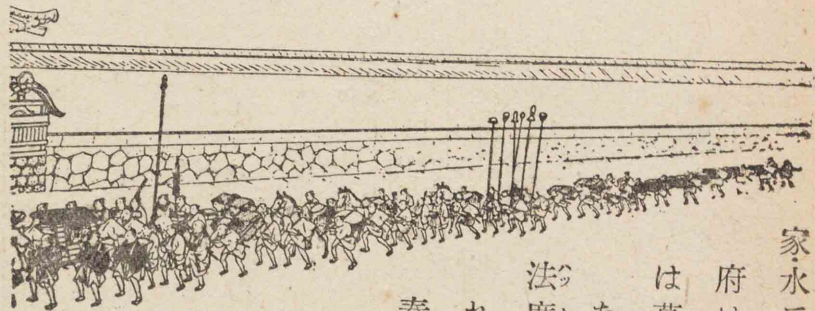


圖 慶長十九年大名配置圖 (の省ヲ略ス)

● 親藩大名
○ 譜代大名
◎ 外様大名
□ 幕府直轄地
○ 五萬石以上
● 十萬石以上
◎ 三十萬石以上
◎ 五十萬石以上
◎ 百萬石以上

参勤交代の制

後水尾天皇



家水戸家は御三家といつて、殊に重んぜられた。また幕府はその要職には概ね譜代大名を任用し、外様大名には幕政を委ねなかつた。

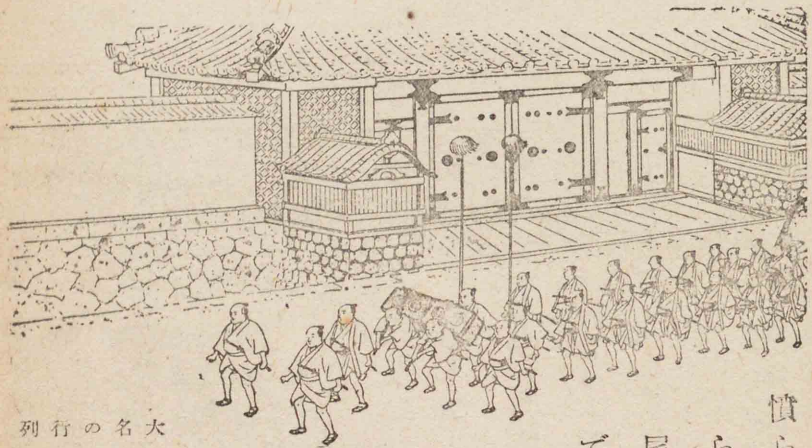
なほ幕府は諸大名を抑へるために、家康の時武家諸法度を定め、家光の時参勤交代の制を立てて、厳しくこれを勵行した。これらの政策はいづれもその效を奏して、封建制度はよく整ひ、幕府は久しくその權力を保つことができた。

朝廷と幕府 幕府は皇居を修理し、御料を豊にし、すたれた儀式を興すなど、頗る尊王の意を表しながら、なほ實際政治から皇室を超越せしめ奉るなどして、自己の勢力を張ることに力めた。寛永六年(三六五)、後水尾天皇(第八代)は幕府の専横を

明正天皇

道路の整備

水運の發達



大名家の列行

慣られて、俄に御位を皇女明正天皇に譲らせられた。天皇は秀忠の女和子(東院)が、後水尾天皇の中宮となつて生み奉つたところで、稱徳天皇以來絶えて久しい女帝にまします。

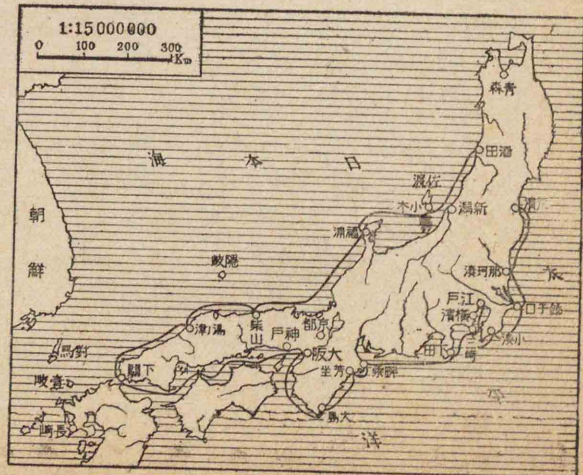
産業の發達 参勤交代の制が定まり、諸侯の往來が繁くなるや、道路は整ひ、宿驛は備はり、交通は頗る便利となつた。東海道、中山道、日光街道、奥羽街道、甲州街道の五街道はその主なるものであつた。また水運は、家康の時に角倉了以が富士川、保津川、賀茂川に舟運の便を開き、家綱の頃河村瑞賢は、幕命をうけて大阪に安

商業の發達

城下町の發達

治川を掘り、また海運は幕府の大船を造ることを禁じたことにより、やや遅れたが、江戸・奥羽間に東西の二航路を開いて、東北地方の産物を江戸に回漕する便利を與へた。ここに於て國內商業も著しく進歩した。幕府はなほ諸國の鑛山(石見等)を採掘して大判・小判・銅錢等を多く鑄造し、以て國富の増加を圖り、また銳意産業を奨励したから、國內の平和と共に、江戸・大阪をはじめ諸侯の城下町も著しく繁昌した。

第四章 海外諸國との交通

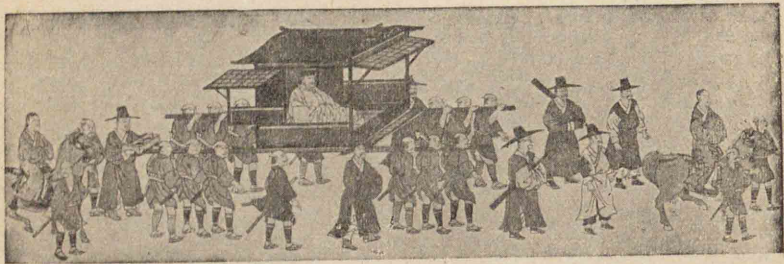


東 西 漕 運 圖

朝鮮との修好

支那との交渉

使節は正使・副使・通事・醫師・畫工・樂人等五百人の多数に上ることあり、これが接待にも多くの費用と日數を要した



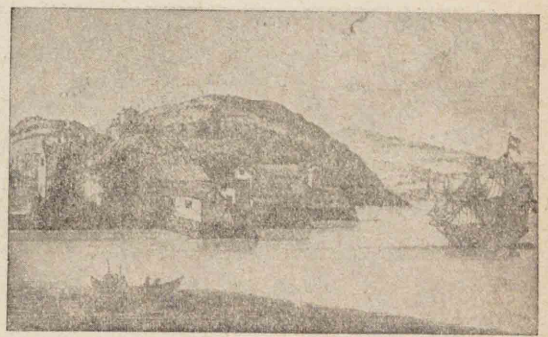
朝鮮使節來聘の圖

朝鮮・支那との交通 家康は朝鮮・支那との國交の回復を思ひ立ち、朝鮮に對しては對馬の宗氏に命じて交渉させた。朝鮮はこれに應じ、その後將軍がその職に就くごとに慶賀の使者をよこす例となり、幕府もこの使節を厚く待遇した。

支那(明)はわが交渉に應じなかつたが、彼我の商人の往來は幕末までも永く續いた。その際、明に代つて清の起るや、その遺臣鄭成功は明朝回復の援兵を幕府に請うたことがあり、朱之瑜(水舜)は徳川光圀の賓師となつて史學を興し、僧隱元は宇治に萬福寺を開いて黄檗宗を傳へた。

西洋諸國との通商 家康は秀吉の志を繼いで海外貿易を盛にすることに力め、慶長五年(一六〇〇)、わ

左方に見える洋館が外國の商館である



平戸の商館

が國に漂着した和蘭人ヤンヨーステン(耶揚)と英吉利人ウリヤムアダムス(三浦)とを江戸に召しよせて優遇し、海外の事情を問うた。その後、家康は、慶長十四年(三六五)には和蘭人に、同十八年(三七三)には英吉利人に、その商船の來航を許した。兩國の商人は平戸(長崎縣平戸島)に商館を設けたが、互に烈しく競争し、英吉利人は遂に敗れて退去した。

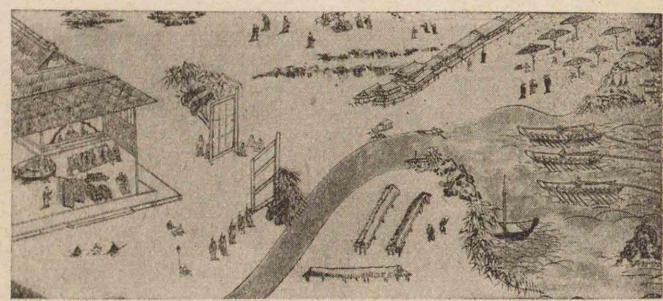
國人の海外發展 かかる間に、わが國人の海外發展の氣運も大いに高まり、長崎・堺・京都等の商人は朱印の免許狀を得て、澳門・安南・カンボヂャ・爪哇など



東洋南洋要地圖

圖(上)

安南の日本人町に大阪の商人茶屋四郎次郎の船の到着した時の光景である



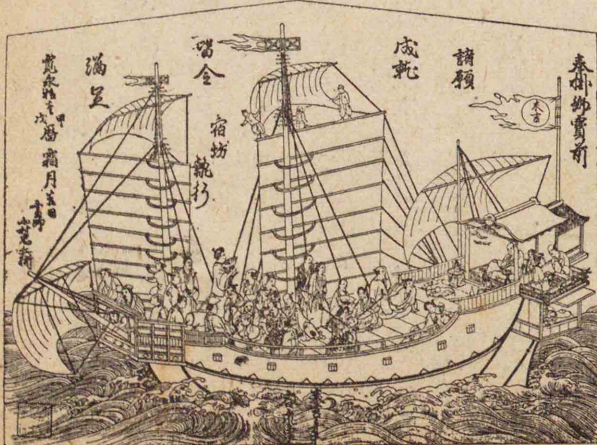
南洋の日本町人

に航して貿易を營むものが少くなかつた。後には西國の諸大名や寺院なども御朱印船を以て海外貿易に従事した。かくて安南暹羅呂宋等にはわが居留民の建てた日本人町さへあつた。家康はまた當時西班牙領であつたメキシコとの通商を企てて、田中勝助を彼地に遣り、また伊達政宗も同じ志があつて、その臣支倉常長を西班牙に遣はす

家康使をメキシコに遣はす

圖(下) 大阪の商人末吉孫左衛門所有の御朱印船末吉丸乗組員が京都の清水寺に奉納した繪額である

伊達政宗支倉常長を歐洲に遣はす

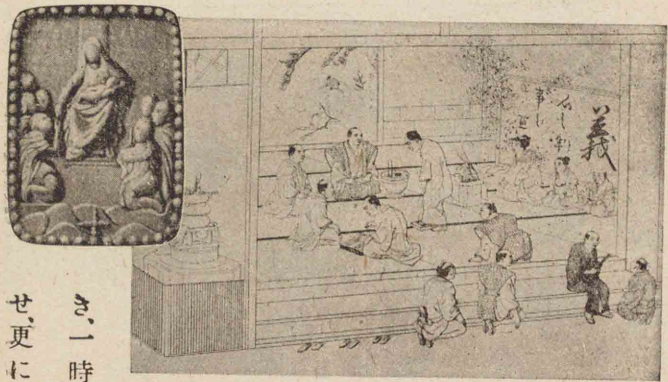


宋吉船

遣り(三三)更に伊太利に赴き、ローマ法王に謁見させた(三三)。このほ
か山田長政は暹羅に渡つて武功をたて、濱田彌兵衛は臺灣に渡つて
和蘭人の暴慢を懲らした。

踏繪は宗門檢め
の時にキリスト
教徒の疑のある
ものに踏ませた
ものである。初
め紙に畫いたも
のであつたが、
後には金屬で造
つた

家光の禁教



踏繪と繪踏の施行

キリスト教の禁 先に秀吉は、政治を紊
す恐ありとしてキリスト教を禁じたが、家
康もその政策をうけついで。しかし外國
との通商にかくれて布教を行ふ宣教師が
多かつたから、家光に至つて、遂に洋書の輸
入、國人の海外渡航などを嚴禁した。

島原の亂 寛永十四年(三九七)、島原半島及び天草島
のキリスト教徒は、島原半島の原城址に據つて叛
き、一時勢が盛であつた。幕府は板倉重昌をしてこれを討た
せ、更に老中松平信綱を遣はし、翌年漸くこれを平定した。

鎖國の利害

前面は長崎港
で、中央に扇形
をして突出して
ゐるのが出島で
ある。シーボ
ルト撰「日本」によ

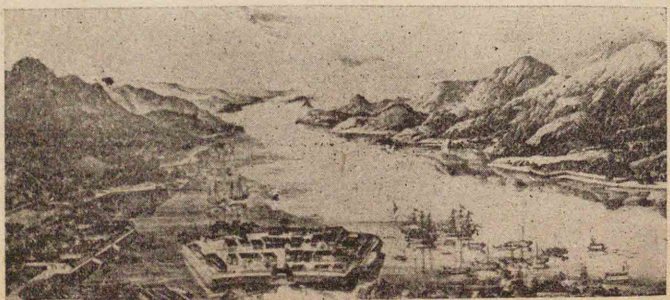
生類憐の令

貨幣改鑄

鎖國 島原の亂後、幕府はいよいよキリスト
教の禁制を嚴重にし、一切の西洋人の入國を禁
じ(三九五)、和蘭人だけは長崎に来て、出島で貿易す
ることを許した。わが國民はこれから全く海
外發展の雄志を挫かれ、西洋諸國の形勢にも暗
くなつた。しかしこのため國內は大いに太平
となり、日本本來の文化は著しく發達した。

第五章 元祿の世相 學問の復興

綱吉の弊政 五代將軍綱吉は初め、政治に注
意をしたが、程なく政に倦み、後には生類憐の令
を出し、犬を保護した。綱吉はまた側用人柳澤吉保を寵用し、なほ勘
定奉行荻原重秀の議によつて粗惡な貨幣を鑄造し、財政の困難を救

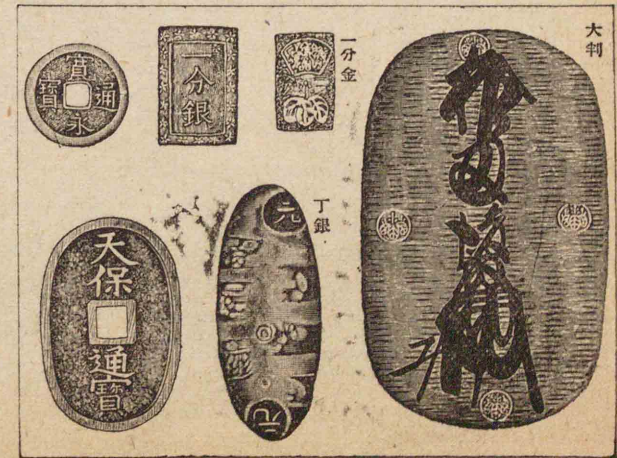


長崎出島の蘭館

はうとしたが、かへつて物價が騰貴して人民は大いに苦しんだ。

元祿風俗 この頃太平が久しく續いて、風俗は一般に奢侈遊惰に流れ、華美な衣服や裝飾、諸道具類が流行し、淨瑠璃・芝居などの興行が繁昌して、武士の氣風がすたれた。世に當時の風俗を元祿風といつてゐる。

慶長大判・慶長一分判金・天保一分銀・元祿丁銀・寛永通寶・天保通寶



幣貨たし通流に代時戸江

赤穂義士 元祿十五年(三三)十二月播磨赤穂の城主淺野長矩の遺臣大石良雄等四十七人は、吉良義央を江戸の邸に襲つて舊主の讐を報い、後世永く武士道の華とたたはれた。

學問の興隆 家康は早くから學問に志があつて、藤原惺窩を召し



高惺原藤

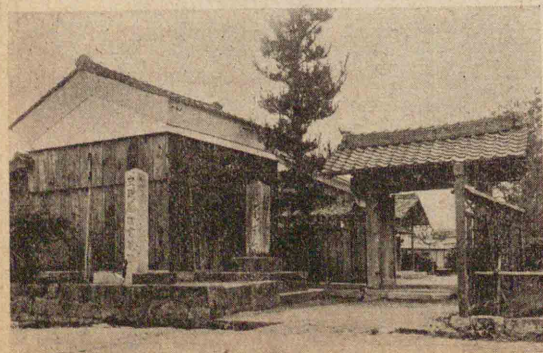
て儒書を講じさせ、その門人林羅山を政治の顧問とし、また博く古書を求めてこれを寫させ、その一部を活版によつて刊行させた。戰國このかた廢れてゐた學問も、これから漸く興隆の機運に向つた。

儒學

水戸の弘道館、尾張の明倫堂、鹿兒島の造士館、會津の日新館等は有名な藩校である。

中江藤樹が近江(滋賀縣高島郡青柳村)に開いた書院で、生徒を集めて書を講じ、儒學等を教へた。

歴代の將軍も相ついて學問を奨励したが、殊に綱吉は學問を好み、湯島に聖堂を建てた。諸藩も幕府に倣つて學問に力を盡し、學校を開いた。將軍家光の頃には、近江に中江藤樹が出て、世に近江聖人といはれ、門人に熊澤了介(山)が出た。またこの前後に江戸には木下順庵、荻生徂徠がおのゝ一派の學風を作り、順庵の門から新井白石、室鳩巢が出た。京都



院書樹藤

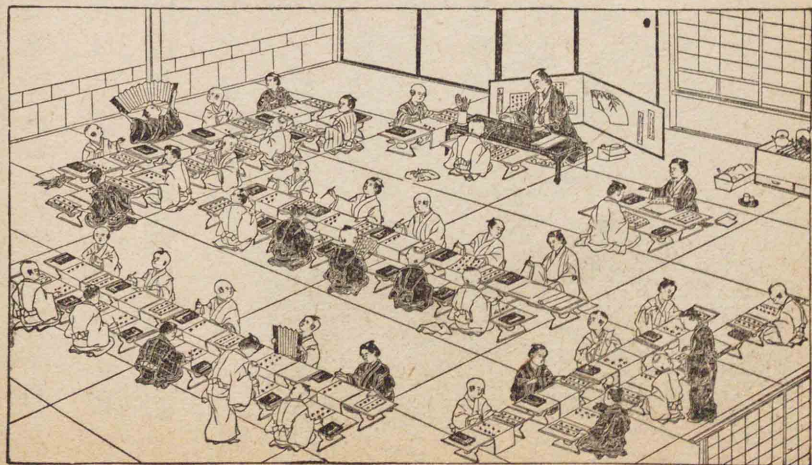
數學・曆學

には伊藤仁齋その子東涯等があつて、おのゝ門人を教へ、また山崎闇齋は神道を唱へ、山鹿素行は武士道を説き、貝原益軒は多く平易な教訓書を著して世を導いた。儒學者の外に科學者も出て、數學の關孝和、曆學の保井算哲は殊に有名であつた。

寺子屋、

平民文學の流行

庶民の教育は、全國諸地方に、私塾の外多くの寺子屋があつて、讀書・習字・算術等を授けた。
④ 文藝の發達 平民殊に町人の生活の向上に伴ひ、平民文學の流行を見る



寺子屋

狩野派
土佐派
光琳風



井原西鶴

に至つた。淨瑠璃の作者には近松門左衛門、竹田出雲等が出て、小説には井原西鶴が出て時代相を描き、また松尾芭蕉は俳風を一變し、諸國を周遊して名句を残した。

④ 美術・工藝の進



松尾芭蕉

歩 さきに家光の頃、狩野探幽(永徳の孫)が狩野派を再興し、土佐光起は土佐派を盛にした。が、元祿の頃、江戸の菱川師宣は専ら當時の風俗を寫して浮世繪の盛行する風を助け、また京都の尾形光琳は華やかな模様畫をかき、蒔繪に巧であつた。光琳の畫風は盛に陶器・漆器・織物などの模様に応用せられて、工藝を進步させた。

第六章 江戸幕府の中興

將軍家宣・家繼
新井白石



新井君美

家宣家繼 綱吉の次に家宣家繼が將軍となり、この間、新井君美(白石)を顧問として前代の弊政を改めた。即ち諸皇子御出家の例を改められるやう朝廷に奏請し、朝鮮信使の待遇の厚きに過ぎるのを正し、また元祿の悪貨を良質のものに鑄なほし、長崎の貿易額を制限して、金銀の國外に多く流出するのを防いだ。

享保の治 ついで第八代の將軍となつた吉宗は、賢明で善く人を用ひ、室鳩巢、青木文藏(陽昆)等の學者や、大岡忠相(越前守)等の能吏を任用した。また自ら節儉を行つて奢侈を戒め、武藝を奨めて士氣を養ひ、貨幣を鑄なほして品質を良くし、足高の制を

人材の登用
風俗の矯正

吉宗はその家臣をしてオランダ人ケイゾルから馬術を習はしめ、吉宗も時にケイゾルについて馬術を學んだ

産業の振興

享保の治

田沼意次父子の専横

幕府の失政

將軍家齊

設けて人材登用の途を開き、目安箱を置いて士民の説をきき、公事方定書を作つて裁判の標準を示し、東西の學問を奨めて教育の普及を計つた。その他殖産興業に心を用ひて、荒地を開き、水利を起し、甘蔗や甘藷の植付を奨めた。世に吉宗を江戸幕府中興の英主となし、その政治を享保の治といつてゐる。

しかし吉宗の子の家重、孫家治の頃に、田沼意次、意知父子は權力を振つて私利を營んだから、幕府の政治はまた亂れ、その上、暴風、洪水、火災、饑饉など頻りに起つて、人民は大いに苦しんだ。

寛政の治 家治の後、家齊が將軍となり、白河城主松平定信を老中として政治を任せた。定信は前代の弊政の改革に力め、享保の政治



吉宗の馬術講習圖



松平定信

に倣つて勤儉を奨め、風俗を正し、學問、武藝を勵まし、財政を整へ、海防に心を用ひ、また諸藩に命じて産業を奨め、備荒貯蓄を行はせた。天明の大火には皇居が炎上したので、定信は自ら造營のことに當り、古制に復すること力め

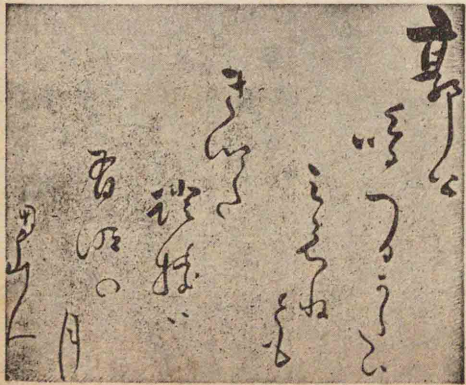
寛政の治

郭公鳴つるかたはみえねともきいた證據は有明の月 蜀山人

文藝の爛熟

た。世に定信の政治を寛政の治といふ。
四文化・文政時代 定信が職を退いて後は、家齊が自身で政を行つた。この間四十餘年、海内無事で、元祿の頃に高まつた文化は絶頂に達した。

この時代は太平の久しきと、教育の普及し、生活の向上したことなどによつて、平民



大田南畝筆蹟

平民文化

小説・狂歌・俳句

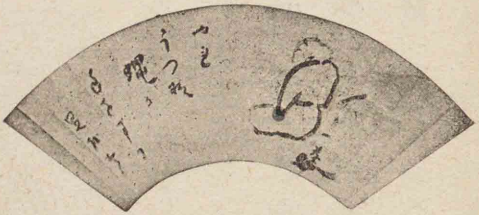
やれうつな蠅か手をすり足をする

繪畫

版畫

岡山藩

熊本藩



小林一茶筆蹟

行はれた。

諸藩の治

江戸時代には諸大名にも藩政に意を用ひて、名君の譽を得たものが少くなかつた。綱吉の頃、岡山の池田光政は開墾治水をなし、教化を行ひ、大いに治藩に努めた。また家重家治の頃、熊本藩主細川重賢は學校を建て、産業を起し、領民を恤んで、その治績は西海

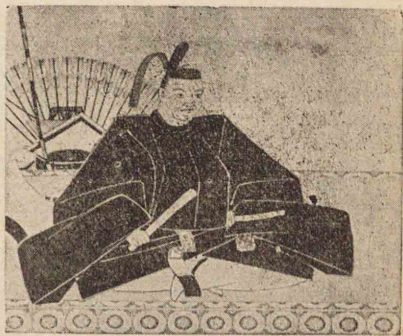
米澤藩

天明五年、治憲は封をその子治廣に譲り、この三條の訓戒を記して授けた

尾張藩

紀伊・會津・加賀の諸藩

天保の饑饉



池田光政

第一といはれ、將軍家治の頃、米澤藩主上杉治憲は細井平洲を招いて學問を興し、農蠶を勵まし、たび／＼領内を巡つて善行を賞した。その他、尾張藩主徳川義直、紀伊藩主徳川頼宣、會津藩主保科正之、加賀藩主前田綱紀等も名高く、おの／＼治績を擧げた。

幕府の不振 家齊の晩年には、風俗が次第に奢侈遊情に流れ、幕府の政治は振はず、財政も困難で、士氣は全く廢れ、早くも衰運の兆が見え、大阪の前與力大鹽平八郎は、天保の饑饉の時、幕府の態度の誠意のないのを憤り、天保八年、救民のためと稱して亂を起した。

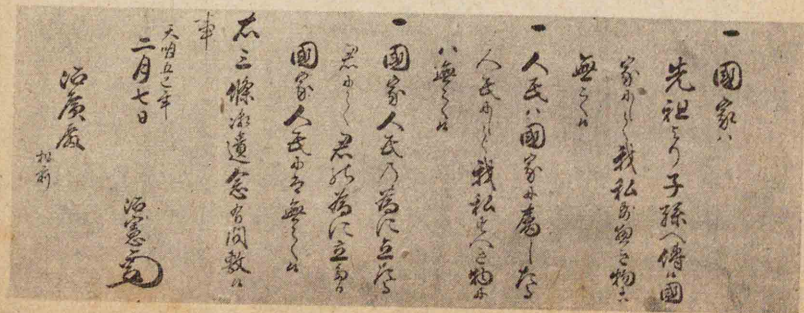
この年、家齊の子家慶が將軍となつた。老中水野忠邦(越前守)は時勢を憂へて、幕府を興すために、奢侈を禁じ、武藝を勵まし、風俗を正さうとした。世にこれを天保の改革といふ。しかしその改革があまりに嚴に失したため、却つて人心を失つて職を罷められた。この頃から幕府の運命はますます／＼傾いて來た。

第七章 國學の勃興 尊王思想の發達

國史の研究 江戸時代の初に、古典研究が盛になり、國史の編纂も企てられた。徳川光圀は學者を聘して大日本史の編纂に着手し、山鹿素行もまた中朝事實を著した。

國學の勃興 元祿の頃、僧契沖は古語古文の研究の道を開き、將軍

上杉治憲の國體圖



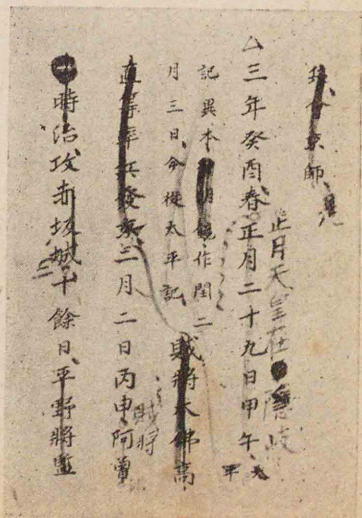
稿本は殆ど原の形を留めないままに添削されたところがあり、以て如何に厳正なる校訂が行はれたか苦心のあとが窺はれる

吉宗の頃、荷田春滿は始めて國學を唱へた。ついでその門に賀茂眞淵、眞淵の門に本居宣長が出て、宣長の門に平田篤胤が出た。中にも宣長は、古事記傳をはじめ多くの書を著はして、わが國體の貴い所以を述べ、篤胤も佛教や儒教を斥けて、熱烈に神道を唱へた。



本居宣長

ふみ分けよ大和にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かは
しきしまの大和心を人間はば朝日にほふ山ざくらばな
人はよしからにつくともわが杖は大和島根に立てむとぞ思ふ
荷田春滿
本居宣長
平田篤胤



大日本史稿本

尊王論の初

浅見綱齋の靖
獻遺言
竹内式部事件

山縣大貳事件

蒲生君平・高
山彦九郎

宣長と同じ頃、盲人塙保己一があつた。博く古典に通じ、群書類從を編纂し、また和學講談所をたてた。

尊王思想の發達 國史・國學の發達につれ、久しく武家政治になれたわが國民も、漸く尊王の大義を辨へ、國體の尊嚴を覺るに至つた。元祿の頃、山崎闇齋の門人浅見綱齋は、靖獻遺言を著はして尊王の志



類山陽の筆蹟

氣を勵ました。その後、竹内式部は大義名分を明らかにして、王政復古を暗示し、幕府に忌まれ、て追放された(三四五)。ついで山縣大貳は皇威の振はないのを慨き、幕府の存立を僭偽と叫び、その黨藤井右門等と共に死刑に處せられた(三四七)。しかし國民はこの頃より倒幕にめざめてきた。その後將軍家齊の時に、蒲生君平と高山彦九郎とが出た。共に尊王の志が篤く、君平は山陵

頼山陽

の荒廢を慨いて山陵志を著はし、彦九郎は諸方に運動した。また頼山陽は日本外史や日本政記を著はして、廣く人心に感動を與へ、水戸では、この頃、徳川齊昭(公烈)があり、藤田東湖等を用ひて水戸學を興し、やがて尊王論の一大中心をなすに至つた。

第八章 外交の紛糾 洋學の發達

露西亞通商を
求む

露西亞人の來航 寛政四年(三三三)、露西亞の使節ラックスマンは、わが漂流民を送つて根室(北海)に來り、通商を開きたいと申出たが、幕府はこれを許さず、諭して長崎に往かせた。ついで文化元年(三六四)、その使節レサノフは長崎に來て、通商を求めたけれども、幕府は遂に許さなかつた。その後露西亞人はしばしば蝦夷や樺太に寇した。

海防論 これよりさき、寛政の初に、林子平は海國兵談・三國通覽等の書を著はして世界の大勢を説き、海防の必要を論じたが、幕府は徒

露西亞人の入
寇
林子平

らに世を騒がすものとして、子平を罰した。

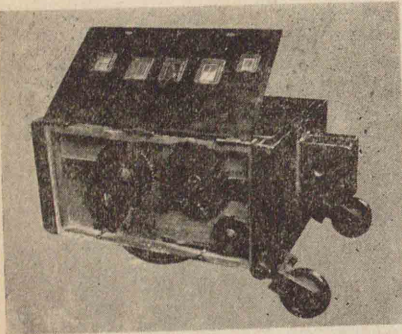
然るに幕府も漸く海防の必要を覺り、警備を厳しくすることを沿海の諸藩に命じ、老中松平定信には江戸近海の沿岸を巡視せしめ、伊能忠敬も幕命

海國兵談第一卷
水戰
仙臺 林子平述
海國の武備、海邊より海邊に兵は、水戰より水戰の要々大敵より海國自然に兵制也故に其篇より以て開第一卷とす、事深意の旨也尋常の兵書、同日の義よりいふは、知べし、海平久し時々人心危し、時、乱を志

海國兵談

を受けて蝦夷地をはじめその他の地方の精密な實測地圖を作つた。

北門の警備 幕府は北邊の警備に最も注意し、しばしば蝦夷地を巡察させた。寛政十年(三三三)、近藤守重(重)は擇捉島(千島列島の一)に「大日本惠土呂府」と記した木標を建て、その後、間宮林藏をして樺太を探検せしめた(三六九)が、彼は遠く



伊能忠敬の測量器

忠敬使用の距離
測定器である

間宮林藏大陸
を探検す

幕府の蝦夷地經營

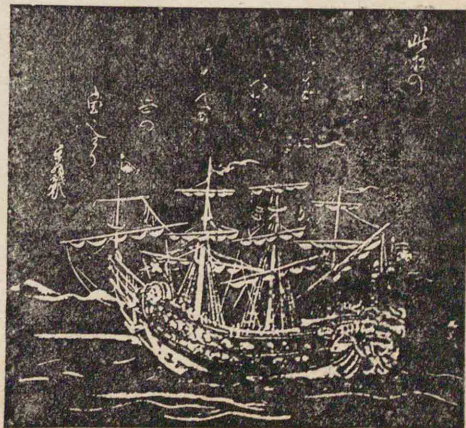
此船のよるてふことを夢のまもわすれぬは世の寶なりけり

英吉利船長崎を騒がす

外國船擊攘の令

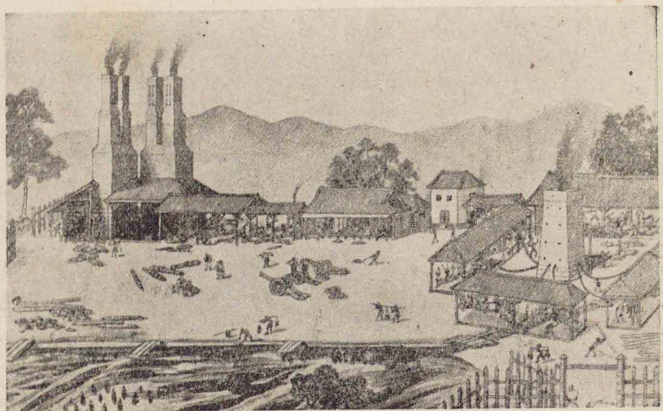
沿海州地方まで踏査して歸つた。また幕府は次第に蝦夷の地を收め松前奉行を置いてこれに備へた。

四 文政の攘夷令 北境漸く多事の時、西邊も騒がしくなつた。文化五年(三六六)、英吉利船は長崎港に入り、薪水、食糧を強請し、出島の蘭人を掠めて去つたが、その後もしばくわが近海に出没し、中には狼藉をするものさへあつた。ここに於て幕府は文政八年(三六五)遂に沿海の諸藩に命じて、外國船のわが近海に近づくものは、直ちにこれを撃ち攘はせることとした。幕府はなほ海防に留意し、高島四郎太夫、江川太郎左衛門等に西洋の兵學を研究させ、或は大砲を鑄させて軍備に努めた。また諸藩もこれに倣ひ、水戸藩主徳川齊昭、佐賀藩主鍋島直正、薩摩藩主島津齊彬等は、いづれも専ら沿海の警備に意を用ひた。



(贊信定・畫の晁文)圖の船國外

圖は佐賀藩の反射爐で、嘉永五年に竣工した。これが實際に且つ大規模に設備された最初のものである



反射爐

が現はれた。蘭學の興隆と共に、西洋の學術、技藝も盛に傳はつた。これら洋學者は概ね世界の大勢を察して、鎖國政策の不利を唱へた。

洋學の發達と開港論

さきに洋書の輸入が禁ぜられてから、わが國民は外國の事情に疎くなつたが、新井君美は西洋紀聞や采覽異言を著はして、やゝ西洋の事情を明らかにした。その後、將軍吉宗は天主教に關係のない洋書の輸入を許し、また青木文藏を長崎に遣つて和蘭語を學ばせた。これから蘭學が次第に起り、前野良澤、杉田玄白、大槻玄澤等の學者

蘭學者の開港論

寛政六年十一月十一日、大槻玄澤の家塾芝蘭堂に當時の洋學者が集會してゐる

和蘭の忠告

第四篇 近世史
中にも渡邊崋山、高野長英等はかねて開港の意見を抱き、書を著はして海外の事情を述べ、攘夷の不当なことを説いたから、幕府は二人を捕へて獄に投じた。しかし天保十三年(三〇三)さきの外國船撃攘の令を弛めた。續いて和蘭も幕府に書を贈つて、世界の大勢を説き、開國を勧めた(三〇四)。幕府はなほ鎖國の祖法を固執して、これを用ひなかつたけれども、ますます海防に努めた。



洋學者の集會

ペリー浦賀に来る

久里濱の會見

露西亞の要求

米露使節の來朝 嘉永六年(三三三)亞米利加合衆國使節ペリー(水師提督)は船艦四隻を率ゐて浦賀(神奈川縣三浦半島)へ來て、國書を呈して通商を求めた。幕府は吏を遣つてペリーと久里濱(浦賀附近)で會見せしめ、明年の回答を約して去らしめた。



ペリー

太平の眠をさます上喜撰蒸氣船
たつた四はいで夜もねられず
ペリーの退去後、まもなく露西亞の使節プッチャチンも軍艦四隻を率ゐて長崎に來り、和親通商と北邊境界の議定とを求めたが、

幕府は吏を遣つて、回答を延期して去らしめた。

和親條約の締結 亞米利加合衆國との交渉は、事態が甚だ重大であるから、幕府はこれまでの慣例を破つて朝廷に奏聞し、また諸大名に諮つた。齊昭をはじめ諸大名は多く攘夷論を唱へたが、安政元年

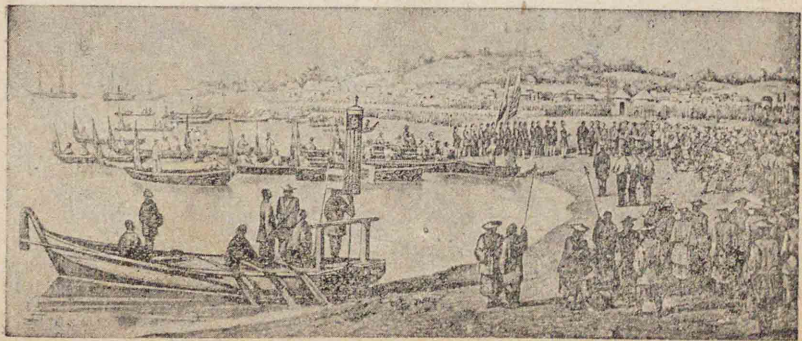
ペリー再び来る

開國

嘉永六年六月九日、ペリー以下三百人が十五隻のボートに分乗して上陸する有様で、沖には彼等が乗船して来たミンシツビ號とサクスハナ號とが見える
ハリスの來任

（三五四）ペリーは再び船艦九隻を率ゐて神奈川沖に進み入り、切りに回答を促したので、幕府は遂に和親條約を結び、下田函館の二港を開き、薪水・食糧を給することを約した。續いて幕府は英吉利・露西亞和蘭の三國との間にも、ほぼ同様な條約を結んだ。

通商條約 安政三年（三五六）亞米利加合衆國總領事ハリスは下田に着任し、將軍家定に謁して國書を呈し、老中堀田正睦に會つて、世界の大勢と通商の利益とを説き、和親條約を改訂して、通商條約を開くことを求めた。正睦はこれに同意し、新に神奈川（後に横濱と改む）兵庫・長崎・新潟の四港を開くことを議定した。



陸上濱里久の行一ーリベ

開港當時の横濱

の賑ひで、異人（西洋人）の姿も見える。左角は三井吳服店である

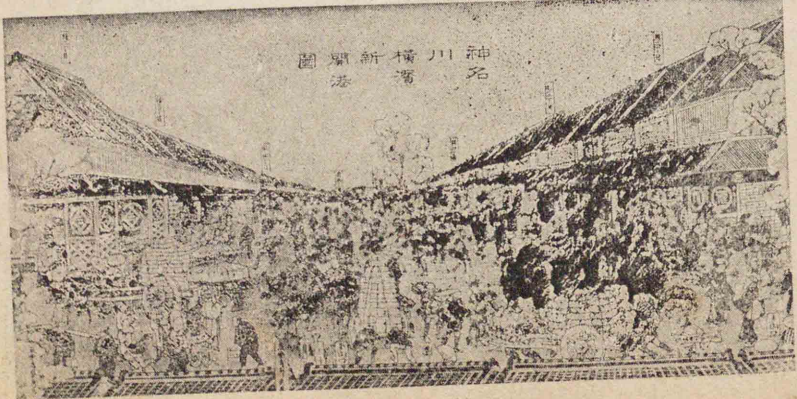
外交關係の切迫

直弼の專斷



伊井直弼

安政五年（三五八）幕府は正睦を上京させて、米國との通商條約について勅裁を奏請させた。朝廷では國論に顧みられて、これを却けられた。幕府は井伊直弼を大老として、この難局に當らせたが、この頃、英佛兩國は清國と戦つて勝ち、勢に乗じてわが國に開港を迫るといふ風説があり、これを機會にハリスも切りに幕府に説くところがあつたので、直弼は遂に内外の形勢を顧み、御裁可を待たないで、さきに議定された條約



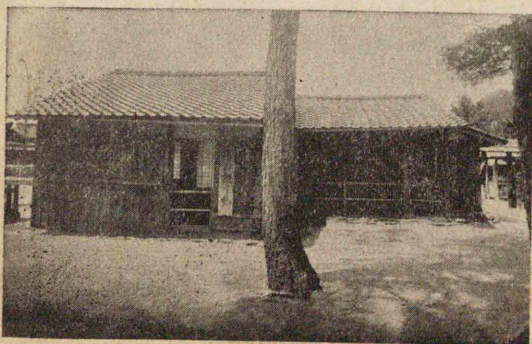
開港當時の横濱

に調印した。世にこれを安政の假條約といひ、ついで幕府は蘭露英佛の四國とも、同様の條約を結んだ。

條約勅許 萬延元年、外國奉行新見豐前守は、幕府の使節として米國に赴き、安政條約の批准交換を了り、慶應元年に至つて條約を勅許せられた。

第九章 大政奉還

安政の大獄 井伊直弼の專斷は、尊王攘夷論者を激昂せしめたが、直弼は更に將軍の繼嗣問題について、輿望を退けて家茂を迎へたので、直弼を非難する聲はますます高まつた。直弼は大いに驚き、罪を朝廷に謝し奉ると共に、反對派の親王・公卿以下數十人を罰し、長州藩士吉田寅次郎、越前藩士橋本左内、頼三樹



松村下

吉田松陰は郷里（今の山口縣萩市）にこの塾を開いて青年子弟を教育し、大いに尊王の精神を鼓吹した。

三郎（頼山陽の子）等を死刑に處し、所謂安政の大獄を起したが、却つて人心の激昂を招き、その身も櫻田門外で殺された。

親思ふ心にまさる親心 今日のおとづれ何ときくらん

吉田松陰

公武合體論 直弼の後を承けて、老中安藤信正等が幕政を執つた。信正は直弼の失敗に省みて、政策を改め、公武の合體を唱へ、將軍家茂

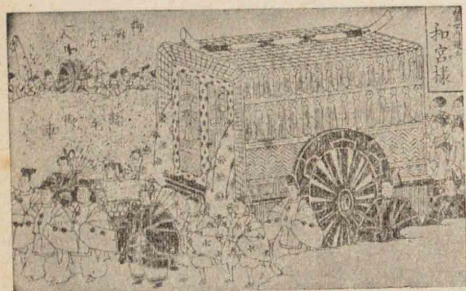
のために皇妹親子内親王の御降嫁を奏請して許されたが、信正も坂下門で傷つけられた。

をしまじな君と民とのためならば

親子内親王

身は武藏野の露ときゆとも

幕政改革の詔 この頃、攘夷論者は尊王論者と結び、進んで倒幕を唱へるに至つた。朝廷はかねて公武合體の説を執つてゐた薩摩の島津久光に命じ、勅使大原重徳を奉じて江戸に下ら



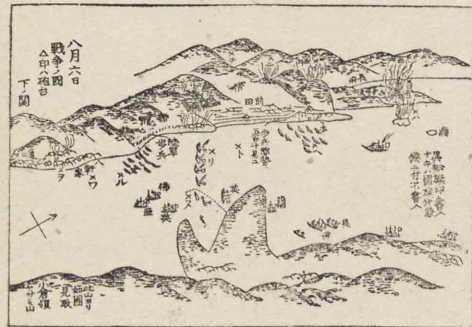
和宮御降嫁行列

和宮内親王は文久元年十月京都を御出發になり、十一月江戸に御着。圖は御行列の中山道通御の光景。
牛交事件 久光の歸途、その従士が武藏の生麥（横濱市）で英吉利人の無禮を憤り、これを殺傷した事件である。

京都が政治の中心となる

幕府攘夷の期日を定む

長州藩、英佛米・蘭の聯合艦隊と戦ふ



下関の戦

せ、幕政の改革を命じ給うた。家茂は勅を奉じて慶喜を將軍の後見とし、また參勤交代の制を弛め、諸大名の妻子の歸藩を許すなど、種々の改革を斷行したが、人心は幕府に復るべくもなく、京都はいつしか政治の中心となるに至つた。

四 攘夷の實行 この頃、長州藩は熱烈に攘夷を唱へ、またひそかに皇室を奉じて幕府を倒さうと謀り、京都に於ても長州藩を中心とする攘夷論に傾いたから、朝廷は三條實美等を江戸に下して幕府に攘夷の實行を促し給うた。文久三年(三三三)將軍家茂は上京して勅命を奉じ、攘夷の期日を五月十日と定め、これを諸藩に布告した。かくて期日が來ると、長州藩は諸外國の船艦を下關海峡で砲撃し、また越えて七月に薩藩も鹿

七人中の一人澤宜嘉の畫いたものである

福原越後等の請願

兒島に於て英艦と砲火を交へた。

長州征伐 薩長二藩の外國船砲撃の報は、ますく攘夷論者を感じせしめ、遂には攘夷御親征の議さへ定められた。然るに松平容保(京都守)は溫和派の公卿等と結んで親征の不可を奏したから、朝議は一變して實美等は斥けられ、長州藩の宮門護衛の任は解かれた。翌元治元年、長州藩の家老福原越後等は兵を率ゐて京都に向ひ、



松平容保

上書して、藩主父子及び三條實美等の罪を赦されんことを上奏せんとして入京したが、會津・薩摩・桑名等の兵に妨げられて敗走した。ここに於て幕府は長州征伐の勅許



七卿の落

長州藩の恭順

高杉晋作等幕府に抗す

家茂の親征

停戦



高杉晋作

再び兵を擧げた。そこで幕府は再征の軍を起し將軍家茂は自ら大阪城に進んだが、幕軍振はず、まもなく家茂が大阪で薨じたから、朝廷は勅して停戦を命ぜられた。

大政奉還 慶應三年正月、明治天皇は御年十六で御踐祚あらせられた。時に幕府の威信は全く衰へてゐたので、かねて王政復古の志を懐ける薩摩藩士の西郷隆盛、大久保利通、長州藩士の木戸孝允等は岩倉具



岩倉具視

討幕の密勅

大政奉還

江戸幕府の滅亡

諸官職の改廢



徳川慶喜

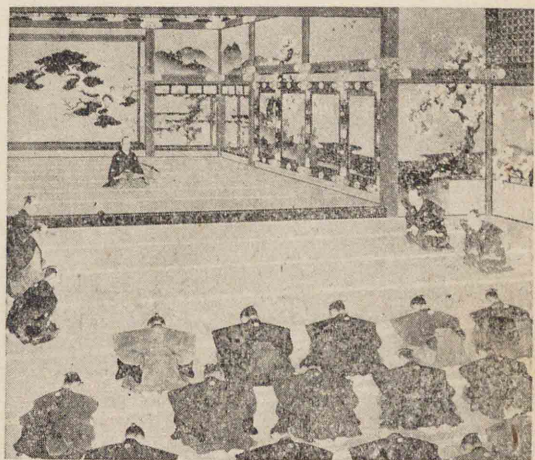
視三條實美等の公卿と相謀り、同年十月十四日、遂に討幕の密勅を薩長兩藩に戴きまつた。

土佐前藩主山内豊信(堂)はこの形勢を憂慮し、事を平和の間に解決したいと考へて、藩士後藤象二郎等を上京させ、大政奉還を慶喜に説かせた。慶喜もまた既にその意があつたから、遂に政權を朝廷に奉還したいと奏請し、奉り、天皇はこれをお許しになつた。慶喜は續いて征夷大將軍の職を辭したから、江戸幕府は滅んだ。徳川家康が將軍となつてから、十五代二百六十五年、頼朝が幕府を立ててから六百八十二年である。

王政復古 この年(慶應三年)十二月、朝廷は王政復古の大號令を發して天下に諭し給うた。またこの時、從來の攝政關白、征夷大將軍等の官

慶應三年十月十二日、慶喜が在京有司を京都二條城に召集し、大政奉還の意を告ぐる圖である

明治維新



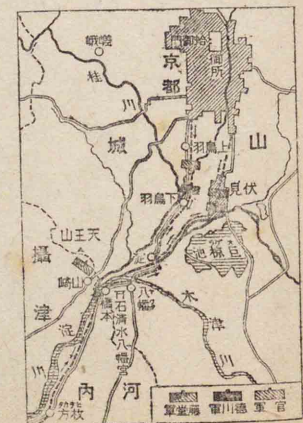
大政奉還

職を廢して、新に總裁ギデレウ・議定・參與の三職を置き、有栖川宮熾仁親王タルヒトを總裁とし、親王・公・卿・大名の中より議定を任じ、公卿・藩士より參與を補せられた。今や公武の別も門閥モンバツによる階級も撤去テウキョされて、國民はひとしく新政を仰ぐこととなつた。世にこれを王政復古といひ、明治維新といふ。

鳥羽・伏見の戰 慶喜は京都の二條城に居たが、旗本や譜代大名の諸藩士が多くここに集り、慶喜が新政にも與らず、官を辭し、領土を返上せしめられたのを憤り、且つこの事は薩長の策謀によると疑ひ、形勢が不穩であつたから、慶喜は事變の起ることを慮り、大阪城に退いた。しかし明治元年(三五三)正月、慶喜は

慶喜の東走

遂にこれらの人々に擁せられ、討薩の表を捧げて入京せんとし、薩・長等の兵と鳥羽・伏見に戦つたが敗れ、慶喜は江戸に逃れた。



鳥羽・伏見附近要地圖

全國平定 官軍は更に江戸に進撃し

たから、慶喜は江戸城を開いて恭順の意を表し、ついで起つた上野の彰義隊も直ちに破られ、宇都宮城・若松城・函館等によつたものも平定せられ、全國は悉く一統に歸した(三五三)。

江戸の開城

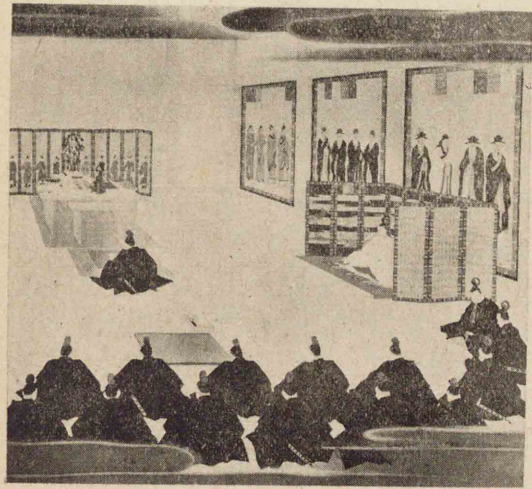
奥羽・函館の戰

第五篇 現代史

第一章 明治維新

五箇條の御誓文

紫宸殿の正面の神前に御誓文を奉讀するのは三條實美、その右側の正面に在すは明治天皇である



天皇神に五事誓はせらる

五箇條の御誓文

明治元年三月、明治天皇は紫宸殿に天神地祇を

祀り、新政の御方針を神前に誓はせられ、これを國民にお示しになつた。これを五箇條の御誓文といふ。

一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ

一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ

一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシ

メン事ヲ要ス

一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

東京奠都 ついで八月、即位の大禮を紫宸殿に擧げさせられ、九月、

二世一元の制

明治と改元して二世一元の制を定めさせられた。また遷都の儀を思召さ

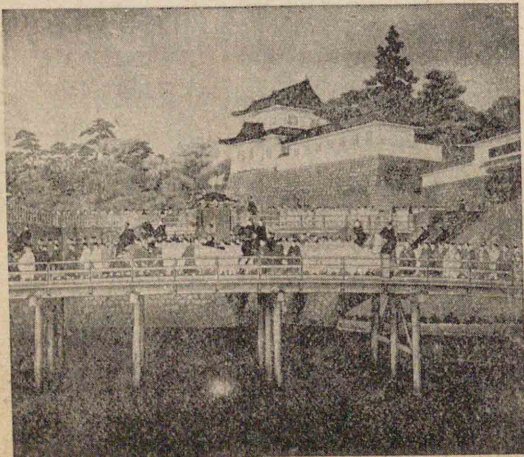
江戸を東京と改む

れ、江戸を東京と改めて始めてここに
行幸あらせられ、一旦京都に還幸の後、
翌二年三月、再び東京に行幸せられて、
永くこの地に駐り給ふこととなつた。

版籍奉還、廢藩置縣 これよりさき、

政府はもとの幕府や幕臣の領地を朝廷に收めて府縣を置き、知事を任じて

明治元年十月十三日、車駕東京城西丸正門に着御の光景



明治天皇の東京行幸

版籍奉還

廢藩置縣

郡縣の制新に
興る

學制

太陽曆

これを治めさせられたが、諸藩の領地はなほもとのままになつてゐたから、木戸孝允・大久保利通等は、諸藩の土地(版)・人民(籍)をも朝廷に奉還させたいと主張した。明治二年、薩長・土肥の四藩主はその版籍を朝廷に還し奉らんことを奏請し、他の諸藩主も概ねこれに倣つたので、天皇はこれをお許しになり、舊藩主を知藩事に任じて、その藩内を治めしめられた。ついで明治四年、全國二百六十餘藩を廢して三府七十二縣とし、新に府知事・縣令を任命せられた。その後、大いに府縣の分合を行ひ、三府四十三縣に改められた。かくて封建制は全く除かれて、郡縣の制が新に興り、明治維新の大業はここに成就した。

④ 社會一新の機運 明治維新の國是が確立し、天皇御親政のもとに國民が等しくその御盛徳を仰ぐと共に、皇基の振起を基として知識を世界に求め、わが文化を補ふ風は頗る盛となつた。明治五年、學制を布いて、國民に悉く學校教育を受けさせ、太陽曆を廢して太陽曆を

徵兵令
電信・郵便・鐵
道・汽船

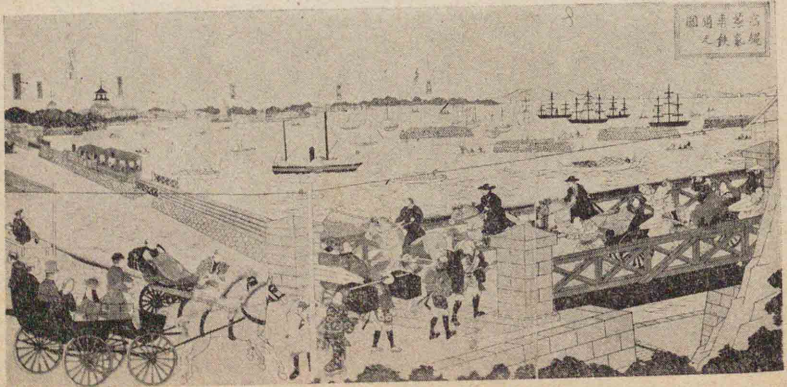
明治初年頃東京
高輪附近より品
川沖を見たる圖
で、汽車・汽船馬
車など當時の交
通機關を窺ふこ
とが出来る

用ひ、同六年には徵兵令を發布して國民皆兵の法を定められ、またこの前後には電信・郵便・鐵道・汽船等がはじめられ、なほ散髮・脫刀の事なども次第に行はれて、社會の面目は一新の機運に向つた。

第二章 立憲政治の確立

教育に關する勅語

① 立憲政治の確立 明治維新に當り、天皇は五箇條の御誓文を發布し給ひ、皇基を振起し給ふ大御心より、廣く會議を興し、公論を重んじて、臣民にも政治に參與せしめ給ふことを仰せられた。その後、西洋文化の



明治初年の交通機關

民選議院設立の建議
地方官會議
府縣會

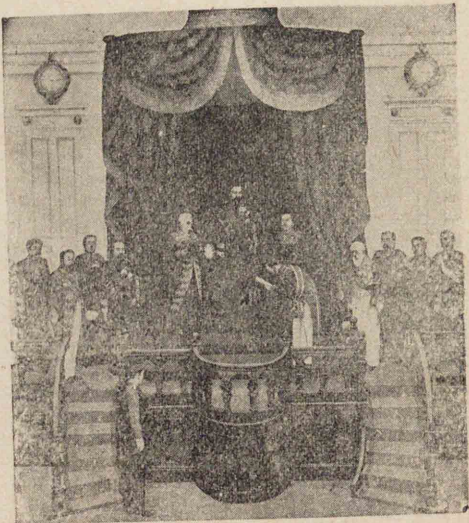
國會開設の大詔

帝國憲法の發布

受容と共に、民權思想が漸く弘まるに及び、明治七年、副島種臣、後藤象二郎等は民選議院を設けて天下の公議をつくさんことを建議した。政府はこれを尙早として採用しなかつたが、まづ地方官會議を開いて民情の通達を圖り、ついで十二年には府縣會を設け、民選の議員をして府縣の政治に與らしめた。その間に國民の政治思想も進み、國會の開設を政府に願ふものも多くなつた。天皇は十四年に詔を下して、來る二十三年を期して國會を開くべきことを宣せられ、伊藤博文をして憲法の起草や諸制度の調査を命じ給うた。十八年には官制の改革があり、内閣制度が確立し、二十一年には樞密院が設けられた。全國に市町村制が公布せられたのもこの年である。かくて明治二十二年紀元節の佳辰を以て大日本帝國憲法及び皇室典範が發布せられた。この憲法は、皇祖皇宗の大業とわが國體に基づき、國家の隆盛と臣民の慶福とを増進せしめんとの大御心から欽定された

第一回帝國議會の召集

明治二十三年十一月二十九日、天皇貴族院に臨御遊ばされ、議長伊藤博文に勅語を給ふ圖



第一回帝國議會開院式

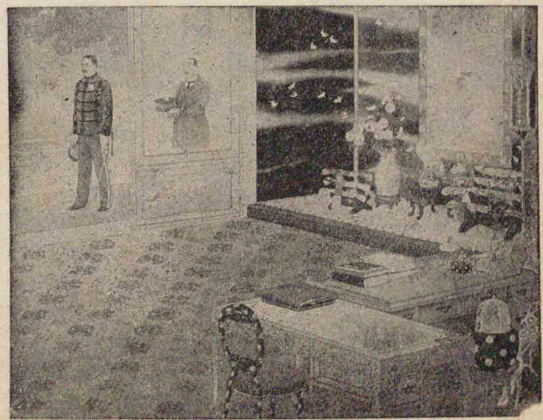
もので、臣民はこれによつて皇政を翼賛し奉ることとなつた。翌二十三年十一月第一回の帝國議會が召集せられ、立憲の政體は全く確立するに至つた。その後國民の翼賛し奉る道は時勢の進歩と共に次第に擴張され、昭和三年には普通選舉法が行はれた。

教育に関する勅語 明治維新以來、わが國は西洋文化を攝取醇化したが、これが受容にあたり、やゝもすればわが國古來の道德を輕んずる傾があり、わが國教育の方針が動搖を免れなかつた。明治天皇は憲法を發布し給うて立憲政治を確立せられると共に、二十三年十月三十日、教育に関する勅語を下し給うて、國民道德の大本を闡明せ

られた。ここに於て教育の方針も確立し、國民の向ふところも明らかになつた。

第三章 條約改正

當時の内閣總理大臣山縣有朋・文部大臣芳川顯正が明治天皇御座所の殿下に勅語を捧持する圖



教育勅語御下賜

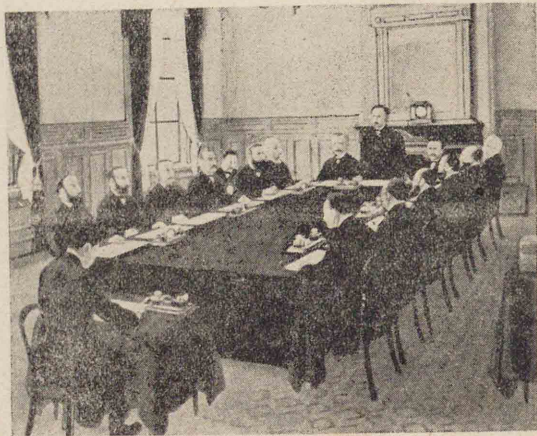
外交方針の確立 王政復古と共に、朝廷は世界の趨勢に鑑み、開國進取の外交方針を確立し、明治三年には始めて公使を各國に駐在せしめられ、四年には岩倉具視（特命全權大使）等を歐米諸國に派遣して和親を厚くせられた。

條約改正 歐米諸國との外交に當つて、政府が最も苦心したのは、江戸幕府が列國と結んだ條約の不平等、屈辱（クラッショク）なることと、法權、稅權などわが國に不利な點が多かつた。されば條約改正の議は明治初

望 條約改正の希

列國との交渉

明治十五年四月五日、外國使臣を外務省に集めて條約改正の會議をする圖で、起立してゐるのは井上馨である



條約改正會議

が國の眞價が漸く列國に認められるに及び、明治二十七年時の外務大臣陸奥宗光（ムツ）は始めて英國の同意を得て、改正條約を結び、これに倣つて列國とも順次改正條約が結ばれ、三十二年から治外法權が撤廢せられた。後、更に稅權をも回復したから、國民の長い間の希望も達

功 條約改正の成

年から起り、政府も國民も大いに努力し、明治時代外交の中心問題であつた。

列國との交渉は、既に岩倉具視等の歐米派遣の時に始められ、その後寺島宗則（外務卿）、井上馨（外務卿）、大隈重信等もしばしば、列國と會議を重ねたが、その進行はとかく意の如くならなかつた。

然るにわが國の内治が整ひ、法典も編纂せられ、殊に立憲政治が確立して、わ

せられ、世界の諸強國と全く對等の地位を占めることとなつた。

第四章 東洋の平和とわが國

朝鮮との修好 朝鮮との修好は幕末より絶えてゐたので、わが政府は王政復古を告げ、舊好を修めようとしたが、朝鮮はこれに應じないばかりでなく、却つて禮を失ふことがあつた。そこで明治六年西郷隆盛等はその罪を責めんとしたが、たまく、歐米から歸朝した岩倉具視等に反對されたので、征韓論は破れた。

江華島事件
修好條約の締結

征韓論

その後、明治八年わが軍艦が朝鮮の江華島で、その守兵に砲撃されたから、わが政府は使を遣つて談判せしめ、翌年修好條約を結んだ。

清國との修好 明治四年、わが國は清國と修好條約を結び、永く中絶してゐた國交を恢復した。この年琉球の民が臺灣に漂着し、生蕃に虐殺された。そこでわが政府は同國に交渉したが、生蕃を化外の

臺灣征伐

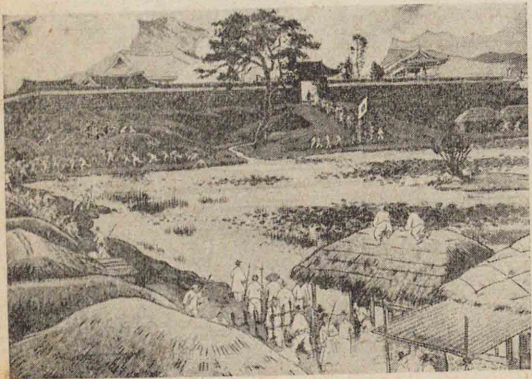
民と稱して應じなかつたから、明治七年臺灣に出兵し、忽ち蕃地の一部を占領した。然るに清國は俄かに異議を唱へたので、談判の結果、清國に償金を出させて、軍を引上げた。

朝鮮の形勢

朝鮮京城の變 清國はさきに朝鮮の獨立を確認したが、後やうやくこれを屬邦視して、その國政に干涉し、また朝鮮國民の中にも往々われを排斥しようとするの風があり、かくて明治十五年と

明治十五年暴徒がわが公使館襲撃の圖である

天津條約



明治十五年京城の變

同十七年とに、朝鮮京城に變亂が起つた。この變亂に、わが公使館は難に遭つたので、わが國は朝鮮を責めて謝罪させた。また永く禍根を絶つために、同十八年、伊藤博文を清國に遣つて、天津條約を結ばせた。

明治二十七年 明治二十七年

東學黨の亂

明治二十八年四月十七日、わが全權大臣伊藤博文・陸奥宗光等は清國全權大臣李鴻章等と、下關春帆樓に會見し、平和條約に記名調印せんとする圖である



日清講和談判

戦役の結果
三國干涉

に連戦連勝し、將に北京に迫らうとしたので、清國は恐れて翌二十八年、李鴻章を下關に遣はし、わが伊藤博文等と和を講じ、清國は臺灣澎湖島、遼東半島を割き、わが軍資を償ひ、また朝鮮の獨立を認めた。然るに露佛獨の三國は、この條約を以て東洋平和に害ありと主張

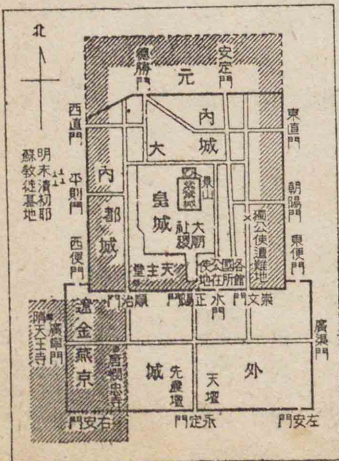
遼東の還附

義和團

し、わが國に迫つて遼東半島を清國に還附せしめた。

北清事變 明治二十七八年戦役の後、露西亞獨逸、英吉利、佛蘭西の諸國は、清國の無力に乗じ、これに迫つて恣に要地を租借し、または種種の特權を得て勢力を張つた。ために清國民の間に排外心が強くなり、明治三十二年(三五五)に義和團の亂となり、翌年には官兵も加はつて、北京の列國公使館を圍んだ。列國は聯合軍を組織し、わが軍はその主力となつて、北京に攻め入り、公使館の圍を解いた。これを北清事變といふ。

日英同盟 明治三十年、朝鮮は國號を韓と改め、國王は皇帝の位に即いた。露西亞は、その翌年に、清國から強いて旅順口、大連灣を租借して、その經營に力めた上に、更に北清事變に乗じ、大兵を滿洲に出して恣に滿



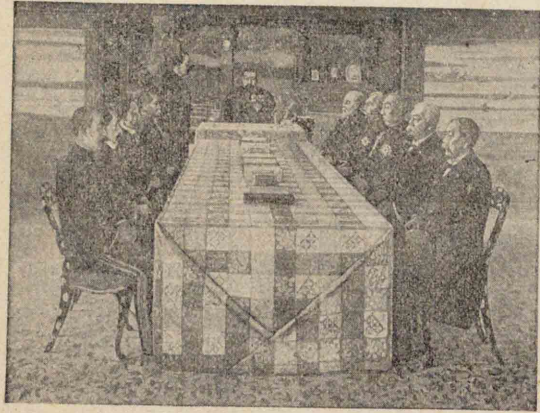
北京圖

日英同盟はその後明治三十八年、同四十四年に改訂された

洲を占領し、韓國にも野心を逞しうせんとした。そこでわが國は、清韓兩國の領土を保全し、東洋の平和を保つために、明治三十五年(三三)英吉利と同盟の協約を結んだ。

明治三十七八年戰役

日英同盟が成立すると、露西亞は清國と滿洲撤兵條約を結んだが、殆どこれを實行しないのみか、却つて海陸の兵を増して韓國の北境を占領し、その獨立をも危くしようとした。わが國は自國の防衛と東洋の平和とのために、しばしば露西亞に交渉したけれども、彼はこれに應じなかつたから、明治三十七年(三五)二月、天皇は餘儀なく遂に露西亞に向つて宣戰の詔を發せられた。わが軍は連勝して、翌



對露宣戰御前會議

露西亞との交渉

圖は明治三十七年二月四日元老及び大臣を表御座所に召され、明治天皇親臨のもとに會議を行ひ給ふ光景である

旅順の陥落

奉天の戰

日本海の戰

講和

年、陸軍大將乃木希典は旅順の要塞を陥れ、元帥陸軍大將大山巖は奉天の大戦で敵の陸軍を潰滅させ、海軍大將東郷平八郎は日本海で敵の大艦隊を全滅させた。かくて大勢既に決したから、亞米利加合衆國大統領ルーズヴェルトの勸告に従ひ、同國のポーツマスで日露の全權委員は會議して、露西亞は樺太の南半をわれに割き、また南滿洲の鐵道や關東州租借權などをわれに譲り、韓國に於けるわが優越權をも承認した。ここに至つて東洋の平和は克復し、わが國は確實に世界の一強國と認められるやうになつた。

韓國併合

明治三十七八年戰役の後、わが國は韓國を保護國とし、京城に統監府を置き、樞密院議長伊藤博文を統監に任じて、その外交を管理させ、後更にその内政をも指導させた。その



李王世子と伊藤博文

統監府を韓に置く

朝鮮總督

後明治四十三年に至り、わが國は東洋平和のため韓國を併合して朝鮮と改め、朝鮮總督を置いて治めることとなつた。

第五章 文化・經濟の發達

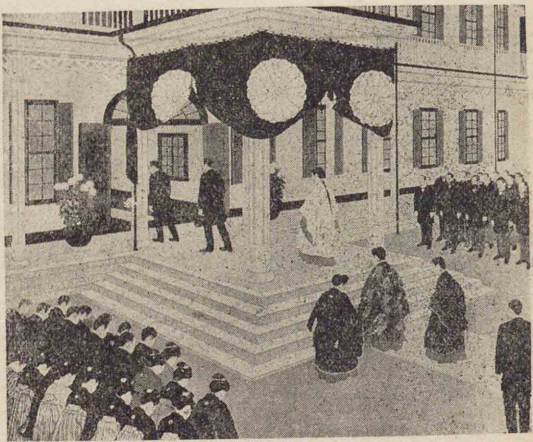
國粹文化

■新文化の創造 明治維新の際には、西洋文化の受容に急なるのあまり、わが國固有の文物を顧みない風さへあつたが、後やうやく國粹文化の優越性を悟り、これを礎イシズメとして廣く世界の文化を攝取醇化ジュンカし、以て東西融合の新文化を作り出さうと努むるに至つた。

普通教育の普及

■教育の進歩 明治五年の學制發布以來、教育は大いに普及し、同十九年には中學校令、同三十二年には高等女學校令が發布され、更に同四十五年には義務教育が六年に延長され、なほ昭和十六年より國民學校令が實施されて、普通教育は大いに充實した。専門學校、高等學校、大學及び女子専門學校等も整ひ、官立大學は東京帝國大學の外に

明治八年十一月二十九日皇后陛下(昭憲皇太后)神田御茶水東京女子師範學校に著御の圖



皇后陛下下女子師範學校行啓

日本美術

西洋美術

西洋美術の長所をも採り、一層の進歩を示すやうになつた。この間、洋畫彫刻等の西洋美術も盛に研究され、また西陣織・七寶燒等のやうに、わが國獨特の美術・工藝として世界の賞讃を博してゐるものも少くない。

七箇の帝國大學(京都・東北九州・北海道・京城・臺灣・大阪)があり、私立にも慶應義塾大學、早稻田大學等、その盛なものも少くない。

■美術・工藝 美術も、明治の初年にはわが國固有のものは顧みられず、却つて西洋人によつて認められたが、やがて國內に於ても熱心にその保存を唱へる識者があらはれ、かくて日本美術が復興したのみでなく、更に進んで西洋美術の長所をも採り、一層の進歩を示すやうになつた。この間、洋畫彫刻等の西洋美術も盛に研究され、また西陣織・七寶燒等のやうに、わが國獨特の美術・工藝として世界の賞讃を博してゐるものも少くない。

印刷術の發達

口語體

○文學 維新以來印刷術の發達は、書籍・新聞・雜誌の刊行を容易にし、これらによつて文學は一般に普及された。文體は初め漢文直譯體を用ひたが、やがて口語體が大に行はれ、また思想に、語法に、西洋文學を研究して異常な進歩を遂げ、和歌俳句等にも新派が起り、新體詩・童謠等も盛になつた。

通信機關

明治二年十二月
横濱裁判所内に
於ける電信局の
有様である



明治初年の電信

○通信交通 郵便・電信などの通信機關も早くから整頓し、近年は無線電信局及び無線電話も設けられ、殊にラヂオの放送は、大正の末年頃より、社會教育と娛樂とに大なる便利を與へてゐる。

鐵道は全國の主要地を連れ、電車・自動車はこれを補ひ、山間僻地もその便益を蒙るやうになつた。海運業は明治十八年に日

政府の保護政策

本郵船會社が設立され、政府は切りにこれらの航海業を保護したので、世界大戰後に於けるわが國の商船總噸數は、英米について世界第三位に進んだ。飛行機もますます進み、各地に定期航空路が開かれるやうになつた。

○産業貿易 維新以來、政府は産業貿易に對して保護政策をとり、新に西洋の産業組織を採り入れて、その助長に力をつくした。加ふるに學問・教育は進歩し、通信・交通機關は擴張されたから、これに伴つて農業・漁業・鑛業等が長足の進歩をなし、造船・紡績・製紙・製糖等の大工業が競ひ起り、商業が發達し、貿易は年々著しくその額を増してゐる。

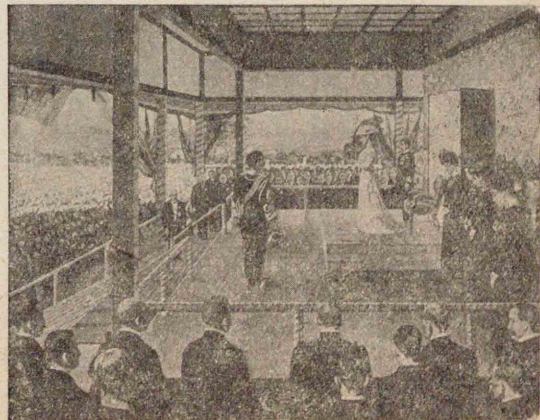
○社會事業 産業組織及び社會状態の一變と共に、社會救濟事業も急務となり、早くも明治の初年に、東京養老院(明治五年)などが創立された。今日、日本赤十字社・愛國婦人會濟生會(明治四十四年、悉くも明治天皇の勅語及び恩賜金に基いて設立)等をはじめとして、公私立の社會救濟機關や慈善團體が甚だ多いが、すべてこれ

社會救濟機關

らの活動に對して、畏くもわが皇室にお
かせられて、常に至大の御助力を賜はる
ことは、國民のひとしく感激し奉るとこ
ろである。

第六章 わが國の世界的地 位 國民の覺悟

明治三十五年十
月二十一日皇后
陛下（昭憲皇太
后）上野公園に
於ける日本赤十
字社第十一回總
會に臨御令旨を
賜ふ圖

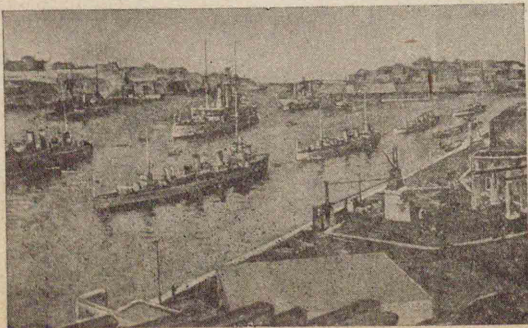


啓行會總社字十赤本日本下陸后皇

明治天皇の崩御 大正天皇の御即位
明治天皇は明治四十五年(註)圖らずも御
病にかからせられ、國民上下舉つて御平癒をお祈り申上げた甲斐も
なく、遂に崩御あらせられ、伏見桃山の御陵に葬り奉つた。御子大正
天皇は直ちに御踐祚遊ばされ、大正四年御即位の大禮を挙げ給うた。
これより先き、大正三年に、昭憲皇太后も崩御あらせられ、桃山の御陵

の東に葬り奉つた。皇后は明治天皇を輔け給うて内助の御功績が
多くあらせられた。

世界大戦 大正三年(三五七)歐羅巴に大戦役が起つて、獨逸や奧太利
などは露西亞・佛蘭西・英吉利・伊太利・亞米利加合衆國などの聯合諸國
と、前後五年にわたつて世界の各地で戦つた。
東洋でも開戦の初に、獨逸は膠州灣(支那山東省)に據
り、極東の平和を危くしたから、わが國は日英
同盟の誼によつて、大正三年八月、獨逸に對し
て宣戦した。わが陸海軍は直ちに進んで膠
州灣を陥れ、また海軍は太平洋上の獨逸領諸
島を占領し、更に遠く地中海方面等にも活動
して、大いに聯合側を助けた。
大正七年(三五七)に至り、獨逸とその同盟國と



地據根軍海がわの島タルマ海中地

獨逸との平和
條約成る
講和の結果

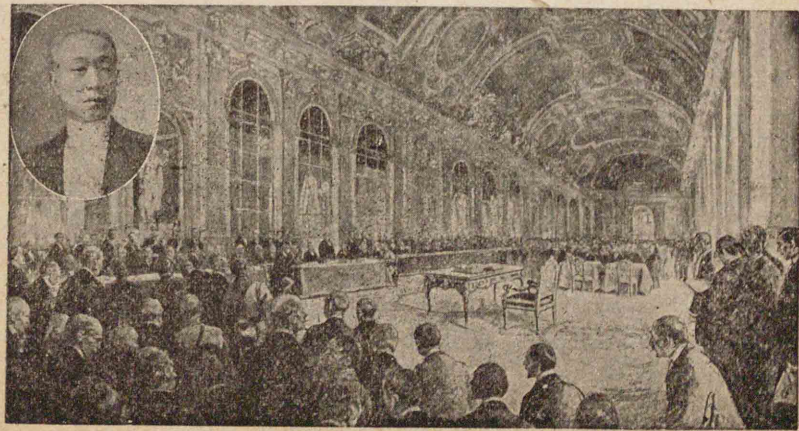
大正八年六月
ヴェルサイユ宮
殿の間に於
ける調印式の光
景

立 國際聯盟の成

が屈して和を請うたから、列國の全權委員は巴里に講和會議を開き、わが國は西園寺公望等を派遣した。翌八年、講和條約が成立し、わが國は、膠州灣及び獨逸が山東省に於て有してゐた種々の利權を受けつぎ、且つ赤道以北の舊獨逸領南洋諸島の委任統治權を得た。

またこの條約中には國際聯盟が規約され、わが國はその主要聯盟國の一つとして活躍することとなつた。

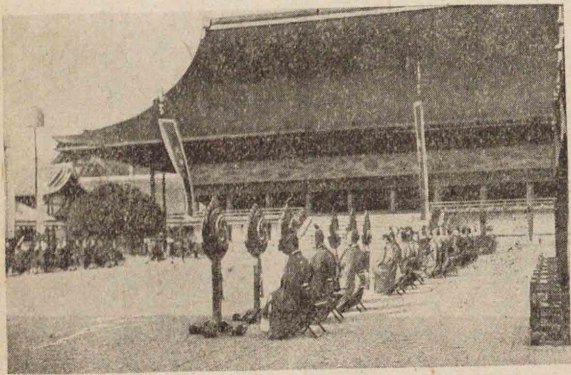
ワシントン會議 世界大戰の後も、列國が競つて軍備に力を傾けたので、大正十年、米國大統領ハーディングの提唱によ



ヴェルサイユ講和條約調印の光景と西園寺公使

軍備比率
日……三
英……五
米……五

皇太子の攝政
大正天皇の崩
御



今上天皇御即位の式

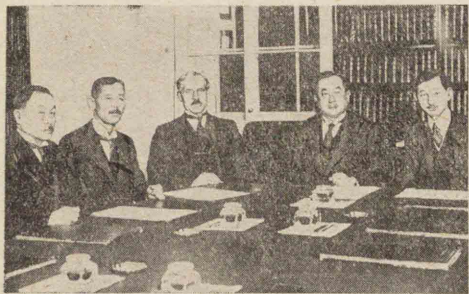
り、列國全權はワシントンに集り、軍備縮小會議を開いた。わが國は海軍大臣加藤友三郎等を列席させた。その結果、日・英・米・佛の五大海軍國は比率を定めて海軍軍備を制限し、日・英・米・佛の四國は四國條約を結んで、太平洋方面に於ける各自の屬領・島嶼に關する權利を互に尊重することと約し、日英同盟は廢棄することとなり、また以上五大國に支那・白蘭葡を加へた九國は、支那の主權領土を尊重する九國條約を結び、更に日支間に山東問題を解決した。

四 今上天皇の御即位 今上天皇はまだ皇太子の御時、英・佛・白蘭伊の諸外國を御巡遊あらせられ、御歸朝の後、攝政の大任につかせられたが、同十五年十二月、大正天皇が崩

御遊ばされたので、直ちに御踐祚あらせられて昭和と改元し、昭和三年十一月京都で御即位の大禮を挙げさせられた。

五 わが國の世界的地位 わが國は明治以來、列國と友誼を厚くし、常に平和を保つことを以て任としてゐたので、昭和二年にジュネーヴで海軍軍備縮小會議が開かれた時にも、わが國は進んでこれに参加し、

國際的地位の向上
右二人目より松平全權・マクドナルド英國首相・若槻全權・財部全權



ロンドン會議

ついて昭和五年にはロンドンに會して、補助艦等に對する協定を遂げた。かくてわが國はいよいよ國際的地位を高め、もはやわが國を除いては世界の重要問題を解決することが出来なくなつた。

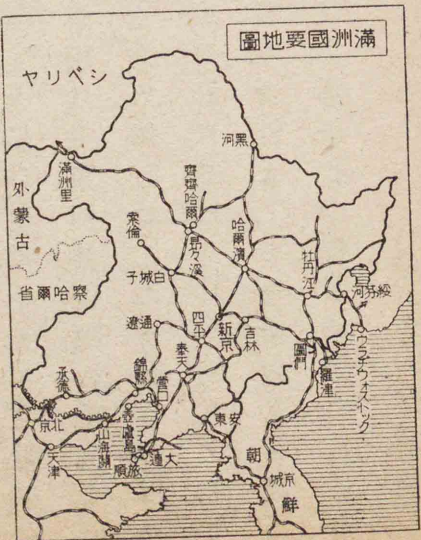
六 極東の形勢 支那は中華民國の成立後も、常に政局不安であつたから、列國はこの國情の不安に乗じ、互にその勢力を扶植せんとした。た

滿洲事變
上海事變

滿洲國の獨立

わが國の聯盟
脫退宣言

まゝ支那の無暴な抗日^{フニチ}侮日の氣勢は漸く高まり、遂にわが生命線たる滿洲に於けるわが權益を侵したので、ここに滿洲事變が起り、ひいて上海事變となり、世界外交上の大問題となつた。然るにかねてより虐政に悩んでゐた滿洲と内蒙古の一部とは、合同して獨立運動を起し、遂に昭和七年三月その目的を達し、滿洲國を建設した。わが國はその獨立を承認してこれを援助したが、國際聯盟は東洋の實狀に暗く、わが主張と相容れず、滿洲國の獨立を認めなかつたので、昭和八年わが國は遂に聯盟脫退を宣し、なほ世界平和のために盡すこととなつた。その後滿洲國の基礎は漸く安定し、昭和九年三月帝政を布き、溥儀執政は皇帝の位に即いた。



然るに中華民國の抗日はいよ／＼熾となり、昭和十二年七月には遂に支那事變を引き起した。よつてわが國は東洋平和のため大陸に出兵し支那の諸要地を占領した。この間、南京には汪精衛の國民政府が成立し、わが國と提携して共存共榮の實を擧げんとしてゐる。

國民の覺悟 わが國は、昭和九年十二月にワシントン條約の廢棄を通告したが、世界の平和を脅かす主義運動に對しては協力防衛に當る方針をとり、獨逸、伊太利と防共協定を結び、更に十五年九月には三國間に同盟を締結した。今やわが國は大東亞共榮圈の確立を計り、東洋諸國、諸民族の平和安泰を得るために努めてゐるが、この目的達成は容易な業ではない。この喫緊の秋に於ける日本婦人としての使命は重且つ大である。我等は日本女性として一層教養を高めると共に、内は國運の隆昌を計り、外は世界平和の建設に努めなければならぬ。

(をはり)

(附録)

皇室御略系

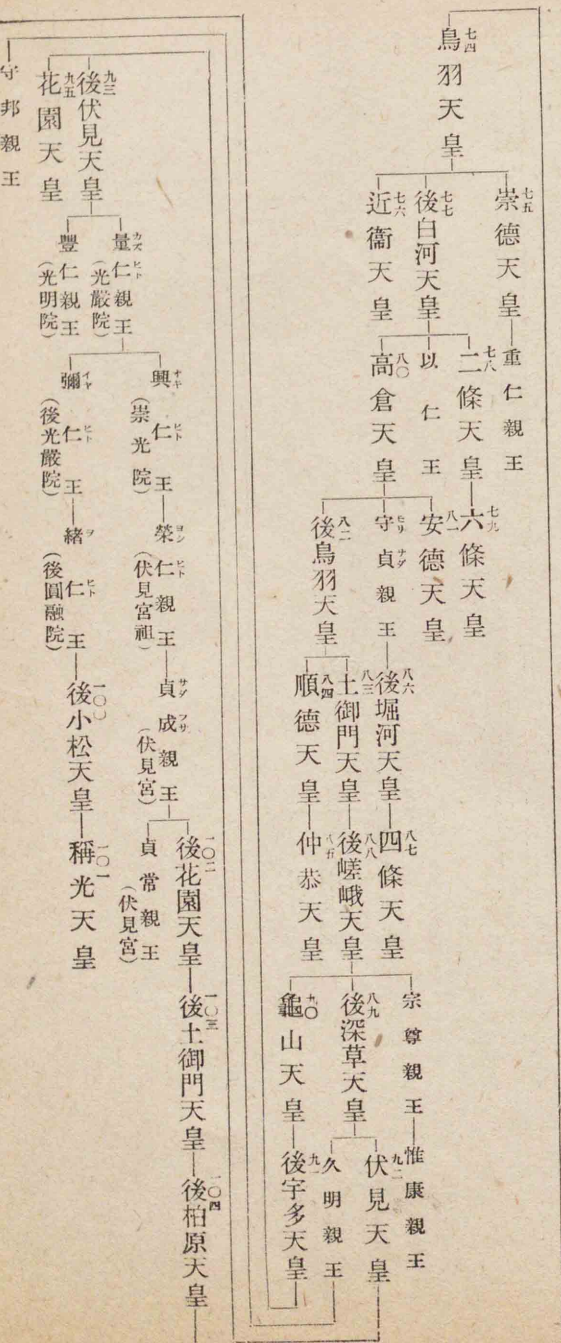
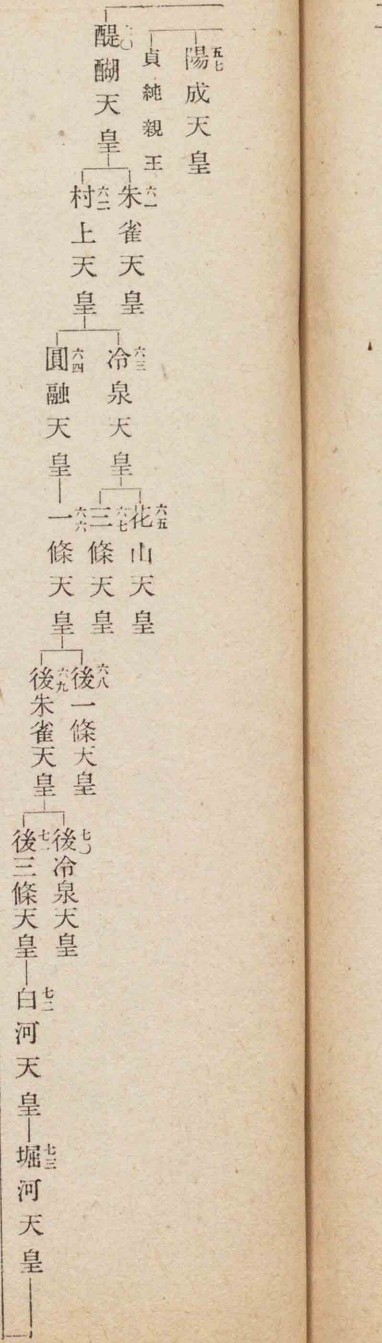
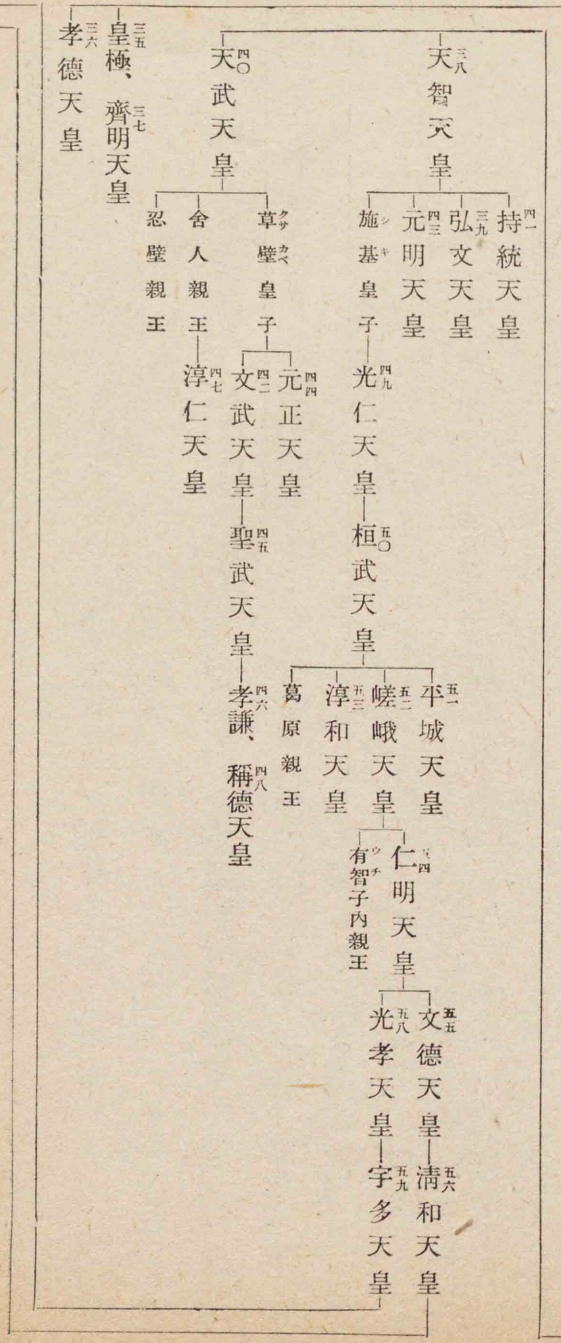
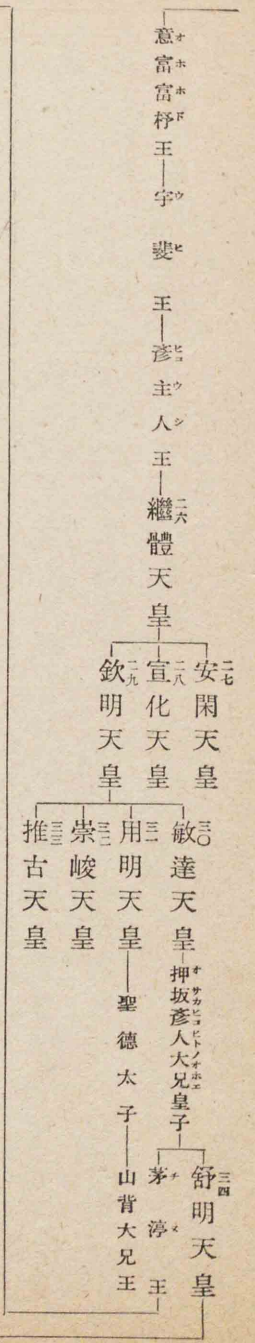
天照大神・天忍穗耳尊・天津彦彦火瓊瓊杵尊・彦火火出見尊・彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊
 神武天皇・綏靖天皇・安寧天皇・懿德天皇・孝昭天皇・孝安天皇・孝靈天皇・孝元天皇
吉備津彦命

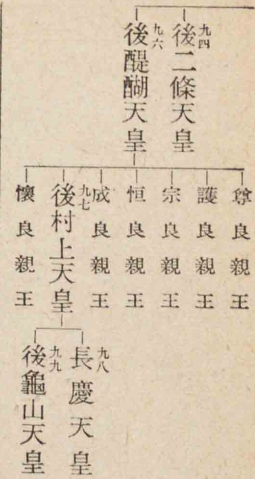
大彥命・武渟川別命・豐城入彦命・豐城入姬命
 開化天皇・崇神天皇・垂仁天皇・景行天皇・成務天皇
日本武尊 仲哀天皇 應神天皇 菟道稚郎子 稚野毛二派皇子

彦狹島王 御諸別王

履中天皇・市邊押磐皇子・仁賢天皇・武烈天皇
 反正天皇・顯宗天皇
 允恭天皇・安康天皇
 雄略天皇・清寧天皇

附録 皇室御略系

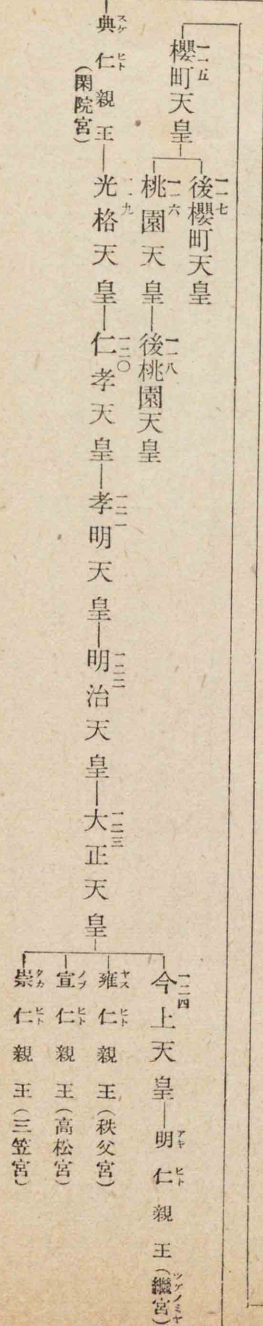




後奈良天皇 (一〇五) 正親町天皇 (一〇六) 誠仁親王 後陽成天皇 (一〇七) 後水尾天皇 (一〇八)

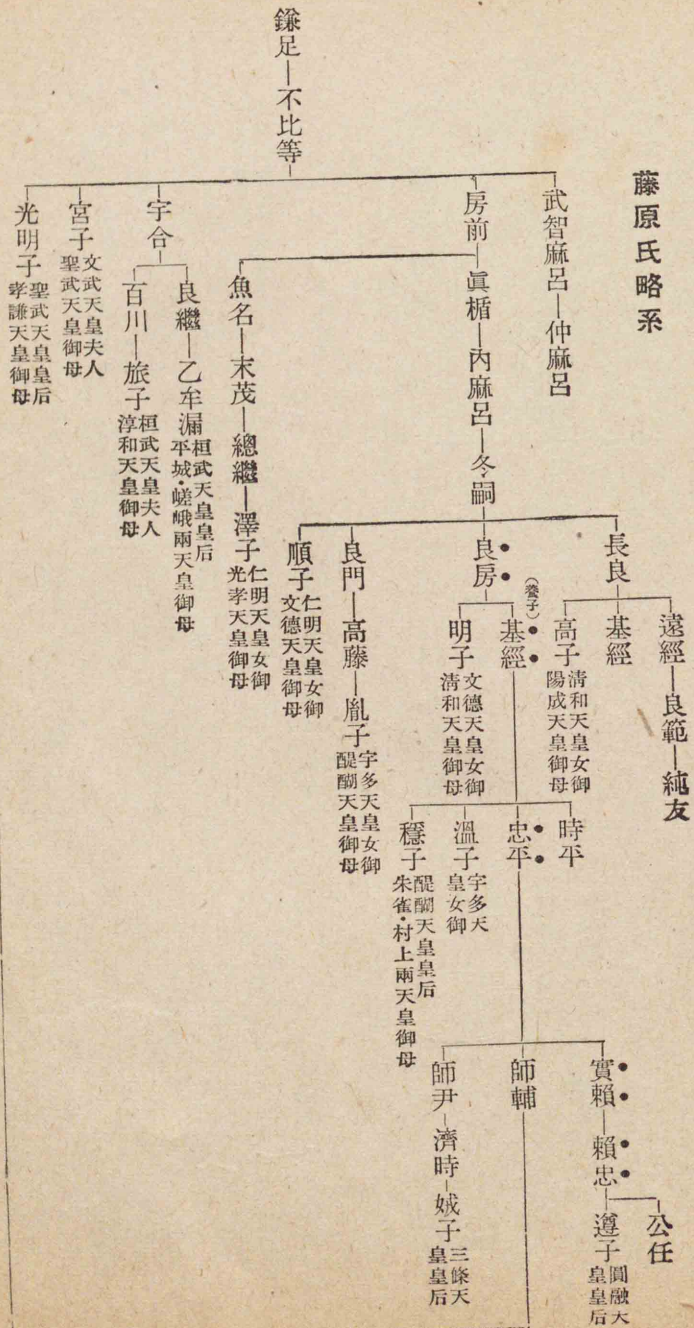
明正天皇 (一一〇) 後光明天皇 (一一〇) 後西天皇 (一一一) 靈元天皇 (一一二)

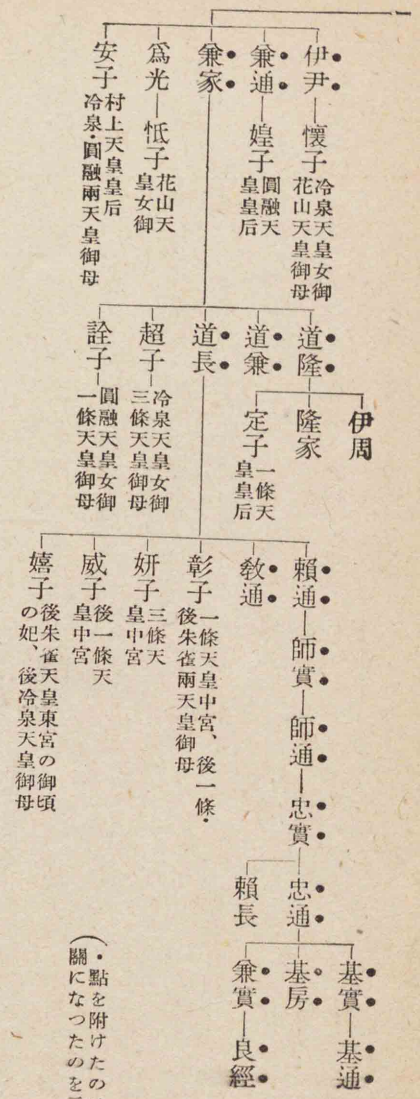
東山天皇 (一一三) 中御門天皇 (一一四) 職仁親王 (有栖川宮) 直仁親王 (閑院宮祖)



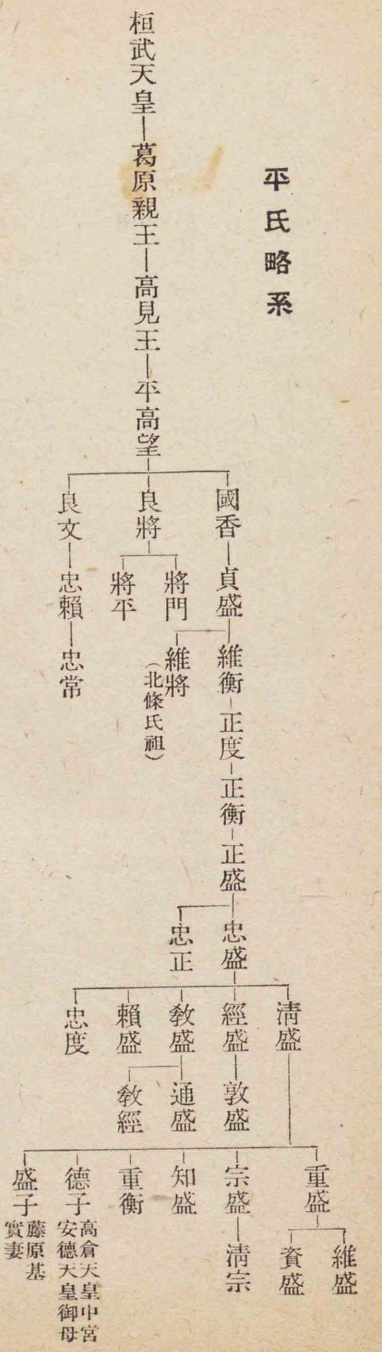
諸氏略系

藤原氏略系

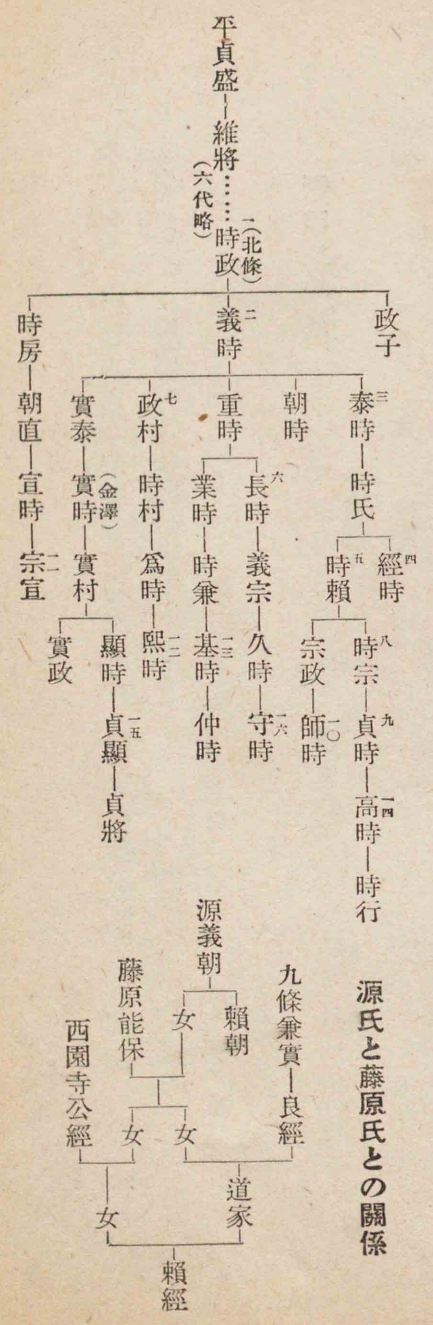




平氏略系



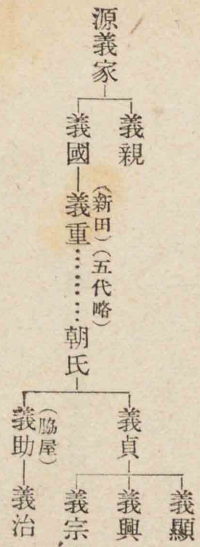
北條氏略系 (數字は執權代数を示す)



鎌倉將軍略系



新田氏略系



楠木氏略系



北畠氏略系

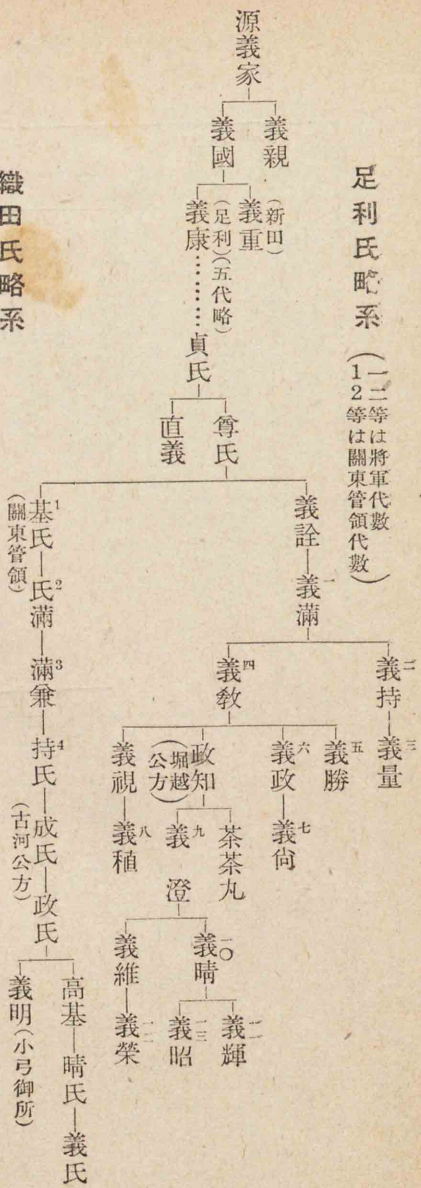


菊池氏略系



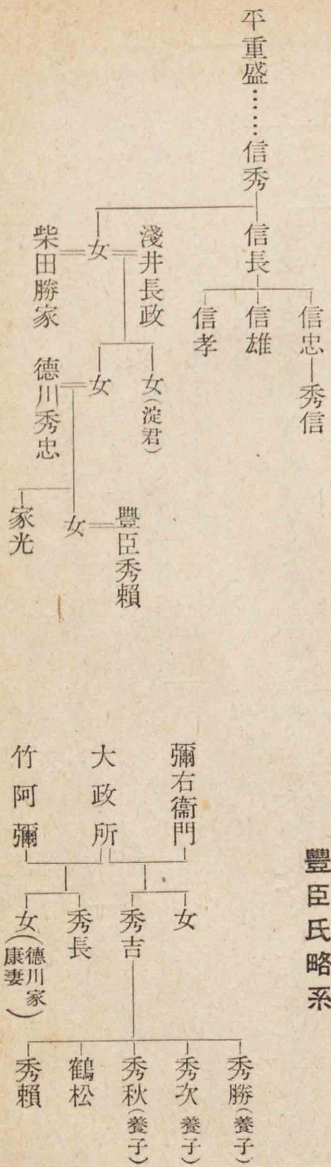
足利氏略系

(一、二等は將軍代數 1、2等は關東管領代數)



織田氏略系

豐臣氏略系



代時革改制法				代時權專氏我蘇			
文 ⁴²	天 ³⁸	齊 ³⁷	孝 ³⁶	皇 ³⁵	舒 ³⁴	推 ³³	崇 ³²
文武	智	明	德	極	明	古	峻
大寶元 八	七	六	同 二	大化元 四	二	元	二
一三一	一三九	一三七	一三〇六	一三〇五	一三〇	一三〇	一三〇
大寶律令成る	藤原鎌足薨す	近江令成る○(高句麗亡ぶ)	都を近江大津宮に遷す	改新の詔下る	阿倍比羅夫蝦夷を伐つ	百濟救援のために九州に行幸○朝倉の宮に崩御	百濟滅ぶ
蘇我氏滅ぶ	始めて年號を立つ	聖德太子薨せらる	犬上御田歛を唐に遣はす	小野妹子を隋に遣はす○法隆寺を建つ	隋使來る○妹子再び隋に行く	憲法十七條を定む	冠位十二階を定む
聖德太子を攝政となす	冠位十二階を定む	憲法十七條を定む	小野妹子を隋に遣はす○法隆寺を建つ	隋使來る○妹子再び隋に行く	聖德太子薨せらる	犬上御田歛を唐に遣はす	阿倍比羅夫蝦夷を伐つ
百濟救援のために九州に行幸○朝倉の宮に崩御	百濟滅ぶ	蘇我氏滅ぶ	始めて年號を立つ	聖德太子薨せらる	犬上御田歛を唐に遣はす	小野妹子を隋に遣はす○法隆寺を建つ	隋使來る○妹子再び隋に行く

代時安平							
宇 ⁵⁹	醍 ⁶⁰	朱 ⁵⁵	村 ⁶²	後 ⁶³	後 ⁷⁰	後 ⁷¹	堀 ⁷³
宇多	醍醐	朱雀	村上	後一條	後冷泉	後三條	堀河
寬平六 一五五四	延喜元 一五六一	同 一五六五	同 一五六七	同 一五六七	同 一五六七	同 一五六七	同 一五六七
遺唐使を廢止す	菅原道真左遷さる	紀貫之ら古今和歌集を上る	唐滅ぶ	(高麗國起る)	平將門平國香を殺す○新羅亡ぶ	將門及び藤原純友叛す	將門誅せらる
藤原純友誅せらる	(宋起る)	藤原道長攝政となる	道長薨す	藤原頼通鳳凰堂を建つ	藤原頼通鳳凰堂を建つ	前九年の役平定す	記録所を置く
院政の始(白河上皇)	後三年の役平定す	鳥羽上皇の院政始まる	保元の亂	保元の亂	保元の亂	保元の亂	保元の亂

代時安平				代時倉謙			
二 ⁷³	六 ⁷⁹	高 ⁸⁰	安 ⁸¹	後 ⁸²	土 ⁸³	順 ⁸⁴	順 ⁸⁴
二條	六條	高倉	安德	後鳥羽	土御門	順德	順德
平治元 一八一	仁安二 一八二	治承元 一八三	同 一八四	同 一八四	同 一八四	同 一八四	同 一八四
平治の亂	平清盛太政大臣となる	藤原成親らの陰謀	平重盛薨す	源氏の舉兵○頼朝待所を置く	一谷の戦○頼朝政所問注所を置く	犀島の戦○壇浦の戦○平氏滅ぶ	頼朝守護・地頭の設置を許さる
頼朝の奥州征伐	榮西宋より歸朝して臨濟宗を傳ふ	頼朝征夷大將軍に任ぜらる	頼朝建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ
頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ
頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ	頼家建仁寺を建つ

代時安平				代時良奈			
宇 ⁵⁰	清 ⁵⁶	文 ⁵⁵	嵯 ⁵²	平 ⁵¹	桓 ⁵⁰	光 ⁴⁹	稱 ⁴⁵
宇多	清和	文德	嵯峨	平城	桓武	光仁	稱徳
同 二	同 二	同 二	同 二	同 二	同 二	同 二	同 二
仁和三	同	天安元	弘仁元	大同元	同	延暦三	寶龜元
一五七	一五八	一五七	一四七〇	一四六六	一四六二	一四四〇	一四三〇
藤原基經關白となる	良房攝政となる	藤原良房太政大臣となる	空海歸朝して眞言宗を傳ふ	藏人所を置く	空海金剛峰寺を建つ	坂上田村麻呂蝦夷を平ぐ	最澄歸朝して天台宗を傳ふ
平安奠都	道鏡を貶し清麻呂を召還す	和氣清麻呂大隅に流さる	東大寺建立	諸國に國分寺を建てしむ	藤原光明子を皇后となす	渤海始めて朝貢	日本書紀成る
風土記を撰せしむ	大安萬侶古事記を上る	奈良奠都	奈良奠都	奈良奠都	奈良奠都	奈良奠都	奈良奠都

江戸時代										
後西 ¹¹	靈元 ¹²	東山 ¹³		中御門 ¹⁴			櫻町 ¹⁵	桃園 ¹⁶	後櫻町 ¹⁷	
寛文元	延寶八	貞享四	元祿一	同八	同八	享保元	同七	同七	同七	
二二二	二二四〇	二二四七	二二五〇	二二五五	二二六二	二二七三	二二八〇	二二八三	二二八七	
(清、支那を統一す)	家綱薨じ綱吉將軍となる	生類憐れみを出す	綱吉聖堂を湯島に興す	貨幣を改鑄して質を悪くす	赤穂義士の復讐	家宣將軍となる	家綱將軍となる	吉宗將軍となる	洋書輸入の禁を弛む	
安永元	天明三	同七	同八	寛政四	同五	同六	同七	同八	同九	
二四三	二四四三	二四四七	二四四八	二四五二	二四五三	二四六〇	二四六四	二四六六	二四六八	
田沼意次老中となる○江戸大火	淺間山噴火○諸國饑饉	家齊將軍となる○松平定信老中となる	京都大火皇居炎上	林子平罪せらる○昌平校を造營す○ラックスマン來朝	定信沿岸を巡視○高山彦九郎自殺	本居宣長古事記傳を著す○近藤重藏	擇捉島を開拓	伊能忠敬蝦夷地測量	露使レサノフ來朝	露人蝦夷地に寇す
安政元	嘉永六	同一	同二	同三	同四	同五	同六	同七	同八	
二五三	二五三三	二五三三	二五三三	二五三三	二五三三	二五三三	二五三三	二五三三	二五三三	
米・露二國と和親條約を結ぶ	ハリス來る	外船船撃攘令を下す	大鹽平八郎の亂○家慶將軍となる	渡邊華山・高野長英罪せらる	忠邦職を退く	ペリー及びバッチャン來朝○家定將軍となる	外船船撃攘令を弛む	露二國と和親條約を結ぶ	西南の役○博愛社を設く○萬國郵便聯合に加入	

江戸時代										
明 ¹²²					孝 ¹²¹					
明治					明					
同九	同八	同七	同六	同五	同四	同三	同二	明治元	同三	同二
二五五	二五五	二五五	二五五	二五五	二五五	二五五	二五五	二五五	二五五	二五五
朝鮮と修好條約を結ぶ○神風連の變○秋月秋の亂	千島・樺太交換の約成る	臺灣征伐	民選議院設立の建白○佐賀の亂起る○	英佛・獨米に公使を派遣	慶藩置縣○清國との修好通商條約成る	米派遣	京濱間の鐵道成る○學制頒布	太陽曆を用ふ○徵兵令頒分○岩倉具視	歸朝○征韓論破る	民選議院設立の建白○佐賀の亂起る○
同四	同三	同二	同二	同二	同二	同二	同二	同二	同二	同二
二五七	二五七	二五七	二五七	二五七	二五七	二五七	二五七	二五七	二五七	二五七
日英同盟改訂	日露協約成る	日英同盟成る	北清事變	日英同盟成る	日露開戦	日英同盟擴張○日露の講和	日英同盟改訂	日英同盟改訂	日英同盟改訂	日英同盟改訂
同三	同二	同二	同二	同二	同二	同二	同二	同二	同二	同二
二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三
西南の役○博愛社を設く○萬國郵便聯合に加入	府縣會を開く○米國前大統領グラント來朝す	國會開設の請願	國會設立の詔下る○板垣退助ら自由黨を組織	朝鮮京城の變起る	朝鮮京城の變起る	天津條約締結○日本郵船會社設立○内閣制度を定む	市制及び町村制公布	帝國憲法及び皇室典範發布	府縣制を布く○教育勅語下賜○第一回帝國議會開會	日英通商條約調印(條約改正に始めて成功)○日清開戦

昭和時代		大正時代	
今 ¹²⁴ 上		大 ¹²³ 正	
同三	支那事變起る○南京占領(十二月)	明治	二五三 (清亡び支那共和國起る)○天皇崩御
同二	支那事變起る○南京占領(十二月)	大正元	二五三 天皇御踐祚○大正と改元
同九	支那事變起る○南京占領(十二月)	同三	二五四 對獨宣戰詔勅下る○青島占領
同八	支那事變起る○南京占領(十二月)	同四	二五五 日支條約調印○即位の大禮を擧げらる
同七	支那事變起る○南京占領(十二月)	同七	二五六 シベリヤ出兵
同六	支那事變起る○南京占領(十二月)	同八	二五九 對獨講和條約成る
同五	支那事變起る○南京占領(十二月)	同一〇	二五八 皇太子御外遊○ワシントン會議閉會
同三	支那事變起る○南京占領(十二月)	同三	二五三 關東大震災○國民精神作興の詔下る
同二	支那事變起る○南京占領(十二月)	同五	二五六 天皇崩御
同二	支那事變起る○南京占領(十二月)	昭和一	二五六 天皇御踐祚○昭和と改元
同二	支那事變起る○南京占領(十二月)	同二	二五七 ジュネーヴ軍縮會議開かる
同三	支那事變起る○南京占領(十二月)	同三	二五八 不戰條約調印○陪審法實施○即位の大禮を擧げらる
同五	支那事變起る○南京占領(十二月)	同五	二五九 ロンドン海軍條約調印
同六	支那事變起る○南京占領(十二月)	同六	二五九 滿洲事變
同七	支那事變起る○南京占領(十二月)	同七	二五九 上海事變○滿洲國獨立○滿洲國承認
同八	支那事變起る○南京占領(十二月)	同八	二五九 國際聯盟退脱の詔書下る○皇太子御誕生
同九	支那事變起る○南京占領(十二月)	同九	二五九 (滿洲國帝政實施)
同二	支那事變起る○南京占領(十二月)	同二	二五六 ロンドン軍縮會議より脱退す
同三	支那事變起る○南京占領(十二月)	同三	二五六 支那事變起る○南京占領(十二月)
昭和時代		大正時代	
今 ¹²⁴ 上		大 ¹²³ 正	
同三	支那事變起る○南京占領(十二月)	昭和	二五六 徐州占領(五月)○張鼓峰事件○廣東占領(十月)○漢口占領(十月)○日獨文化協定の成立
同四	支那事變起る○南京占領(十二月)	同四	二五九 海南島攻略(二月)○日伊文化協定の成立○南昌占領(三月)○ノモンハン事件○米國、日米通商條約の廢棄を通告○南寧占領(十一月)
同五	支那事變起る○南京占領(十二月)	同五	二六〇 (中華民國新國民政府成立)○宜昌占領(六月)○佛領印度支那へ進駐○日獨伊三國同盟の成立○中華民國新國民政府を承認
同六	支那事變起る○南京占領(十二月)	同六	二六〇 タイと佛領印度支那間の國境紛争を調停○日ソ中立條約の締結

女子國史教科書
〔初級用〕

定價金壹圓貳錢

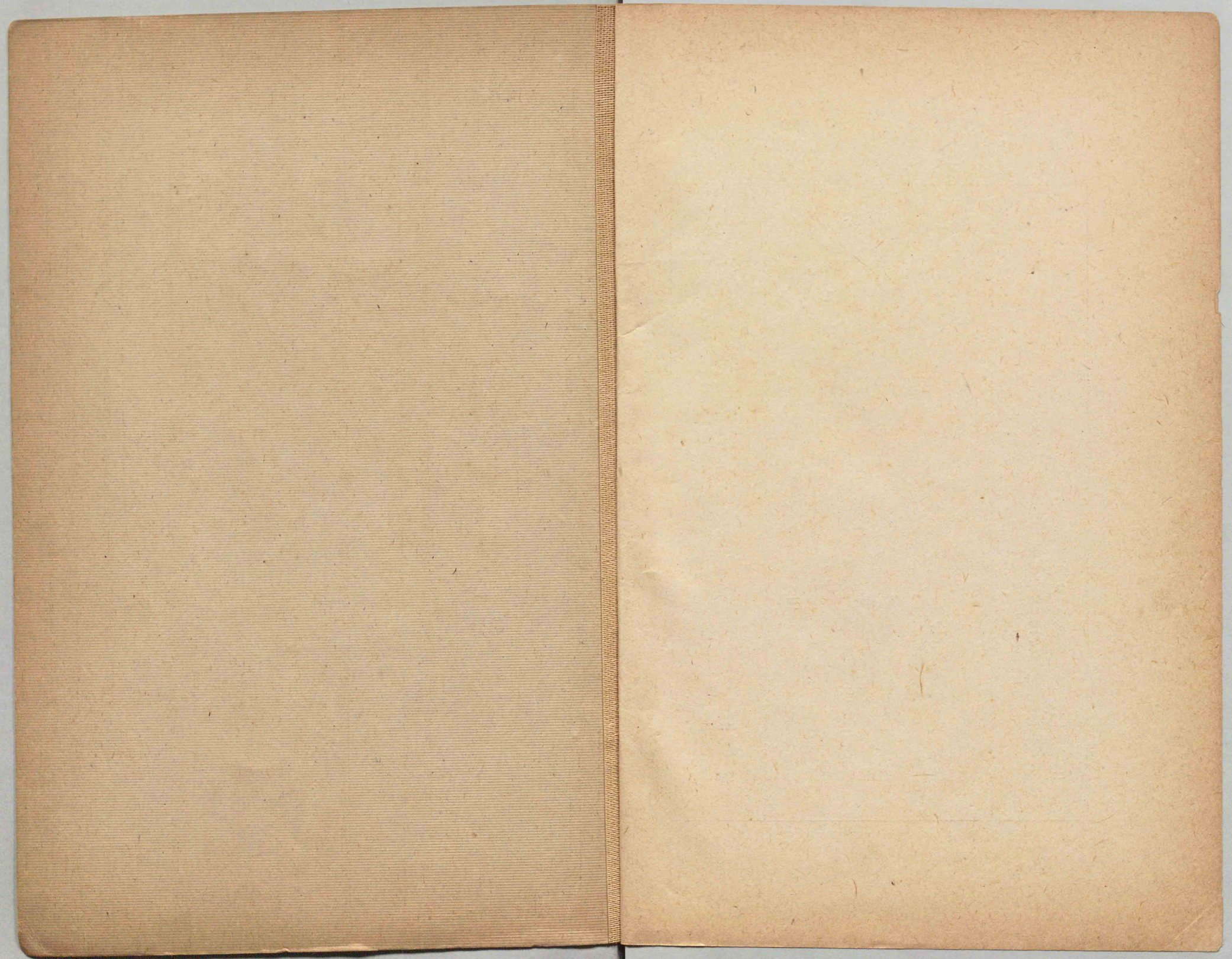


大正元年十月二十六日印
大正元年十月二十九日發行
大正十四年一月四日訂正十版發行
昭和十一年五月三十一日修正十五版發行
昭和十三年二月二十二日訂正十八版發行
昭和十四年十月十七日修正十九版發行
昭和十六年八月十日修正二十版發行

著者 三浦周行
補訂者 松本彦次郎
發行者 東京市麴町區飯田町二丁目二十番地 中等學校教科書株式會社
代表者 山本慶治
印刷者 東京市小石川區西江戶川町二十一番地 富士印刷株式會社
代表者 佐藤精亮

發行所

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號 一一七五二二



家二大田葉子

庫
1
50

広島大学図書

2000071550

